



* 0050059000 *

0050059-000

特231-740

中学国文教科書教授備考

光風館編輯所・編

光風館書店

卷10

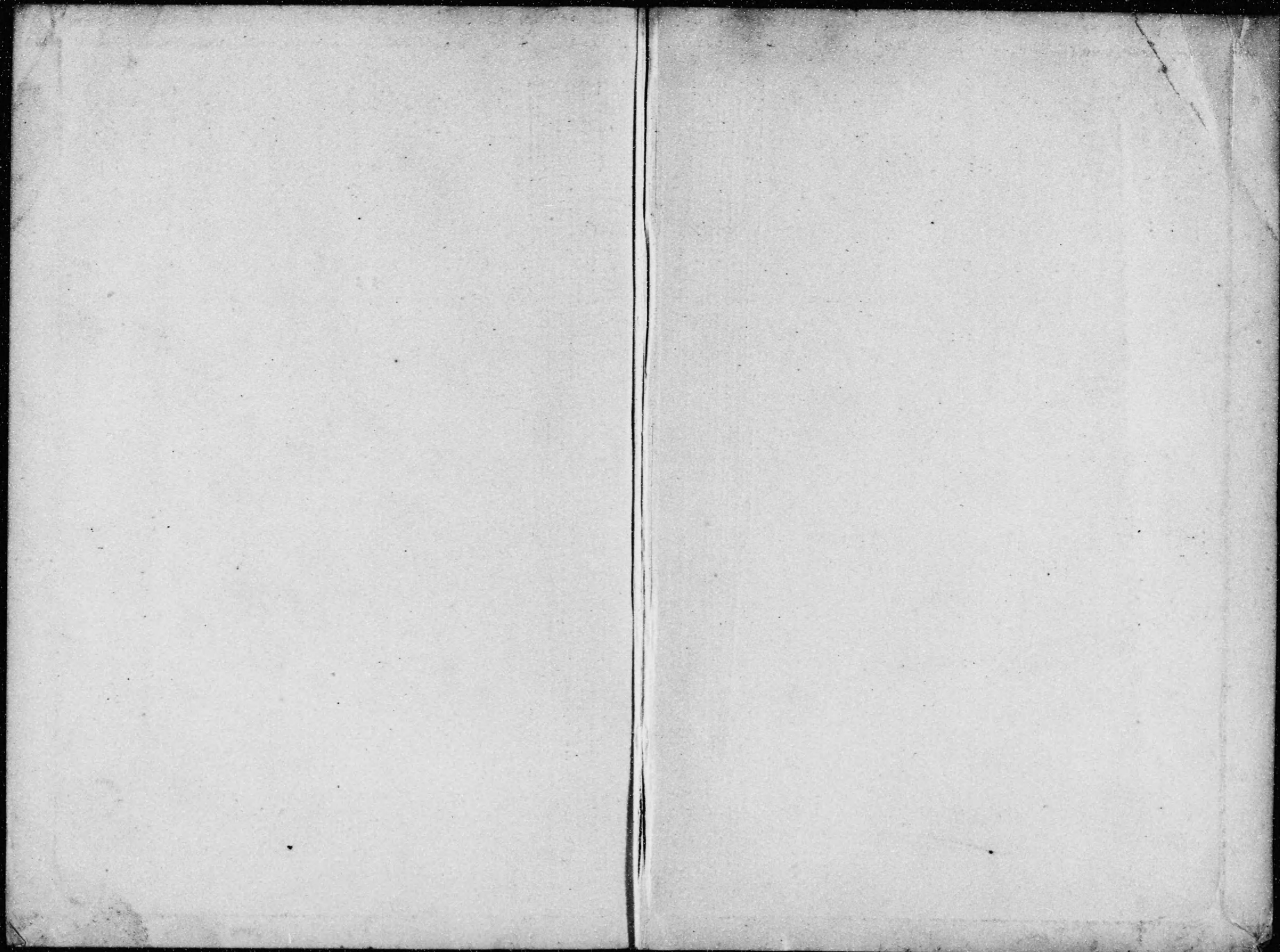
修正3版

昭和7

AHJ

386

43



特 231
740



教科書教授備考

卷

十



修正三十一版用

東京 光風館藏版

中^レ國文教科書教授備考の改訂について

今回教科書の修正に際して本書は文體をすべて口語に書きなほし尙記事の内容體裁を次のやうに改めました。

一 解題

その課の名義由來出典原文との關係について、その課に必要と思はれる程度の解説をいたしました。

二 作者

こゝでは例へばその作者が文學者ならば、その文壇上の位置作風主なる著書などについて略述しました。學者評論家などについても亦同じ要領で記しました。小傳は教科書の頭註を補ふに足りる事項を擧げることになりました。

三 主眼

その一篇の生命とし、眼目とし、ねらひどころと考へられる點を述べました。内容形式の兩方面から考へたことは勿論ですが、それを一々斷ることは強ひて致しませんでした。すべての文章が内容と形式との上から、別々の目的を有してゐるとは見られませんし、或文章に

於ては、全然離して考へることが許されないからであります。

又、或場合には、特に編者がその篇を採録した理由なども述べることにいたしました。

四 概説

その一篇の構造又は大意、各節の要領、小説戯曲の類の節録では、原文とその課との關係を、解題と重複せぬやう、必要に応じて略記しました。こゝに節といふのは構想上の一段落をさしたものであつて、必ずしも行の改るところが節の改るところであるといふわけではありません。又その意味から節と段との區別も殊更に立てませんでした。

五 語句の解釋附文法修辭法上の吟味

語句の解釋については、

不_レ成るべくその課その場所に適切な解をするやうにと力を用ひ、餘り枝葉に亙つたことやそこに縁遠いやうなことは記さないでおきました。

平易に過ぎるやうな語句でも、生徒にどのやうに言つたらよからうかと、一寸首を傾けられるやうなものは、矢張り掲げて一通りの解を附けてみました。

文法修辭法についても、餘り深入りはしないで、唯その處を生徒に十分會得させ、味はせ得る程度に止めました。尙修辭法については、主眼や概説や本文下欄に書きつけたことと關係連絡は保つが、重複は避けるやうにと氣を付けました。従つて、この項中で説く文法や修辭

法は、たゞ局部的に言ふことだけにしました。それで大方は、語句の解釋中に混へ説くことにしましたが、必要に応じては、別に終へ一項を設けて説いた所もあります。要は形式に囚はれることなく、たゞ参考に都合のよいやうにと努めたまでであります。

挿畫について説明を要すると思はれるものは、此の項の後に附説することになりました。(順序としては語句の解釋文法修辭法等の事は、全文概説の次に來るべきですが、自然頁數の嵩む場合も多いので、御覽の便宜を慮つて、最後に掲げることになりました。)

六 取録上の用意

主眼の項で言及した以外の、その課の部分的特色、鑑賞乃至批評すべき箇處について述べました。或は單に讀後の感想、印象といふほどのことも記しました。或は創作心理の考察といふやうなことを試みたところもあります。しかし、これらの記述が簡單な言葉ですまされる時は、それを本文の下欄に註するのみに止めておいた場合もあります。およそこれらのことがらは、その課を取扱ふ上に、特に豫め用意してかゝらねばならぬことであらうと存じましたので、この項目の下に一括したのであります。

固より教授者の趣味、教養、個性に因つて、その見られるところがそれ／＼異なりもしませうから、こゝには唯編者の意見を御参考に供するに過ぎないのであります。

七 備考

以上の各項で述べべきことながら、やゝ微細に互ること、或は比較的直接緊要ならぬこと、凡てその各項に掲げることの却て煩雜を來たす虞あることは補遺的にこの項に載せることにいたしました。

八 教科書の本文

には、括弧して段落を示し、また圈點を施し、特に下欄を設けて批評鑑賞上の注意すべき諸點を一目の下に判然ならしめ、更に内容上の註釋をも加へて御参考に供するやうにと工夫いたしました。その下欄の註で疑問體のは、生徒への發問を豫想して試みたのであります。以上は本書に於ける記載の體裁方針の大體であります。教科書中の全部の課が必ずしもこの各項目を悉く必要とするわけでは固よりありませぬので、編者は然るべく取捨して、徒に項目に囚はれることを避けました。特に概説と批評鑑賞に類したことは、之を別々に記しますと、反つて不便で不自然なこともありますので、さういふ場合には、概説と取扱上の用意とを並記いたしましたのもあります。

幸に大方の御批評を仰ぐことが出來ますならば、編者の光榮とするところであります。

昭和六年十一月

光風館編輯所

中學國文教科書教授備考 卷十

目次

一	國文學の精神	久松潜一	一
二	倭建の命	〔古事記〕	三
三	古事記を讀みて	相馬御風	四
四	寧樂の匂	〔萬葉集〕	五
五	歌の調子	島木赤彦	六
六	土佐日記鈔	紀貫之	一三
	出立ち		一三
	海の上		一三

都入り	一六
枕草子鈔	一六
春は曙	一七
はくきもの	一八
源氏物語	一八
藝術の鑑賞	一九
石彫獅子の賦	一九
御堂關白の幼時	二〇
法成寺の造營	二二
光頼卿の參内	二三
世界の四聖	二四
光あれ	二五
清少納言	一六
五十嵐力	一六
厨川白村	一九
薄田泣菫	二〇
〔大鏡〕	二三
〔榮華物語〕	二七
〔平治物語〕	二八
高山樗牛	二九
姉崎嘲風	二九

おのが物まなび	三〇
小品二章	三九
知足庵の記	三三
旅泊	三三
鼠の文づかひ	三七
馬追三吉	三九
西鶴と近松	三九
永遠の生命	三七
光は日本より	四〇
神勅は輝く	四一
勅語	四九
本居宣長	三〇
村田春海	三三
中島廣足	三三
井原西鶴	三七
近松門左衛門	三九
佐々醒雪	三七
互理章三郎	三七
高須芳次郎	四〇
中村孝也	四一

目次終

中國文教科書教授備考 卷十

一 國文學の精神

一 解題

久松潜一著「上代日本文學の研究」の「日本文學の精神」の項より抄出。該書は昭和三年十二月刊、東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地至文堂發行。上代文學及中古文學の本質研究、上代文學の研究史等を收めてある。

二 作者

久松潜一 ヒサマツセンイチ。愛知縣の人。大正八年東京帝國大學國文科出身。現在東大助教授。上代文學及び文學史方面の研究者である。本書の外に「萬葉集の新研究」の著がある。又契沖全集の中の第九卷傳記及傳記資料は氏の手に成る。

三 主眼

國文學の根本に潜む精神を「まこと」もののははれ「幽玄」の三と觀て、それ／＼の本質を、上代・平安朝・鎌倉・室町・江戸の各時代に現れた文學上の作品を辿りつゝ究明した論文である。國文學の研究、特に文學史的研究を列傳的に又書史學的にのみ見ず、思潮の上から、精神の流れの述べげから見て、内面的にわれ／＼の生命の把握に資さうとする著者の文學觀のコンデンスである。

四 概説

第一節 一篇の序。國文學の精神にはもてあそびと考へられる分子を除いた「まこと」「もののははれ」「幽玄」の三がある。

第二節 「まこと」は上代文學に現れて國家的精神と個人的精神の形を取り、一元的・綜合的・積極的・具象的

である。而して文學史上には復古精神がそれである。

第三節 「ものあはれ」の本質の考察からすゝんでその「ものあはれ」が形となつて現れたと考へらるゝ平安朝の文學に言及して居る。

第四節 「幽玄」の精神の考察。宗教的・壯大感の中に繊細をふくむ感。それが文學の型と現れ、閑寂として現れる實例を俊成・西行・兼好・芭蕉の作品によつて示す。
第五節 以上三つの理念は各、獨立のものでなく、展開の過程である。この展開流動の精神の統一が國文學の精神であると結ぶ。

五 取扱上の注意

國文學に對する本論文の考察は著しく哲學的である。國文學の根柢に流るゝ精神を辿るのであるから、一種の文

學史であるが、それは從來の文學史と種類を異にする。即ち文學的事實として敘述し並列するのでなく、その裡に閃く精神の把握によつてわれ／＼自身の精神生活に資さうとする意欲に出發して居る。自己の生命を以て、國文學の生命に向つて居るとも言へる。本篇はかうした意味の文學史であつて哲學的論文や又書史的文學史とは異なることを先づ考へておかねばならぬ。従つて本篇の論旨は從來の文學史の説くが如き一般妥當性に於て多少缺く對する一つの見方を指示するのが目的である。教養ある感覺と哲學的思索と外國文學論によつて指示された文學精神把握の觀點、さうしたものから出發した作者の態度を理解してかゝらねばならぬ。

一 國文學の精神

久松潜一

國文學の精神は何であるか。或は月花をめでるといふ、優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れ

(1)もてあそぶ心持である。

久松潜一
國文學者
東京帝國大學助
教授
明治二十七年愛
知縣生

ば、もつと⁽¹⁾生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まことと、ものあはれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。(第一節)

第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの即ち事實があるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學を貫く精神であると思はれる。これを内容的思潮の方面から見ると、そこに強い國家的精神と個人的精神とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自我神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心もちのまゝ古事記に表現されてゐるのである。

もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に着實なものとし

(1)國文學を眞に自分の生活のものとする精神。

第一節

(2)「まこと」の上代文學にあらはれた形に對する考察。特に古事記に於ける神。

人麿
柿本氏
持統文武兩帝の
御代の歌聖
皇子
天武天皇の御子
草壁皇子高市皇
子など

て映じたものがそのままに傳はつてゐるのである。
さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。
人麿は國家の建設を説き、神を歌つてゐるが、その中心は皇子の薨
去をいたむ哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる
愛をむけるやうになり、自然の中に身を投げ入れて、そこに自己と
自然と一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向つ
て情熱的な愛をうたひ、或はこの人生の享樂すべきをうたひ、或は
はかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きてい
かうとする、強い現實に發する愛をうたつてゐるのである。
(2)この素樸なまことの感情を中心とする上代人の物の見方を見つ
めていくと、第一に一元的綜合的である。神と人、自然と人をも一つ
のものとしてながめる。第二に率直にして積極的である。見方
が單純で、迂餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的で
ある。歌を詠むにも、目に觸れた事象を先づうたふ。對象がある
がまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの
精神は文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るの

(1)「まこと」の萬葉集に
あらはれた個人的精
神。

(2)國家的精神個人的精
神を通じての上代人
の「まこと」の性質。

(3)以上の「まこと」の精
神の文學史的發現は
何であるかを示す。

實朝
源氏
鎌倉三代の將軍
承久元年(一一七九)
薨
年二十八

である。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代
人の眞實性と素樸性に復ることがその精神である。例へば平
安末期に於て現實生活に頹廢と行きづまりとを生じたとき、實朝⁽¹⁾
は萬葉集の精神に復つてその素樸性と眞實性を求めたのであ
ると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現
れてゐる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめや
も

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづ
ねる

又自我をうたふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのま
まを見つめる、そしておりのまゝに表現するといふ態度が現れて
ゐる。(第二節)

第二に、ものあはれの精神は、ものの中に見出したあはれの精神⁽²⁾

(1)實朝をその例にとつ
て二首の歌をあげ具
體的に論旨を明かに
す。

第二節

(2)「あはれ」が能動的な
意識的なものである
ことをとらへた一
句。

本居宣長

國學四大人の一
伊勢國松坂生
享和元年(一八一六)
歿
年七十二

である。あるがまゝのものの上に見出したあるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるといへる。本居宣長は、ものあはれを源氏物語の基調であるとし、又平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。⁽¹⁾あるがまゝのものから、あるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に、あはれ、あなおもしろ、あなたのし。とある、あはれである。随つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から理智的傾向になる點がある。従つて強烈なる感情を沈靜にし、情趣化する事にもなる。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。平家物語は敘事詩的の物語であるが、勇壯な戦闘の間を色どつて流れてゐるものは、ものあはれの精神である。そしてそこに華

(1) 平安朝の文學の理智的となり、技巧となる根本精神である。

やかな勇壯な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。(第三節)

第三節

俊成

藤原氏
歌人
皇太后宮大夫
千載集の撰者
元久元年(一〇六四)
薨
年九十一
西行
俗名藤原義清
歌僧
建久元年(一一五〇)
寂
年七十三

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に、或、事關、神異、或、興入、幽玄、とあつて、本來はものあはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を論じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意な歌として、

ゆふされば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草のさとを擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつてその靜寂の境地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花かげにひそむ靜けさ、寂しさを見出したのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い即ち壯大といふ感情と、心が細い即ち繊細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。⁽¹⁾而してこの精神は、一步進めて考へると、近古文學を流れる傳統的

(1) 幽玄に入る出發點である。
(2) 幽玄の代表者俊成と西行。

(3) 幽玄の分析的考察。

(4) 幽玄は近古文學者の根柢に流るゝ精神。

精神や個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。即ち文學を個性的にそのまゝ表現せず、これを傳統の型の中に入れて、そこからいふ所にかけた上で表現するのである。大きな自由な精神を、型といふ窮屈な狭いものの中に入れ、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。⁽¹⁾これは徒然草に見える道といふ事によつてもわかる。愚にして慎めるは巧にしてほしいままなるにまさるといふのは、畢竟道は一の型の中に入れて精練して始めてすぐれたものとなると考へたのである。⁽²⁾そこに専門家を敬する心持が出で、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れる事によつて、その小さい我が否定された中から現れて来る大きな自然、こゝに幽玄が現れて来ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型の中に入つて、而も型に捉はれない自由な境地を見出して来るのではあるまいか。⁽³⁾それは最も小さいものの中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一の型の中に入れ

(1) 徒然草にあらはるる幽玄。

(2) 型の精神の眞意義。

(3) 能樂と型の精神。

非家 専門家ならぬ人
世阿彌 觀世元壽
室町時代に能を大成した天才
康正元年(二三三)歿
年八十一
芭蕉 松尾氏
徳川時代の俳聖
伊賀國上野生
元祿七年(二三四)歿
年五十一

て、その中に普遍的な人間性をあらはさうとしてゐる。非家では到底味はふことの出来ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神もやはりそこにあると思ふ。この⁽¹⁾幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると思つたのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。「高く心をさとりて俗にかへるべし。」といふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるところのさびや幽玄は、又藝術の窮極でもあつたのである。(第四節)

(1) 芭蕉にあらはれた幽玄。

第四節

(2) 「まこと」ものあらはれ「幽玄」はきれぎれの獨立ではない生命ある連続である。生長である。

かくの如く見るとき、まことともののはれと、幽玄とは一見異なつた理念のやうで、而も本質的な相違ではなく、展開のそれ／＼の過程である。まことが重心と素樸との藝術を生み出し、もののはれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として表さうとする、或點からいへば象徴的な藝術を生み出したかと思ふ。而して、是等の展開流動する精神を統一したものを、ここに國文學の本質が見出されるであらう。(第五節)上代日本文學の研究)

(1)この三つ理念の統一が國文學の精神である。

第五節

語句の解釋 附文法修辭法上の吟味

【生活の意味の深い】 第一行の「月花をめでる」に對する句。即ち美をもてあそび陶酔に浸る趣ではなくて、美に感ずるその心持が、直接われ／＼の生活精神にふれて來るといふ意味である。單なるたのしみでなくて、魂にふるゝもの、そこから人生の生活の出發出來る精神力に滲透するものの意である。

【まこと】 眞實無妄の意。

【思潮】 シテウ。其の時代一般に擴まつて居て、その中心をなし人心を支配して居る思想。

【古事記】 三卷。我が國現存の最古の史籍で開闢より推古天皇までの事を記してある。上卷は天御中主神以下鶉草葺不合尊以前、中卷は神武天皇以下應神天皇以前、下卷は仁德天皇以下推古天皇まで。

當時片假名・平假名の便がなかつたので、言辭を直ちに筆記することができず、故に文章は大體漢文の書きざまにし、歌謡其の他適當な所々は字音を假りて國語を其のまゝに録した。

本書は、諸家の舊記が年を経るに従ひ、虚偽にわたるに より、天武天皇が博覽強記なる稗田阿禮に舊事を誦み習はしめたまうたのを、元明天皇が和銅四年博士太朝臣安麻呂に仰せて阿禮より聞取り筆記せしめたまうたものといふ。和銅五年正月二十八日の序文がある。

(本文参照)

○古事記傳、古記典等總論に「前御代の故事しるせる記は何れの御代のころより有りそめけむ。書紀の履中天皇御卷に四年秋八月、始之於諸國置三國史記言事と有るを思へば朝廷には是よりさき既に史ありて、記されけむことを知られたり。そはその時々事どもこそあらめ、前代の事などまでは、如何ありけむ知らねども、既に當事の事記されたりは往昔の事、はた、語り傳へたらむまに／＼かつ／＼も記しといめらるべき物なれば、其の比よりぞ有りそめけむ。かく書紀修撰しめ給ひし頃は、古記ども多く有りつと見えたり。(彼神代卷に、一書とて取られたるが多きをもて知べし)小治田宮に御宇し天皇の御世、二十

八年に、聖德太子命、蘇我馬子大臣と共に天皇記及國記、臣連伴造國造八十部、且公民等本記を録し給ふたと書紀にある。是れぞ其事の物に見えたる始めにはありける。又飛鳥の淨御原宮に御宇し天皇の御代十年に川島皇子等十二人に詔おふせて、帝紀及上古諸事を記し、定しめ給ふとあり。然れども此の二つの記は、共に世に傳らず。こゝに平城宮御宇天津御代豐國成姫天皇御代和銅四年九月十八日に、太朝臣安萬侶に詔おふせてこの古事記を撰録しめ給ふ。同五年と六年の正月二十八日になむ其功終へて貢進りけると序に見えたり。然れば今に傳はれる古記の中には此の記ぞ最も古かりける。云々、

【神】 岩波哲學辭典による。

神といふ語の内容は甚だ複雑で、時によつて其の意味が一定しない。語源的に云へば國語のカミは尊貴の人格を呼ぶ時の指示的敬稱であると云はれ、支那の神は靈魂又は精靈であり、英語の God や獨逸語 Gott は氣息又は靈魂を意味する。ギリシヤ語の Theos や拉丁語の Deus は同一語源の Deus と共に天上の人格的威力を指す名と云はれるが確實でない。而して現今用ひられて居る所では、此等の語は最もひろい意味に於て力ある超感覺的存在を汎稱するのであるが普通には其人格的なものに限ら

れて居る。即ち種々なる宇宙原理や絶対實在と呼ばれるもの、其他非人格的な神祕的勢力も、それが宗教的對象となる場合には屢々神と云はれ、神と云ふ語は一般に宗教的對象と云ふと同様に用ひられるのであるが、然し此等非人格的な事物は普通の意味では神と云はれないものならず、神の觀念の中には宗教的對象とならないものも含んで居る。又他の一方に於て神は靈魂や精靈と區別されて居る。尤も兩者の區別は程度の差であつて、其分界は明確でないが、一般に靈魂や精靈は或る程度の人格を有し、超感覺的でありながら、現實的な存在であるのに對して、神は一層その人格性の明瞭な更に超絶的な存在として認められて居る。而して神の觀念を斯の如き超越的人格的存在に制限しても、尙其種類は無數であつて、從來之を其本體、性質、所在、職能から分類して種種の名稱を附して居る。

即ち神を其本體又は根源から見ると人物神あり、自然神あり、庶物神あり、又人物神の中には、祖先神、英雄神、自然神の中には、太陽神、風雨神、雷神、動物神、植物

神、山神、河神、水神等の名がある。

其性質から云へば善神・惡神・慈愛にみちたもの、凶惡なもの、溫和なもの、嚴肅なもの、各程度の差を以て幾多の種類を生ずる。又形態の觀念については人間形態的 Anthropomorphic のもの動物形態的 Zoomorphic のもの、半動物的 Therianthropic のもの、一定の形態なくして種々の形に化現するものや、又全然形態觀念の明瞭でないものがある。

又其所在から云へば天上の神(天神)地上の神(地祇)地下の世界に在るもの、他方世界に住するもの、空中に遊離彷徨する神や、種々の事物に實在する神などの別がある。更に職能上の區別としては、特に個々の事象について之を支配し干渉する分能神 Functional deity があり一定の階級に對して多くの事件に互りて保護を與へる守護神 Tutelary God があり、前者の中では狩獵神、農業神、筆神、工藝神、疫神、藥神等が著しく、後者では或る個人の生涯を守護する個人的守護神、子安神、氏族神等である。(下略)

【自我神、人格神】 自我は主觀的存在である。天地萬物に對して存在する一個の人格である。さういふ主觀的な考へを賦與して成立した神の意識をいふ。人格神は、之と相似て、一般的であつて、人格といふ一般的概念の色彩の濃い神である。自然神に對する英雄神、祖先神はいづれも、名の示す如く、英雄の風格を保つ神、祖先崇拜より成立した神の意である。前項「神」を参照。猶日本神話にあらはれた神に對する土居光知氏の論説を氏の著「文學序説」によつて紹介して置く。

「日本神話の神はアニミズムの神即ち國つ神と、祖先神即ち天つ神とに分つことが出来る。アニミズムとは動物、山川、草木、自然現象の威力のうち一種の靈を認めて崇拜するものである。喬木鬱蒼として晝尙暗い森などを通過する時など、人々は一種名狀し難い怖れと敬ひの混雜した戦慄の感じに襲はれて、木の葉が沈黙を破つてサラサラと囁く音を聞いては、思はずも「こゝに神様が坐す」と感じ、かゝる時に遭遇する鳥、獸、蛇などを神の使と信じたであらう。(略)

上古に於ては森林が直ちに自然神の住居であつた。(略) 自然神は森の中で崇拜されたのみならず森の中で見出されたのである。後に家の神の住居が森の中へ移されるやうになつた所にも、かゝる森の神は先住の神として認められてゐたやうである。(略)

我國の先住民族の或ものはかゝる自然神を崇拜してゐたらしい。この種族は未だ鐵で作つた武器を知らなかつた。而して祖先崇拜の天孫民族が天の沼矛を以て國を修理固成するや、自然神は祖先神と同化され或は祖先神の背後に隠れるやうになつた。(略)

いづれの國の神話でも惡魔邪神が跳梁してゐるが、記紀によつて傳へられた我國の神話には惡魔や邪神は認められてゐないのである。しからば上古に邪神が無かつたかといふと、紀には「邪神多し」と書いてあり「遷却崇神祭祀詞」などを讀むと當時の人々が荒振邪神を怖れること甚だしく、善言美詞を以て言壽を鎮め、その崇を免れんと努力してゐた事が察せられる。またかゝる自然神は祖先神のために滅されたかといふに必ずしもさうでな

く、唯裏面に隠れ、我國に於ける Paganism の神、即ち田舎人の神となり、宗教的に覺照せられない人々の心のうちに今に至るまで生きてゐる。田舎にゆくと今日でも蛇、狸、狐、狼、天狗等に對する迷信が素樸な人々の心を脅かしてゐるが、かゝる動物神崇拜は恐くは太古から存在してゐたのであらう。

皇祖神たる天照大御神は一面には太陽神であり、月讀尊は月神である。天照大御神は伊邪那岐命の左眼から、月讀尊は右眼から生れられたと古事記には誌してあるが、これは「元氣濛濛、萌芽茲始、乃孕中和、是爲人也、首生盤古、垂死化身、氣成風雲、聲爲雷霆、左眼爲日、右眼爲月……」と誌してある五運歷年記の支那盤古神話と一致してゐる。須左之男命は伊邪那岐命の鼻から生れられた神であるが、これは自然神としては風雲神であらう。太古人は氣息の白きを見て雲の發生を考へたのではあるまいか、尊は海原を知らせとの命令を受けながらも、そこに落着かずして八拳鬚胸前に至るまで泣きいさちた。この英雄神に似付かしからぬ行爲は雲が雨を

降らすことではあるまいか。高天原で尊の物質から生れたのは、多紀理姫、市寸島姫、多岐津姫で皆水に關係してゐる。尊が天上に於て吡放、溝埋め暴れすされた結果、日神が天石屋戸に籠り、天の下が闇となつたのは洪水を起す暴風雨の黒雲が太陽を蔽ふ状態から想像されたものではなからうか。その結果尊は夜見國に追放された。しかるに尊は夜見とは關係のない出雲に現はれてゐる。出雲の鳥髪山附近は上代に鐵を産した所で「その身には蘿、檜、楡生ひ、その長さ谿八谷、峽八峽に度りて、その腹を見れば悉くいつも血欄れ」てゐた大蛇の退治は鐵山の争奪戰、またその結果として稻田の争奪戰であつたらう。鐵氣を含む水は赤いが常である。この鐵山の争奪戰の英雄が須佐之男命とされたのは「大蛇所居之上常有雲氣」とあるやうに鳥髪山の頂には絶えず雲があつたためではなからうか。げに尊は最後まで雲に纏はられてゐる。「この大神初め須賀宮作らしし時に其の地より雲立騰りき。かれ御歌作りし給ふ。八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣造るその八重垣を」かくて尊は永遠に雲

のうちに隠れられる。かくの如く記紀の神々は人格神として説明し難い所は自然神とすれば解説される。(略)次に日本の英雄神が、自由な強烈な意志を有する個性でないことも注意を促される。須佐之男尊が出雲で大蛇を退治しはじめて地上に文化を布いたことは、高天原で罪を犯し放逐された結果であつた。大國主命或は手見命の戀の冒險及び國土經營も兄の神々に虐待された事が原因になつてゐる。文化を布く事業も自己の幸福を獲得する行爲も、罪や偶然や、人間以上の靈力の加護の結果になつてゐる。

記紀には絶對に自由な唯一な意志があつて、それは天照大御神の神勅に表現されてゐるのである。國土と神々を生んだ諸冊二神も、國土を經營した須佐之男命大國主命も皆この唯一なる意志實現の準備者にすぎぬ。代々の天皇はこの意志實現の後繼者であらせられる。この犯すべからざる意志に反抗するものは神でも人でも、太陽の前の霜の如くに消えてゆかねばならなかつた。古事記に於ける神々と個人とは唯この至高意志との價值

關係に於てのみ認められてをり、これに反抗する神人はすべて邪敵とせられ、これに貢獻することの少なかつた神には唯名を擧げられてゐるばかりである。衆生救濟を中心とする印度神話、贖罪思想を中心とするヘブライ神話が深刻に宗教的であり、人間社會を理想化してオリンパスの上に映寫したギリシヤ神話は社會的、哲學的であるが、この國家統一の意志を中心として組織した日本の神話は非常に國家的、政治的である。かく考へると記紀の神の本質は日本民族を開闢の始から無窮に統一すべき力の靈的源泉或は核心であつて、神道とはこの靈力に對する國民の歸依崇拜であるやうに思はれる。後世神として祀られた人々は、この神聖な統一の意志と象徴的關係に立つた偉人であつた。(略)

(文學序説 五九—六六頁)

【意識的】 意識とは感覺・感情・觀念・欲求等あらゆる心の作用が現に働きて、而も是れ等の諸作用を、心自ら知覺し居る状態。自ら知覺して寧ろ積極的に考へ、爲すことをいふ。

【萬葉集】 第四課の解題及第五課參照。

【人麿】 第四・五課參照。

【只管】 ヒタスラ。一途な。一むきな。

【境地】 心境。心の一つの状態。立場。立脚地。

【皇子の薨去をいたむ哀痛の感情】

日並知皇子尊殯宮時、人麿（卷二）

ひさかたの天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しむ

あかねさす日は照らせれどねばたまの夜渡る月の隠らく惜しも

高市皇子同上

はにやすの池の堤の隠沼の行方を知らに舍人はまどふ

【自己自然の一つの境地】

御食向ふ南淵山の巖には降れる斑雪か消えのこりたる

（卷九、人麿）

天さかる夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ

（卷三、同上）

【情熱的な愛】

石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか

（卷二、人麿）

君が行く道の長路をくりたゝね焼き亡ぼさむ天の火もがも（卷十五、狭野弟上娘子）

【享樂的】

世の中の遊びの道に怜しきは酔ひ泣きするにあるべからし（卷三、旅人）

この世にしたぬしくあらば來む世には虫に鳥にも我はなりなむ（同上）

【現實に發する愛】

白銀も黄金も玉も何せんにまされる寶子に如かめやも

（卷五、憶良）

【素朴】 かざり氣なきこと。文藝上で言へば、人生や自然の對境の與ふる主觀的效果を、その自然のままに何等の批判や反省を加へずに表現する傾向を言ふ。

【一元的】 イチゲンテキ。一元論的。根本原理を一とする。統一的。

精神と物質とを其以上の第三者即ち一の統一的根本實在

の二面或は二様の現れ方とする形而上學の一立脚地。唯物論や唯心論の如く實在の一面のみをとつて他面を棄てることなく、精神的と物質と一層包括的な第三者の異れる二方面と解することによつて兩者の同權、同價値を維持せんとする考。精神と物質とが互に相犯さる系列であると言ふ點、換言すれば兩者の間に精神物理的因果をみとめざる點に於ては並行論、兩者が本質に於て同一であるといふ點に於ては同一説である。

【綜合的】 ソウガフテキ。箇々別々の概念を結合して一概念、一體系を構成すること。分析の對であつて一元的、統一的等とほぼ等しい意義内容を有する。

【率直】 ソツチヨク。かざり氣なく正直なること。すなほ。きすく。

【積極的】 セキキヨク、セツキヨク、シヤクキヨク。進んで爲すこと。肯定すること。消極の對。

【迂餘】 ウヨ。①うねり曲るさまにいふ語。②遠まはしにして露骨ならざること。

【曲折】 キヨクセツ。①をれまがること。②状態の變化あ

ること。平板ならざること。③委曲の次第。こみ入りたる事情。いちぶしじゆう。

【具象的】 グシヤウテキ。形體を具有するさま。又簡體をそのまゝに寫象するさまにいふ語。概念及び思惟等所謂抽象的なものに對して、感覺、知覺、記憶等所與又は對象そのものを指して言ふ。具體的。

【直觀】 チョクカン。英佛 Intuition 獨 Anschauung, Intuition 直覺。思惟によつて間接に物を知るといふことに反して直接に物を知ること。即ち心が直ちに物を映することである。之れで物を見るとか、音を聞くとかいふ如きことも、固より直觀と考へるのであるが、心内の事物に對しても、之を直觀するといふことが出来る。此故に直觀とは感覺とか知覺とかいふ意義よりも廣い。（中略）直觀とは何等自己の作爲を加へないで靜的のものをみるといふことである。（西田（岩波哲學辭典））

【類慶】 タイハイ。くづれ荒ること。やぶれたれること。

【實朝】 源氏。幼名を千幡と言ひ、賴朝を父とし、北條氏

政子を母とし、建久三年八月九日に生れた。次男であつて兄は頼家である。建仁三年八月、將軍頼家が、大患に罹つた時、天下を二分し長子一幡と舎弟千幡に與へようといふ沙汰があつた。一幡の外戚比企能員は憤怒して亂を起したが失敗に終つた。千幡はこゝに將軍となり九月七日宣下があつた。元久元年十二月坊門黃門信清の女が御臺所として下着。これは實朝の意志にと言ふ。元久二年四月始めて歌を作る。その九月新古今集をみる。承元二年五月古今集を手にする。承元三年、定家にはじめて歌を送り批點を乞ふにいたつた。建曆元年鴨長明の下り來るにあふ。建保元年和田義盛の亂、この頃より身近き者の内亂陰謀による弑逆相次ぎ、無常觀を深く抱くに到つたらしい。その年の十一月定家より萬葉集を與へられ大いによろこんだ。建保四年六月、東大寺の大佛の修理に來朝してゐた宋人陳和卿が下着し、實朝に謁し貴客の前生は宋朝育王山の長老であり自分はその長老の門弟であるといつた。實朝も同様の夢を見て居たので大に好奇心を起し一つには自分の前生住んで居た所を見、一つに

は海外旅行を試みようかと考へ、反對を顧みず陳和卿に命じて唐船を修造せしめた。これは進水せずにははり渡宋も失敗に歸した。これに實朝の複雑なる心狀を語つて居る。建保六年六月左大將、十二月二日 右大臣。翌承久元年正月廿七年夜雪を冒して鶴岡に拜賀式を行つた時、一幡の子公曉に殺された。年二十八。性、眞率、情深く敏感に而も父よりうけた豪放の氣を保つて居た。朝廷に對して忠誠であつたことは有名なことである。のこす所金槐和歌集一卷。名玉のひびきある作にみち、萬葉集の精神を受けた歌人として和歌史上後世にかゞやくものがある。

人麿の後の歌よみは誰かあらん征夷大將軍源の實朝（正岡子規）

【山はさけの歌】「あせなむ」は水の乾き淺くなるであらうの意。「わがあらめやも」はあらうか、ある筈がないといふ反語である。これは「太上天皇御書下預時歌」と詞書した三首連作の最後の歌である。太上天皇は御鳥羽上皇を申し奉る。

齋藤茂吉氏の鑑賞に聞いてみよう。

「あせなむ」は乾涸せむの意である。「あせなむ世なりとも」の所で、ゆら／＼と調が搖いで急進しないのは、感涙の滲み出でんとする刹那に似た、深い心の相を暗指して居る。それをこゝで調子が弛んだなどと評するのは恐らくは淺はかな形式論者であらうと思はれる。一たんそこでよどんだ運動が、「君に二心われあらめやも」とひた押しに押し行いて居る。此歌は天皇に對する我國民思想の權化だといつて褒められて居る。予も確かにさう思ふが、此歌は特殊の場合で、「君」にも定冠詞がつくのであるから力があるのである。これが宣長の「敷島の和心を」などの概念歌とちがふ點であつて、或る特殊の場合に、せまり極まつた作者の内性命から迸り出た歌である事を忘れてはならぬ。（金槐集私鈔）

連作の他の二首は

大君の勅をかしこみ父母に心はわくとも人にいはめやも

ひむがしの國に我をれば朝日さす波姑射の山のかげとなりなき
であつて、併せ讀むときその國家的精神をよりよく理解出来る。

【いとほしやの歌】

齋藤氏の説を紹介する。

「道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くを其あたりの人に尋ねしかば、父母なん身まかりにしと答へ侍りしを聞いてよめる」とある。「いとほし」は哀れに思ふ、愍然に思ふ、可愛ゆし、可憐、いとなど、此言葉にも從屬的ないろ／＼の色合がある。「見るに涙もとまらす」は、見ると一人の童がしきりに泣いて居るといふ事であらう。作者が可哀想になつて泣くのではあるまい。（後記。文法上からいふと「見るに吾れさへ涙もとまらす」で作者の涙のとまらぬ事になる。實はこの方の解釋が正しいやうである。）予はその様に解して「見るに」などいふ一寸した句でも作者の面目躍如たるを感ずるものである。この歌にて注意すべ

きは助辭の連続の工合が甚だ自然である事、結句の動詞は連體言であるが少しも耳障りがしない事である。かういふやさしい感じは實朝の一面であつたに相違ない。この感じは歌人としての急拵へのものでないに相違ない。

【ものあはれ】ものなかにふくまれたあはれ。「あはれ」について土居光知氏の左の一文を注意したい。

「平安朝に於ては情趣的調和が理想の美となつた。源氏物語に於て「あはれ・をかし・うるはし・うつくし・あて・らうたし・えん・なまめかし」等の語は平安朝に特有な情趣的内容を持つてゐるが、こゝにははじめの二語についてその内容を檢してみよう。「あはれてふ事だになくば何をかは戀の亂れのつかね緒にせむ」「あはれてふ事こそうたて世の中を思ひはなれぬほどしなりけれ」「あはれてふ事に慰さむ世の中をなどか悲しといひて過ぐらむ」「春はたゞ花の一重にさくばかりものあはれは秋ぞまされる」「戀せずは人は心もなからまし物のあはれはこれよりぞ知る」等の歌の意味を考へても「あ

はれが當時の人に重大事であつたことが窺はれる。この語は竹取には「同情を催す」「愛慕する」「惜しむ」の意に用ひられ、伊勢には「同情する」「寵愛する」「歎稱する」の意味に、大和・落窪には「ゆかしく思ふ」の意味を加へて用ひられ、源氏には感傷的な意味が深まり、「寂しく、力なく、趣きある」「情深き」「同情をひく状態」「感動する」「哀傷する」等の意に多く用ひられてゐる。「をかし」は竹取と伊勢には「興味ある」の意に用ひられ、大和・落窪には「才機ある」「感心すべき」「面白き」「上手なる」「趣味ある」の如き意味に用ひられ、源氏には「風流」「上品」の意味を加へ、枕草子には情深く寂しく趣あるものは「あはれなるもの」の中に入られ、賑はしく晴やかに才機あるものは「をかしきもの」の中に數へてゐる。あはれの趣味が発達すれば、その反面としてをかしの趣味も随伴した。人々が感傷的になればなるほど、これを紛らす可笑的なものが要求される。平安朝文學には後者の趣味に屬し今に傳はらぬものも多量にあつたやうである。「あはれ」は「あ

あ」なる感嘆のうちに含まれるすべての心持をふくみ、「をかし」は「お」なる驚嘆のうちに含まれるすべての心持をいひあらはす語であらう。この「あはれ」の趣味が源平等の運命によつて深刻にされ、「をかし」の趣味が無學な大名などによつて刺戟されたところに謡曲と狂言の如き趣味となつたのであらう。(文學序説)

【あるべきこと】當爲。Das sollen 自己若くは他の意思に於て要求せらるゝことを示す語。何か當爲であるといふのはそれがあり又は起ることが意志せらるゝといふことを意味する。

【本居宣長は云々】詠歌疑條といふ書の中に、源氏物語の中のものあはれといふ言を十二語ひろつてそれを源氏物語の基調として居る。

【本居宣長】モトヲリノリナガ。伊勢松阪の人。先祖は平氏で、池大納言頼盛卿五世の裔小津三四右衛門定利の子、江戸の通油町に木綿織の出店を開いて居たが、父の病死と共に店運が衰へたので、遂に閉店した。けれども賢母村田勝子は宣長の性格を見ぬき、醫者にしようとして、

京都の人武川幸順について其の法を學ばせた。宣長はそのうち多方面の修養をなし、漢學を堀景山に、和歌を森河章尹に學んだ。しかし宣長の生涯に至大の影響を與へたのは賀茂真淵であつた。彼は真淵が伊勢參宮の歸途旅宿に於て一夜の會見をなし、之から古典の研究に心を傾け、文書の往復によつて指導を受け、三十有五年の努力によつて不朽の大作古事記傳を完成した。その他源氏物語玉の小櫛・歷朝詔詞解・萬葉集玉小琴・古今集遠鏡・新古今集美濃の家づと等を著した。これらは何れも訓詁の書として後進を裨益してゐる。彼は又物語和歌に關して、從來の勸懲主義以外に「物のあはれ説」とも謂ふべき純文學的見解を立てた。即ち作者が物のあはれに感じた心持を表現して讀者をして十分にそれを感じしめるといふ説である。そこで和歌はあくまで調を整へ語を美しくせよ、換言すれば新古今集を目標とせよと謂つた。彼は又西行以來の櫻愛好の歌人であつた。それはもとより趣味であるが、其の基く所の一半は國粹主義的見解から櫻を以て國民性の象徴と看做した點にある。人口に膾炙して

ゐる「敷島の和心を」の一首は、彼が還曆の折自畫像に讚したものである。

【源氏物語】 本巻第八課参照。

【基調】 キテウ。根本的精神。

【洗煉】 センレン。ものを洗ひ練るが如くに思想又は詩文の字句などを推敲すること。

【高揚】 獨逸語の Aufheben。止揚なども譯す。ある一つの境地からそこを抜け出でてもう一步高級なる境地に到ること、そのはたらきを言ふ。

【高天原】 タヤマノハラ、タカマガハラ。虚空の上にあつて、天つ神たちのゐる世界を天といひ、天上のことを語る時、美稱して高天原といふ。優越せる人なる神々の世界として、山川草木宮殿等、いづれも國土のまゝに、優越せる國と考へられた。

【岩戸】 太古の住居は穴居であつたから、石屋戸は即ち石室に生活した時代の反映であると見る事が出来る。併し萬葉集に、天皇や皇子の崩御を悲んだ挽歌に「天の原石戸を開き神上り上りいましてぬ」とか「神さぶと岩隠りま

す」などとあるのを見れば、天石屋戸は陵墓の石都を指したものと見える。(次田氏の説)

【神樂】 カグラ。かぐらのらは樂の字音で、神に奉る樂の義。一名神遊び、遊びも亦樂を奏して楽しむの義。古神道以來の祭儀で、歌舞音楽を以て、神前に遊びたはむれて、神意を和むとなす。されば喪に際しても、連日連夜遊樂して失せた人をこの世にかへらしめようとしたので、天照大神の天岩戸隠の時、天鈿女命が俳優の伎を演じた故事は、この風俗の反映である。本來は滑稽を旨としたのを、朝廷の儀式となつて以て、漢樂に用ゐられて、雅樂の一種となつた。(岩波哲學辭典)

【あはれ、あなおもしろ】 古語拾遺、岩戸ひらけたるとき天神の光輝、常闇なりしにかゞやき出でて神々の面みなしるじろとみえたるとき神々うたうて曰く「あつばれ、あなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ。」

【情趣化】 情趣とは特定の内容或は對象の意味に關せざる漠然たる感情。對象的關係が不明であるため、主觀客觀の別も曖昧に意識され、從て主觀的感情であり乍ら客觀

視されやすい。

【平家物語】 本備考卷五、一八課・卷六、一一課・卷七、七課等の解題参照。

【敘事詩】 (英 Epic) 事件をのべた詩といふ意。その成立は民族的のもの(古事記・平家物語・イリヤッド・オディッセ) 1) 個人的のもの(日本外史・失樂園)がある。(民族的といふのは、ある個人の創作ではなくて、ある民族、ある社會の内に自ら、できたものといふ謂)その内容には英雄的のもの(平家物語) 歴史的のもの(日本外史) 傳奇的のもの(八犬傳) 宗教的のもの(古事記) などがあつてゐるが、その氣分からいへばなほ、抒情詩である。

我國の文學には、嚴密な意味の敘事詩といふのは少い。萬葉にある浦島・竹取・櫻兒・鬻兒のうたは事件を取扱つてゐるが、その氣分からいへばなほ、抒情詩である。古事記・平家物語等は敘事詩的といふべきである。

(参考) 抒情詩(英 Lyric) 事件ではなく、感激をうたふもの。

次に哲學辭典を引用する。

最も廣義に於ては、一般に客觀的事件を敘述的形式に依つて、詩的に表現したる文學の種類を意味し、狹義に於ては特に詩語の形式を以てせる敘述的詩篇を指し、更に之を限定すれば、その中特に英雄的行爲乃至事件を叙したる長篇の詩を意味する。今之を一般に敘述的詩篇の意に解し、その種類を細別すれば、先づ前述の如く一方に長篇の英雄詩の如く、内容形式共に雄大顯著の詩があると共に、他方にはアイデル、バラッドの如き小規模の詩が含まれる。更に前者の中には

一、民族的敘事詩、即ち民族生活の中に成立し、傳承せられたる説話内容が、自然に超個人的形式に於て詩的に、結成せられたるもの。例へば古代ギリシヤのイリヤッド、オディッセー、印度のマハバラータ、ラマヤーナ等の如き詩と

二、藝術的敘事詩、即ち個人の作家の藝術意識から生産せられたる作物とがある。然して藝術的敘事詩は、更に其の内容の性質から

(イ) 歴史的敘事詩——例へば、ヴァーヂルの「エーナイ

「ド」の如き
（ロ）傳奇的叙事詩——アリオストの「ローランド」の如き

（ハ）教示的叙事詩——ミルトンの「失樂園」の如き

（ニ）世話物的叙事詩——バイロンの「ドン・ファン」の如き

等に區別されてゐる。廣義の叙事文學の中には Romance (傳奇) Novel (小説) の類も入ることは言を俟たぬ。

（哲學辭典——大西克禮の解説）

【悲壯美】 壯美とは「大きさ」を中心とする美的概念であつて、美の見地に於ける常正的數量を超過し、又同じく美の見地から解した所の類型的性質を脱却するときを生ずるものである。この「大きさ」は「力」の觀念となることもある。主觀的には、讚美、畏敬等、宗教的感情を加へるを常とする、この壯美に悲哀の色彩が濃く加へられたとき悲壯美といふのである。

【幽玄】 イウゲン。玄は理の深遠微妙の義。奥深く微妙にして容易に知りうべからざること。趣き深くして味ひつ

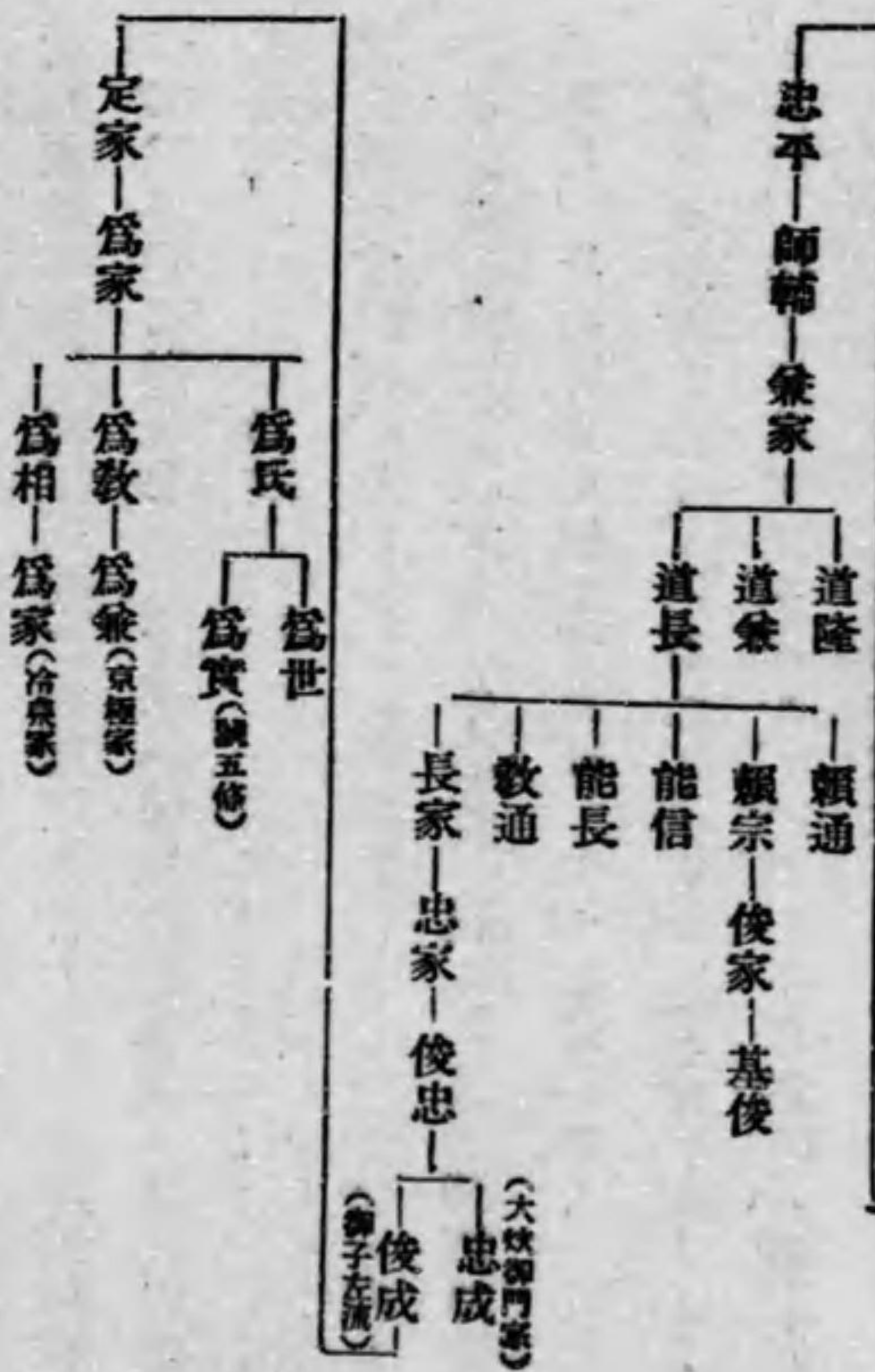
きざること。徒然草「詩歌にたくみに糸竹にたへなるは幽玄の道。歌袋「鴨長明のいへらく、幽玄は詞にあらはれ、姿にみえぬ景氣なるべし」謡曲「入つては幽玄の底に動じ出でては三昧の門にあそぶ。」

【古今集の眞名序】 紀貫之が假名の序を作り、紀淑望が漢文の序を作つた。後者を眞名序といふ。

「至如難波淨之什獻三天皇」富緒川之篇報中太子、或事關ニ神異、或興入ニ幽玄ニ云々。

【俊成】 藤原俊成 (トシナリ) (永久二年——元久元年)

鎌足—不比等—房前—眞禰—内膳—冬嗣—長良—基經



私語に

深更にとのあぶら細く、あるかなきに向ひ、直衣のすゝけたるうちかけ、古き烏帽子耳まで引き入れたまひ、脇息により、桐火桶を抱き、詠吟の聲忍びやかにして、夜たけ人静まるにつけて、うち傾き、よごと泣きたまへるとなん。

と定家の言を傳へたり。彼の自讃の歌は

夕されば野邊の秋風身に染みて鶴なくなり深草の里

なり。當時の人心は穢土を厭ひ念佛三昧に暮す時、彼は歌道を以つて畢生の事業となし、一子定家を大成せしめ、又頼朝の開府とも匹敵すべき千載集撰集の大事業をなせり。この集は壽永二年二月三位中將平資盛、後白河法皇の院宣を承りて、撰集の命を俊成に傳ふ。されど戦亂相つぎ、集のなりしは宣下より五年目の文治三年九月二十日、明日記(定家日記)によれば翌四年四月二十二日なり。(國文學全史より)

【夕さればの歌】 千載集卷四、皇太后宮大夫俊成として載せられてゐる。「夕されば」は「夕方になると。」「夕しあれば」の約でなく「さる」といふ、行くにも去るにも、來るにも、用ひられた、動作進行をあらはす古言の動

「俊成はじめの名を顯廣といひ、後、俊成に改む。正三位皇太后宮大夫たり。その家五條室町にありしを以て、世に五條三位と稱す。安元二年(一八三六—36)官を辭し、尋で雅美して釋阿といふ。長生によつて當時の歌壇に於て善宿となる。(定家も同様) 建仁三年九十の賀を和歌所に開かしめられ、御製・鳩杖を賜ふ。翌年歿す。家集を長秋詠草といふ。一説には始め顯輔の養子たりと。然らば幼時は六條家の家風を學びたるなるべし。然れども廿五才の時基俊の門に入る。

長秋詠草に

前左衛門佐基俊といひし人に古今の本を借りて返すとて

君なくばいかにしてかははるけましいにしへ今のおぼつかなきを

かくて彼は基俊に學び、その歌學の博洽に服せりといへども創作の才に至つてはわが師に許さずして俊頼が詩趣の横溢し、用語の自在なるを尙ぶ。これ彼が「歌を見て人を見ず」といふにあり。故に彼の歌風は折衷にして、然も彼は苦心慘憤によつて句をなすことは心敬僧都の

詞。「深草の里」は山城國深草村。地名ではあるが草深き所の象徴ともなつて、この歌の幽玄味をたすけて居る。秋の夕ぐれ方もさみしき頃になると、冬のさむきころをよく來り鳴くうづらの聲がきこえて秋風さへ一層身に沁みわたるの意。

【消息】 セウソク。氣分。氣あひ。

【西行】 卷八第八課參照。

【自然の中に放浪した】 放浪は旅をいふ。自然の中にあてどなくさまよふことである。こゝでそれを自然の中といふ意味は、たゞ自然を求めて放浪するのでなしに、その事が自己の内的生命の展開を求める力が基調をなしてゐる、即ち自己の矛盾を超越せんとする努力、そのものの直ちに求められぬ迷ひ、彷徨に出發して居るから言つたのである。

土居光知氏の西行觀を引く。

西行は寂しき生活の中にあつて心情の深い叫びに耳を傾ける詩人であつた。彼は自然を友や戀人を想ふ心をそのまゝ移して愛した。彼は自然を友として愛すれば

愛する程さびしくなつた。そして淋しき心に調和する淋しき自然を友として交はらんとした。かく寂しさを友としその奥深くたどつて行つたのであるが、寂しさの奥には尙深刻な寂しさがあるのみで、愛の眞のよろこびは見出されなかつた。かくの如く西行は寂しさの奥へへとたどつて行つたがこれは輝く光明の道ではなかつた。それは當時の時代思潮に於て人間性の愛と自然の愛とは相對立するものであつて自然の愛は心情の願ひの否定であつたからである。西行はこの寂しさにたへかねてまた「人」をなつかしく思つた。しかし當時の厭世觀のうちに育ちそれを超越することのできなかつた彼は人間の愛にかへつてゆくことが出来なかつた。かくて彼はまばゆき光明にも大なる歡喜にも力づよい信仰にも接することなく、未來に對する淡い希望と自然の寂しい慰藉のうちに生を終へたのである。

(文學序説)

【遠白し】 (1)遠くへだたりて白くみゆ(2)ひろくとして清し。遠く著し。氣高くあさやかなり。

【傳統】 デントウ。英佛獨語の Tradition 美術文學等の方面

にては、過去の集積せる藝術的經驗、様式、手法等が後代にそのまゝ傳へられて、作家または流派の踏襲するところとなるものを云ふ。宗教上の傳統主義といふ概念が近來文學の方面に應用されて、フランスの一部の文學者の間に傳統主義の思想があらはるゝに到つた。祖國、祖先の精神生活の傳統を重んずるといふ考は、云ふ迄もなく、近代文藝思潮に於ける個性發揚主義の極致から生じた一種の反動的傾向である。或は又個人的自覺から民族的自覺を促した兆候とも見ることが出来る。(哲學辭典)

【普遍】 フヘン。あまねくあまねし。すべてのものにあまねく通ず。但し、すべてのものといふことは存在(獨 Sein)でなく必然(獨 Sollen)の問題である。即ち實際を總和したものでなくて、正にかくあるべきものといふものである。隨つて普遍は普遍妥當(Allgemeingültigkeit)といふことになる。

正にかくなるべしとは、主觀の上に客觀を求めるのであつて、一つの創造である。

【いぶし】 色をくすませること。

【徒然草】 備考卷六及び卷八參照。

【徒然草にみえる道】 徒然草第百五十段參照。

「……道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは遂に上手の位に至り云々」

【能樂】 備考卷八「鉢の木」參照。

【非家】 ヒカ。その道その職の専門の家の人ならざること。

徒然草「よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人ならぶ時云々。」

【芭蕉】 卷七第八課參照。

【閑寂】 カンジャク。しづかなること。閑靜にしてさびのあること。方丈記「閑寂に着するも障なるべし。」

【さび】 古びて趣のあること。閑寂な沈深な趣。

【本質】 (英 Essence 獨 Wesen) そのものが、そのものである以上は缺くべからざる性質。

文學の本質は、純一無雜の世界を創造して行く、文化意識に外ならぬといふにある。

【高く心をさとりて云々】心は高き悟りに入り身は俗に生くるがよろしい。と云ふ一通りの意味であるが、つまり悟りと云ふものは眞に生活より出發したものでなければならぬ、體驗より出發した思索でなければまことのものでないといふ主旨である。一定所に着する——悟りといふものに着すればあそびとなり、俗に着すれば墮落である——ことをいませしめた詞である。

【理念】事物の恆常なる本質、眞知の對象。イデー。型念。理性概念。道念。

【表現】氣持を形にあらはす。形にあらはすといふことである。即ち氣持を説明するのではなくて、姿にあらはすといふことである。姿とは、存在してゐるまゝの姿、生きてゐるまゝの姿といふことである。

【展開】發展し伸張すること。

【象徴】(英 Symbol) 例へば

- 黒……………悲哀
- 薔薇……………愛情
- 十字架……………基督教
- 白百合……………純潔
- 鳩……………平和
- ピンク……………愛情

黄……………愛の復活
赤と黄……………絶交
水色……………涙
緑……………平和

【流動】ながれうごく。停滞しないでながれうごくといふことが大切なことである。いつまでも因襲に捕はれることなく、常に新鮮にして價值あるものを求めて行く。それが人間生活である。

世は、無常である。誠に變化極ない。この「變化常なし」といふことが世の本體である。流轉るてんの相にこそ常住の相があるのである。もし一點に固定したならばそれは生命力を失へるときである。四時の交替は不斷のリズム

を奏しながら無窮に流れ動いて行く。孔子が流水の歎もこゝにある。

二 倭建の命

一 解題

「古事記」中巻の倭建命の熊襲征伐・東夷征伐の條を節録したものである。現行教科書検定内規に「上古文はすべて假名交り文とすること」と規定されてあるので、原文を假名交りに改めたのである。

二 主眼

我が國文學に於て最古の位置を占める古事記の一節を讀ませ、我等の祖先が残した遺産に接せしめ、國語と國文學との原始的な姿に親しませたいと思ふ。
題材は、國史に於て熟知してゐる倭建の命に關したものであるが、その内容も直接かうした原據から與へられると、一種の懐かしさを覚えしめるものがある。

三 概説

倭建の命の熊襲征伐の條と、蝦夷征伐の條とを採録した

もので、特に概説する程の必要もない。

四 取扱上の用意

内容については生徒の既知事項に屬するものが大部分であらう。随つて内容的にはさしたる興味を惹かないかも知れないが、しかし小學校時代から聞き慣れてゐた上古の話の、根源はこれであるのだと悟れば又何となき愉快の感が涌くであらう。そこを利用して興味を導きたいと思ふ。

又古事記撰進の事は國史に於ては重要事項として事柄は熟知してゐても恐らくその一節を讀むのはこれがはじめで、日本最古の記録に直接に接し得る喜びがあるであらう。

又「ことば」の上からは今迄にあまり接しない古いものにはじめて接するのであるから、此の點は讀みこたへがあると思ふ。特殊の古語は十分にその意味を理解せしめるやうに致したい。

二 倭建の命

大帯日子淤斯呂
和氣天皇

景行天皇
總向の日代の宮
奈良縣大和國磯
城郡總向村がそ
の地である
その御子
小碓の命

倭比賣の命
景行天皇の御妹

大帯日子淤斯呂和氣天皇、總向の日代の宮にましくて天の下を
しろしめしき。

こゝに天皇その御子の建く荒きみこゝろを惶みまして詔りたま
はく、西の方に熊曾建二人あり、これまつろはず禮なき人どもなり。
故その人どもを殺れ、とのり給ひて遣はしき。此の時に當りて、其
の御髪、御額に結はせり。こゝに小碓の命、その姨倭比賣の命の御
衣御裳を賜はり、劍を御懐に納れていでましき。
故、熊曾建が家に到りて見たまへば、其の家のほとりに軍三重に圍
み、室を作りてぞ居りける。こゝに新室樂せむと言ひとよみて、食
物を設け備へたりき。かれ、そのあたりをあるきて、其のうたげす
る日を待ちたまひき。こゝにそのうたげの日になりて、その結は
せる御髪を童女の髪のごと梳り垂れ、その姨の御衣御裳を服して
既に童女の姿になりて、女人の中に交り立ちて、その室内に入りま

(1) 日本書紀には「日本
武尊」と書いてある。

(2) 書紀には「能襲」

(3) 特殊の語

しき。こゝに熊曾建兄弟二人、其の童女を見めて、己が中に坐せ
て、盛にうたげたり。故、そのたけなはなる時に、御懐より劍を出し、
熊曾が衣の衿を取りて、劍もて其の胸より刺しとほしたまふ時に、
其の弟建見畏みて逃げいでき。乃ちその室の階の本に追ひ至り
て、其の背をとらへ、劍もて尻より刺しとほしたまひき。
こゝに其の熊曾建まをしつらく、その刀をな動かしたまひそ。僕
白すべきことあり。とまをす。爾暫し許しておし伏せたまふ。こ
こに白しつらく、汝が命は誰にますぞ。あは總向の日代の宮に坐
しまして大八島國知しめす大帯日子淤斯呂和氣天皇の御子、御名
は倭男具那王にます。おれ熊曾建二人まつろはず禮なしと聞し
めして、おれを殺れ」と詔りたまひて遣はせり。とのりたまひき。こ
こにその熊曾建まことにかまさむ。西の方に吾二人を除きて
建く強き人なし。然るに大倭の國に吾二人にまして建き男はい
ましけり。こゝをもて、吾御名を獻らむ。今よりのち、倭建の御子
とたゝへまをすべし。とまをしき。このこと白しをへつれば、即ち
熟苙のごと振りさきて、殺したまひき。故、その時よりぞ御名をた

穴戸の神

長門の赤間關と豊前の門司との間の海峡に住んでゐる惡神

東の方十まり

二道

東方十二國

伊勢(伊賀伊勢志摩)

尾張

三河

遠江

駿河

甲斐

伊豆

相模

武藏

總(安房上總下總)

常陸

陸奥

相武の國

今の相模の國この頃は今の駿河の國の一部も相模の國の中に入つてゐたらしい

たへて倭建の命とはまをしける。しかしして還り上ります時に山の神、河の神また穴戸の神を皆ことむけやはして参上りまじき。

こゝに天皇また頻きて、倭建の命に、東の方十まり二道の荒ぶる神またまつろはぬ人どもことむけやはせ。とのりたまひて、吉備の臣等が祖名は御鉏友耳建日子を副へて遣はす時に、柁の八尋矛を賜ひき。故命を受けたまはりて罷りいでます時に、伊勢の大御神の宮に参りまして、神のみかどを拜みたまひき。その姨倭比賣の命草那藝の劍を賜ひ、また御囊を賜ひて、若し念の事あらばこの囊の口を解きたまへ。とにも詔りたまひける。

故、東の國にいでまして、山河の荒ぶる神、またまつろはぬ人どもを悉にことむけやはしたまひき。故、こゝに相武の國に到りませる時に、その國の造いっはり白さく、此の野の中に大沼あり。此の沼の中に住める神、いたくちはやぶる神なり。とまをす。こゝにその神を見そなはしにその野に入りましければ、その國の造、その野に火をなもつけたりける。故、欺かえぬと知しめして、かの姨倭比賣

(1) 書紀に「草薙劍」

(2) 書紀に「相模」

燒遣

今の静岡縣駿河國志太郡(もと益頭郡)焼津町

走水

神奈川縣相模國三浦郡浦賀町走水

の命の賜へる御囊の口を解きあけて見たまへば、その裏に火打ぞ有りける。こゝに先づ其の御刀もて草を刈りはらひ、その火打をもちて火を打出で、向火をつけて焼き退けて還りいでまして、その國の造どもを皆斬り滅し、即ち火をつけて焼きたまひき。故、そこをば燒遣とぞいふ。

それより入りいでまして、走水の海を渡ります時に、其の波の神、浪をたてて船たゆたひてえ進み渡りまさす。こゝにその後、御名は弟橘比賣の命白したまはく、あれ御子に代りて海中に入りなむ。御子はまけのまつりごと遂げて、かへりごとまをし給ふべし。とま

をして、海に入りまさむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、繩疊八重を波の上に敷きて、その上におりまじき。こゝにその暴波おのづからなきて、御船え進みき。かれ、その後歌はせる御歌、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて
とひしきみはも

故、七日ありて後に、その後の御櫓海邊に依りたりき。乃ちその御櫓を取りて、御墓を作りてをさめ置きき。

坂本

相模の足柄峠
命はこの峠を越
え富士山の東北
麓を経て甲斐に
出られたらしい

酒折宮

山梨縣西山梨郡
里垣村にその舊
址がある

にひばり

今の茨城縣常陸
國新治郡の邊

筑波

今の同國筑波郡
の邊

科野の國

今は信濃の國と
書く

科野の坂

美濃國惠那郡坂
本から信濃國伊
那郡河智に越え
る峠

伊服岐の山

伊吹山
近江美濃の兩國
に跨る高山

それより入りいでまして、悉に荒ぶる蝦夷どもをことむけ、また山
河の荒ぶる神どもをやはして還り上ります時に、足柄の坂本に到
りまして御糧みかゑきこしめす處に、その坂の神白き鹿かに化りて來立ち
き。かれ、その咋あせしのこりの蒜にんにくの片はしもて待ち打ちたまひしかば、
その目に中りて打ち殺さえたりき。故、その坂に登り立ちて、ねも
ごろに歎かして、あづまはや」と詔りたまひき。故、その國をあづま
といふなり。

即ちその國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮にましける時に歌ひ
たまはく、
にひばり 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる
こゝに、その御火燒みかゑの老人、御歌をつぎて歌ひけらく、
かゞなべて 夜には九夜 日には十日を

こゝをもて、其の老人を譽めて、東の國の造にぞなし給ひける。
その國より科野しやの國に越えまして、科野の坂の神をことむけて、尾
張の國に還り來まして、その御刀みかたの草那藝くさなげの劍けんを美夜受比賣みやうぢひめの許
に置きて、伊服岐いふくぎの山の神を殺りに出でましき。こゝに詔りたま

(1) 書紀に「宮養媛」

玉倉部

今の滋賀縣近江
國坂田郡横川と
岐阜縣美濃國不
破郡今須との中
間にある長鼓
(たけくらべ)は
玉倉部の訛であ
らう

當藝野

今の岐阜縣美濃
國養老郡(もと
多藝郡養老溪の
附近)

當藝斯

船尾の船橋

杖衝坂

今の三重縣伊勢
國三重郡内部村
大字采女の西の
はづれにある

尾津のさき

同國桑名郡多度
村古濱村の地

はく、この山の神は徒手むでに直ただに殺りてむ。このりたまひて、その山に
のぼります時に山の邊に白き猪いの逢へり。その大きき牛の如くな
りき。かれ言こと擧あがりして詔りたまはく、この白き猪に化かれるものは、そ
の神の使者つかひにこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむ。
とのりたまひて、のぼりましき。こゝに大氷雨おほひこをふらして、倭建の
命をうち惑はしまつりき。故、還りまして、玉倉部の清水に到りて
息ひませる時に、御心や、寤さめましき。故、その清水を居寤いさの清水
とぞいふ。

そこより發たたして當藝野たがの上に到りましし時にのりたまへるは
「吾わがが心恆こころに虚とらよりも翔とり行かむと念ひつるを、今吾が足え歩ます
當藝斯たがの形に成れり。」とぞのりたまひける。故、そこを當藝といふ。
そこよりや、少しいでますに、いたく疲れませるに因りて、御杖を
つかして、やゝに歩みましき。故、そこを杖衝坂つゑつきさかといふ。尾津のさ
きの一つ松のもとに到りませるに、先に御食みけせし時、そこに忘らし
たりし、御刀失せず、なほありき。かれ、御歌よみしたまはく、
尾張に たゞに向へる 尾津のさきなる 一つ松 吾兄わがを

三重の村

同國三重郡内部村大字采女にその名が残つてゐる

能煩野

同國鈴鹿郡川崎村にある

平群

古の平群郡今の奈良縣大和國生駒郡明治村のあたり

一つ松 人にありせば 太刀佩けましを 衣着せましを
一つ松 吾兄を

そこよりいでまして、三重の村に至りませる時に、また、吾が足三重の勾まがらなして、いたく疲れたり。このりたまひき。故そこをば三重といふ。

(1) 命の郷國たる大和。

そこよりいでまして、能煩野のつばねに到りませる時に、國思(1)ばして歌ひたまはく、

大和は 國のまほろば たゝなづく 青垣山あおがきともれる
大和しうるはし

また、

命の またけむ人は たゝみこも 平群へぐりの山の 熊白くましろ橋が
葉を 馨華かほなに挿せ その子

この御歌は思國歌しこくうたなり。又歌ひたまはく、

はしけやし 吾家わがやの方よ 雲居くもいたち來も
こは片歌なり。

このとき、御病にはかになりぬ。こゝに御歌を

をとめの 床の邊に わが置きし 劍の太刀 その太刀は
や。

と歌ひ竟へて、即ち神あがりましたぬ。かれ驛使はつせきをたてまつりき。

(古事記)

語句の解釋附文法・修辭法上の吟味

【大帯日子淤斯呂和氣天皇】 第十二代の景行天皇。「神武」

「綏靖」。「景行」などと申す天皇の御謚號は、文武天皇の朝に、藤原不比等が勅を奉じて、漢土の風に倣つて撰定して奉つたのが初で、それ以後代々の天皇に奉る例となつたものである。

【その御子】 景行天皇の皇子小碓の命。

古事記によれば、景行天皇の御子たちは、記録に存するものが二十一人、記録に載せてないものが五十九人、合せて八十人あつて、その中で、若帶日子命・倭建命（小碓命）・五百木之入日子命とを太子とし、他の七十七方は諸國の國造・別・稻置・縣主となされたとある。

【建く荒きみこゝろを憶みまして】 古事記によれば、景行

天皇が或時小碓命に向つて、「どうしたわけかお前の兄の大碓の命は朝夕の天皇の御食事の時、陪膳に仕へることをしないが、お前から、「御苦勞だが御食事の時には参るやうに」と教へ諭してやれ」と仰せられた。その後五日たつても大碓命は一向出て仕へないので、天皇は再び小碓命に向つて、「どうして大碓命は参らないのか。それともお前はまだ兄にその事を論さないのでか。」とお尋ねになつたところが、小碓命は「いや、もうとつくに話しました。」と答へた。そこで天皇は「どのやうに話したのか。」と重ねて尋ねられると、小碓の命は「夜明け方に大碓命が便所に入つた所をつかまへてひねり殺し、手足をもぎ取り、屍骸は藁わらに包んで捨ててしまひました。」と答へた。

そこで天皇は小碓命の豪勇に驚かれたのである。本文に「こゝに天皇」とある「こゝに」はその小碓命の答を受けてゐるので、「こゝに於て」の意。

【惶む】 カシコむ。恐ろしいと思ふこと。

【熊曾建】 クマツタケル。「熊曾」は日本書紀には「熊襲」と書いてある。上古に、今の日向・大隅・薩摩・肥後地方一帯に住してゐた民族の稱。

【建】は、上古、勇猛なる夷族の長を稱した名である。

日本書紀・景行天皇十二年の條に「朕聞之、襲國有厚鹿文・逆鹿文者、是兩人熊襲之渠帥者也、衆類甚多、是謂熊襲八十梟帥、其鋒不可當焉。」とあり、又同二十七年の條には「時熊襲有魁帥者、名取石鹿文亦曰三川上梟帥。」とある。

【まつろふ】 まつる（奉）の延音。したがふ。服従す。歸順す。

【禮なし】 無禮である。不作法である。

【故】 カレ。「かゝるが故に」「かゝれば」「故に」等の意。

又古事記には「さて」などに當るべき發語として用ひら

れたものを見受けられる。

【御髮御額に結はせり】 次田潤著「古事記新講」に、「其の髮の形は崇峻天皇紀に『厩戸皇子束髮於額』とあつて、其の註に『古俗年少兒年十五六間、束髮於額、十七八間分爲角子、今亦然之』とあるので明かになる。ヒサゴハナ（瓠花）は額の所で髮を瓠花（夕顔）の形に結ぶのである。なほ書紀には此の時小碓命の年齢を十六と記してゐるが、古事記は髮の形によつて年の程を知らせたのである。」と説明してある。

【衣】 ソ。ころも。著物。

【裳】 モ。腰より下部につける衣。

【軍】 イクサ。軍勢。軍士。

【新室樂】 ニヒムロウタゲ。居室が新築落成したのを祝ふ酒宴。

「うたげ」は「掌をうちあげ」の約であるといふ。酒を飲み、手で拍子をうちあげて騒ぎ楽しむ意。

【とよみ】 聲高に騒ぐこと。

【食物】 ヲシモノ。をす品物の意。「をす」とは、飲む、食

ふ、著るなどの敬語。

【御髮を童女の髮の如く梳り垂れ】 額に結んであつた髮を解いて、梳つて垂髪としたこと。上古の未婚の娘は髮を垂れてゐたのである。

【己が中に】 二人の間に。

【熊曾】 兄の熊曾建である。

【その刀をな動かしたまひそ】 刺し通してある刀を動かさしめると、傷みが甚だしく、又死を早めるので、死ぬ前に言ふべきことを持つてゐる身として、刀を動かさないでくれと嘆願したのである。

【大八島國】 古事記上卷に伊邪那岐・伊邪那美二神の神婚があつて後、生みたまうた諸島の名が見えてゐる。即ち淡路三穂之狹別島（淡路）・伊豫二名島（四國）・隱岐之三子島（隱岐）・筑紫島（九州）・伊岐島（壹岐）・津島（對島）・佐渡島（佐渡）・大倭豊秋津島（本州）の八島である。これを總稱して大八島國といふ。

【倭建】 ヤマトタケル。熊曾建に對して、東方大和の勇士の義で申したのである。

建は前にも述べた如く、その地方の豪勇の長者をさす名である。古事記に「出雲建」の名も見えてゐる。

【熟瓜】 ホソチ。古事記新講に「和名抄に熟瓜をホソチと訓み『或説極熟蒂落之義也』とある。瓜は熟すると自ら蒂から落ちるから『ほぞおちの瓜』の意でかく名づけたのである。熟瓜は容易く裂く事が出来るので、たやすく斬り裂くことの譬に用ひたのである。

【山の神・河の神】 山や河の要地に據つて威力を振つてゐる神々をいふ。

【穴戸の神】 アナドのカミ。古事記新講に「穴戸（穴門）は穴の如き關門をなしてゐる處の義で、海にあつては海峡を指すのである。長門國の名も關門海峡を穴門と稱へた所から起つたので、アナガト（がは助詞）の略言である。倭建命が討伐せられた穴戸神も、長門の荒ぶる神を指したのであると見る説もあるが、書紀によれば、『到吉備以渡穴海、其處有惡神則殺之』とあるから、この場合は即ち吉備の穴戸神を指したのであることは明白である。三備（備後・備中・備前）の海岸には大小の島々

が散在して幾箇所にも穴門があるが、上代の地形に於ては、殊に多くあつたのであるから、穴戸神が何處に居つたものであるか詳かでないが、(備後國安那郡—現在深安郡—も穴門による名であるが、必ずしもそれを指すものとはいはれない。)恐らく穴戸神はこれらの穴門を扼して海上權を掌握し、航行の船舶を脅かした者であつて、後世因島(備後)や來島(伊豫)などを根據地として勢力を振つた、かの海賊大將軍の如き者に當るであらうといふ事である。」と記してゐる。尙この説は「歴史地理」第三十四卷第五號所載の喜田貞一博士の穴門考に據つて述べた由を註記してゐる。

【ことむく】 そむいてゐる者を我が方へ向かしめる義。従はせる。平定する。

【やはす】 やはらげる。平和ならしめる。従順ならしめる。

【頻きて】 重ねて。引續いて。しばしば。

【柵の八尋矛】 柵の木で作つた長い鉞である。「八尋」の「八」は正確な數を示してゐるのでなくて「彌」の義で、

數量の大きなことを意味する。

【神のみかど】 伊勢の大神宮をさす。そこでは倭姫命が齋宮として仕へて居られたのである。

【なも】 助詞「なむ」と同じ。物事を指示するもので、「ぞ」に似て意味稍、弱い。

【國の造】 上古、國郡を統治した世襲の地方官。大化の改新以來之を廢し、その事務に堪へたものは擧げて郡司とし、その地の神事を掌らせたが、後には多く廢絶した。

こゝにあるのは、朝廷から任命せられたものでなくて、土賊の酋長が自ら造と稱してゐたものであらうか。

【白さく】 マヲさく。申すには。

【ちはやぶる神】 暴威を逞しうする神の義。「ちはやぶる」は「いちはやぶる」の約で、勢の強猛なことをいふ。

【欺かえぬ】 欺かれたの意。「え」は受身の助動詞。後の「れ」と同じ。

【向火をつけて】 古事記新講には次の如く説明してある。「古事記傳の説に、向ふから焼けて來る火に對して、此方からも火を放つ時は、彼方の火力は自ら弱るものであ

るといつてゐるが、橋守部は楠氏の兵書を引いて、敵が火を放つたのは、我が後方へ廻る心組であるから、我は機先を制して、自ら後方の草を焼いて、後方から攻めて來る敵を撃退するのであるといつてゐる。(「歴朝神異例」及び「稜威言別」併しこれらの説は實情に適合しないやうである。喜田博士の説に『今でも北海道では、折々山火事があるので、風下に適當な距離を置いて木を切り草を薙ぎ、細い野火止の線を作つて、風上の方の側に、火をつける事を實行してゐる。初は火勢が弱いから、細い道を越えて風下へ火が移る心配もないが、だん／＼盛になる頃には、野火止が廣くなつてゐるから、もはや風下は安全地帯となる。單に野火止だけで向火を付ける事を知らぬと、折角の野火止も往々にして無効になる。昔は森林原野も多く、時に此の様な場合に出會ふので、人々をよくその道理を理解して居たのであらう。支那人も昔からこれを實行してゐる。漢書李陵の傳に、抵大澤葭葦中、虜從上風縱火、陵亦令軍中縱火以自救とある。』「民族と歴史」一卷二號)と。又黒板博士の説にも

【聞く所によれば、迎火なるものは現今アメリカに於ける印度種族などが實行する所で、アメリカの大平原にて野火がその附近に迫るを見れば、彼等はその立てる所に更に火を放ち、却つて此方より野を焼き擴げ、以てその危難を免かるゝ事を得るのであると。さればこの傳説は蝦夷人等が野火に遭遇した場合に實行した事が、日本武尊に附會せるものではあるまいか。』(「國史の研究」二五二頁)とある。此の二説は最も實際に適合するものやうである。』

【走水の海】 相模と對岸安房との間の浦賀海峡。東京灣口で潮流の激しいところである。

【たゆたふ】 物の進まんとして進み能はざる貌。

【まけのまつりごと】 天皇から任せられた責務。

【かへりごとまをす】 復命すること。

【菅壘】 スガダタミ。菅の葉で編んだ筵の類。

【皮壘】 カハダタミ。獸皮の敷物。

【絶壘】 キヌダタミ。絹の敷物。

【その後】 弟橘比賣。

【さねさし】 相模の枕詞。

【とひしきみはも】 我が身の安否を氣遣つて、無事であるかとたづねて下さつた君の有難さよとの意。

【さねさしの歌】 一首の意は、相模の小野の燃え盛る火の中に立つても、なほ私の事を思つて、無事であるかとたづねて下さつた、情深い我が夫君よとの意。

【御墓】 相模國中郡山西村に吾妻神社があつて、橘比賣命の御陵であると傳へてゐる。又浦賀町走水には弟橘比賣を祀る走水神社がある。

【入りいでまして】 蝦夷の國に深く進み入られたことをいふ。

【いでます】 「幸し給ふ」の意。

【蝦夷】 エミシ。古事記新講に曰ふ。「アイヌを指す。……

アイヌは有史以前に日本全土の大部分を占めてゐたものらしく、それが大和民族の發展によつて、漸く北方に追ひやられて、今日の如き状態となつたのである。

アイヌが本土に廣く棲息したことは、アイヌ語の地名が各地に分布してゐるのに徴して明かである。アイヌに就

いては、書紀景行天皇二十七年の條に詳細な記事が見えてゐる。蝦夷が常に勇悍なる抵抗をしてゐた事は、神武

天皇紀の歌に「えみしを、一人百人、人はいへども」とあつて、一騎當千の兇賊と稱へられてゐた事によつて

知られる。なほ征夷大將軍が後世まで蝦夷征伐に當つてゐたのも、その勢力の強大であつた事を思はせる。」

【糧】 カレヒ。乾飯（カレイヒ）の約つた語。飯を乾したもので、旅に携帯して行き、湯や水に漬け軟かにして食ふ。

【昨のこり】 食へのこり。

「みをし」の「み」は敬語。「をし」は「食ふ」意。又は食物をいふ。

【蒜】 ヒル。山蒜の異名。百合科青葱屬の多年生草本で、平行脈のある細長い葉があり、その間から高さ一尺四五寸位の花莖を出して、夏季に白色の小花をつける。食用とすることが出来る。

【ねもごろに歎かして】 つくづくと深く嘆かれて。

【歎かす】 「歎き給ふ」の意。

【あづまはや】 本居宣長の古事記傳に「あづまといふべきをあづまといふは、己が妻を萬葉十四におのづまと言

へると同じ言ひざまなり。……はやはその物を思ひて深く歎息く辭なり。はもやも歎きの聲なり。「はも」と似て

「はも」よりも重く聞ゆ。……

さてこゝは彼の海に入りましし弟橘姫の命を思ほしめしとかく詔へるなり。凡て海にまれ坂にまれ、その國の境を離るゝ際には、別のかなしきの、更返りて堪へがたきものなればぞかし。……」とある。

【にひばり筑波を過ぎて幾夜か寝つる】

倭建の命の東夷征伐は日高見國（今の陸前地方）までに及んだといふ。そこから還り給ふ時、常陸の新治・筑波地方を過ぎて甲斐に進まれたので、その道中を回顧して「新治・筑波地方を過ぎてから幾夜寝たであらうか」と仰せられたのである。

【御火焼の老人】 夜警のために御寝所の外で篝火をたく老翁。

【かどなべて、夜には九夜、日には十日を】 「かどなべて」

は「日々並べて」の義。五日・六日などの日である。即ち日目を重ねての意。

日を重ねて、こゝに至るまでに、夜は九夜、日は十日になります。と答へたのである。

この唱和は、我が國に於ける連歌のはじめとして有名である。

【美夜受比賣】 ミヤズヒメ。書紀に「尾張氏之女」とあり熱田大神縁起に尾張氏の健稻種公の妹宮酢媛とある。

【徒手】 ムナデ。武器を帯びぬこと。素手。

【直に】 タ々に。ちかに。直接に。

【白き猪】 上代は肉の賞美すべき獸なる鹿・猪の類を「しし」（肉の義）といひ、それを區別する時にカノシシ（鹿）キノシシ（猪）と稱し、又單にカ・キとも稱した。

前の白鹿と同じやうに、山の神が化けて白猪となつてゐたのである。書紀には大蛇となつてゐる。

【言擧】 コトアゲ。言葉に立てて言ひたてること。特に廣言すること。

【大水雨】 オホヒサメ。氷雨は雹のこと。雹を盛に降らし

たのである。

【玉倉部】 タマクラベ。大日本地名辭書によれば、近江國坂田郡横川と、美濃國不破郡今須との中間にある長鏡は玉倉部を訛つた地名であらうといふ。

【寤む】 サむ。正氣づくこと。

【居寤の清水】 キサメのシミヅ。

【發たして】 出發し給うて。

【上】 うへ。「當藝野の上」とは「當藝野のあたり或はほとり」の意。

萬葉集に「高圓の秋野の上の」「高圓の野の上の宮は」等の用例がある。

【虚よりも】 大空をも。

【翔る】 カケる。空を飛び行くこと。

【當藝斯】 タギシ。船の舵をいふ。

【つかして】 敬語「つき給ふ」

【やゝに】 ゆるくと。

【一つ松】 桑名郡古濱村と戸津村との間にある八劍宮は、延喜式の尾津神社であつて、その地に劍掛松の跡といふ

ものを傳へてゐるといふ。

【尾張にたゞに向へる云々】

「たゞに向へる」とは眞正面に相對してゐることをいふ。

「吾兄を」は松を親愛して呼びかけたのである。日本書紀には「あはれ」となつてゐる。

一首の意は、尾張の國に眞正面に相對してゐるこの伊勢の尾津の崎にある親愛なる一本松よ、以前自分が忘れておいた劍をそのままに今日まで保存しておいてくれた。若し松が人であつたならば、その賞として太刀を帯びしやり、衣を着せてやるのであるのに、親愛なる一本松よ。といふのである。

【勾】 マガリ。本巻第六課、土佐日記に「山崎の店なる小櫃の繪も、まがりのほらの形もかはらざりけり」とある、まがりと同じものである。米の粉をこねて螺貝の形に曲げ、油で揚げた菓子である。

「三重の勾なす」とは、命の足が腫れて幾つもの紋が出来たやうになつたのをいつたものである。

古事記傳に「初にたぎしの形に髻へたまひしほどより

も、又益、いみじく腫れまさりて、今はそのさま、緒を

以て物を幾重にもきびしく絞り隔てたらむ如く、俗言にしぎりの入りたるといふさまにて、長き物の蟠旋り重なる如くなる形なるを、のたまへるなるべし。いたく腫れたる物は、處々絞りとる如くなることあるものなり、そのさま、かの寶螺貝の形と思ひ合はすべし。すべの形の曲れるよしの髻にはあらず、いかに歩み疲れても、足は曲る物には非ればなり。」とある。

【國思ばして】 古事記傳に「御病漸々に重りますまゝに、いよく倭の國を慕はしく、戀しく思ほしめせるなり」とある。

【大和は國のまほろば云々】

「國のまほろば」は古事記新講に「書紀には『まほらま』とある。『ま』は接頭語。『ほろ』はホラで、洞、螺、堀などによつて知られる如く、空虚の義で、最後の『ば』は書紀の『ま』を訛つたので間の意である。即ち眞空虚間の義で、四周青山に圍まれた大和平野を指していふのである。

「たゝなづく」山の重なり合つてゐるさまをいふ。
「青垣山」平野の周圍を垣をめぐらした如くに取圍んでゐる青い山をいふ。
一首の意は、大和は四周山に圍まれた平野の國である。重り合つた、垣をめぐらしたやうな山々の中に取り圍まれてゐる大和の國は實に愛すべきよい國である。といふのである。

【命のまたけむ人は云々】

「またけむ」は「全からむ」。「善からむ」を「よけむ」「悪しからむ」を「あしけむ」といふと同一の語法。

「たゝみこも」疊蓆。「へ」の枕詞。

【平群の山」頭註を見よ。

「熊白橋」クマカシ。「くろがし」ともいふ。穀斗科の常緑喬木。高さ四五尺に及ぶ。葉は廣披針形又は長橢圓形で、裏は灰白色である。果實は椀狀の穀斗を有す。

「髻華に挿せ」古事記傳に「うづに挿すとは、別にうづといふものありて、それにさすにはあらず、挿す物ぞ即ちうづなる。後の世に挿頭といふ物が即ち古のうづなり。」

「その子」上に「命のまたけむ人」といつたその人を指したのである。これは命が従者に對して呼びかけられたものである。

一首の意は、古事記傳に「御病漸々に重りますますに、いよ、倭戀しく思ほしめてよみ賜へるにて、命の全くてあらむ人等は、倭の國に歸りて、平群の山の白檜の葉を折りかさしてたのしく遊ぶ。吾は倭にもえ歸らず、此處にして今死なむとするが悲しきことと讀みたまへるなり。」とある。

【思國歌】 故郷を思慕する歌の意。

【はしけやし】 書紀に「はしきよし」とあるのと同じ。「はしけ」は「うるはし」の「はし」で、親愛の意。

【やし】は感動の意をあらはす助詞。

【方よ】 「方より」

【雲居】 普通には雲の在る處をいふのであるが、轉じて直ちに雲をさす場合もある。こゝでは後者の意。

一首の意は、記傳は「國思ひ給ひて、倭の方を見やりたまへるに、そなたの天に雲の立ち來るを見給ひて、はし

く思ふ吾が家の方より、雲の立ち來よと讀み給へるなり。」とある。

【片歌】 カタウタ。五句の短歌・六句の旋頭歌の半分にあたる三句から成つてゐる歌をいふ。

【にはか】 危篤の意。

【をとめの床の邊に云々】

「をとめ」は尾張の美夜須姫をさす。

「劍の太刀」、語が重複してゐるやうであるが、萬葉集にも屢、「つるぎたち」「つるぎのたち」と詠んである。こゝでは草薙劍をさす。

【神あがります】 薨去せられたことをいふ。

【譯使】 早馬使の義。命の薨去のことを急使をたてて大和の皇居に注進したのである。

三 古事記を讀みて

一 解題

相馬御風著「黎明期の文學」から採つた。本課に論じたところは、古事記の中にあらはれてゐる日本民族の精神を中心問題とし、それを具現した代表的英雄としての日本武尊の御事蹟を實例にとつて吟味し、古事記時代に於ける日本民族の明朗な積極的生活を讚美したものである。

二 作者

相馬御風 ソウマ ギョフウ。
名は昌治。越後國糸魚川の人。明治十六年七月生れ。早稻田大學英文科を明治三十九年卒業し、爾後早稲大學に教鞭を執り、又「早稲田文學」の編輯に當り、創作・評論等々發表して文壇に独自の地歩を占めてゐたが、大正十年「還元録」の一書を殘し、一家を擧げて郷里糸魚川町に歸つた。爾來靜かに青年の友として撓まざる思

三 主眼

案と研鑽とを續け、殊に郷國の先哲良寛和尚を紹介推讃して一世の注目を集めた。著作は數多あるが、評論研究としての「黎明期の文學」「有機生活の文學」「歐洲近代文藝思潮」「個人主義思潮」「ゴリキ」「大愚良寛」など、隨筆としては「凡人淨土」「田園春秋」「砂上漫筆」「樹かけ」など、詩歌としては「御風詩歌集」等がその主なものである。

四 概説

第一節 古事記は赤裸な日本民族の生活の記録である。
第二節 古事記に於て知らるゝ、日本民族の祖先の精神

—その一つ、生のための努力。

第三節 精神のその二つ、神は生活力の象徴であつた。

第四節 生の努力は必然的に悲劇的人格を生む。

日本武尊は就中偉大なる悲劇的人格である。

第五節 國家的に著しい發展をなし、内部的革新の行はれつゝある時、古事記時代に於ける祖先の積極的生活は我等の憧憬的である。

五 取扱上の用意

古事記全體を讀んでゐないものにとつて古事記の評論は理解の上に於て不便であらう。しかし幸にしてこゝにあげられたものは、古事記の特色中の主なる一項を論じ、その上中心においたのが日本武尊であるために、前課を讀んだ生徒には或程度までの理解は容易に行はれ得ることとは幸である。故にどこまでも前課と連絡をとり、むしろ前課の理解を完成する作業の氣持で取扱ふべきであらう。前課はこゝに至つて完成するものと見たいのである。

三 古事記を讀みて

相馬御風

我々の祖先の最も力ある生活を後世の我々に示すものは、ひとり古事記並に日本書紀あるのみである。殊に古事記にあつては、徹頭徹尾、潤飾なき日本民族そのものの生活の記録である。その史實上の價値はどうであつても、とにかく我等の祖先の生活全體が、かの古事記全卷に表象化せられてゐることだけは、疑ふわけには

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年新潟
縣糸魚川町生
日本書紀
三十卷
神代より持統天
皇に至る編年史
六國史の一
舍人親王撰

ゆかぬ。そして我々日本民族の生活史の殆ど全部を包んでゐるといつてもいゝほどな、かの佛儒二教の空氣の全然混じてゐない我が民族の記録は、たゞこれあるのみである。此の點に於て、我が民族にとつて最も尊い、そして最も廣く最も深く讀まれ味はるべき書物は古事記である。古事記は實に我等日本民族の生活の源であると思ふ。(第一節)

第一節

古事記を讀んで我々の感ずるところのものは、たゞ偏に生きんとする人間の力である、あらゆるものを自己の生活に統一しようとする努力である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀なかつた。彼等は人間を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生活の一部で、彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等は、その身に纏ふべき衣服の材料を彼等に供給する蠶も彼等の生命を繋ぐべき稻も、粟も、小豆も、麥も、大豆も、皆彼等の肉體から分化して出たものと觀た。(1) それほどまでに彼等は人間の生活を擴大してゐた。彼等の眼中には、人間の運命の最後は死でなくして發展極りなき生であつた。死の國にある伊邪那美命が、汝の國

(1)古事記の神話がそれを語つてゐる。

の人草、一日に千頭絞り殺さな。といはれたのに對して、生の國にある伊邪那美岐命は、汝さし給はば、吾はや一日に千五百産屋立ててむ。と答へられた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐる。殊に古事記全巻を通じて、熱烈な生の力が飽くまでも死の力と戦つて、それに打勝たう、それを脱けださうと悶えてゐる事實が、到るところに書かれてゐることは、最も注目すべきことである。後世の日本人に見るが如き、死に對してひたすら悲しむやうな態度は少しも見えない。死に對して悲しみ、歎きは、はてはあきらめるやうなことは、我等の祖先にはなかつた。彼等の死に對して悲しみ歎く感情は、常に一轉して死に對する憎惡の念となり、挑戦の力となつた。彼等は死といふ事實に對してあきらめる代りに戦つた。彼等はいかなる境遇にあつても常に生きんことを欲した。生きようと努力した。彼等の生の欲求は、死をも生に變へなければ止まなかつた。(第二節)

第二節

かといつて、他の未開の民族に見るやうな多神的でもなく、また野蠻な自然物崇拜でもなかつた。神はすべて人間であつた。威力を有する人間は即ち神であつた。随つて、謂はゆる敬神の念には、救済を祈るやうな分子はなかつた。敬神はたゞ肉身の源、生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絶對的の主權者とは思はなかつた。敬神は絶大な人格に對する讚美と自己の生命の源に對する讚美とに外ならぬのであつた。祈念はまた常に幸福本位であつた。我を捨てて神にすがるといふよりは、私の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならぬのであつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大せられた象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふところに強固な基礎を有する我等の祖先の敬神觀念は、他面に於てその念力に逆らふところのものの衰滅を信じた。(第三節) 偏に生活の發展と擴大とを意志とした我等の祖先の生活は、随つてまた非常に努力的なものであつた。境遇に屈することを知らぬその生活は、常に意志そのものの悲劇であつた。我が國の文藝

(1)これが我が國特有の現象である。

第三節

的産物で、悲痛な生活意志の發現を見得るものは、古事記を措いて他にないといつてよいからである。この點に於て最高な意味の悲劇的人格は、我が國の歴史中、古事記以外には求め得られないと思ふ。

古事記中に書かれた數多ある悲劇的人物の中で、最も我々の心を惹くのは日本武尊である。尊はいかなる難事をもし遂げて自分の力を發展させようとした。自分の事業の爲に、最愛の後弟橘姫が眼前で犠牲となられるのも敢へて忍ばれた。しかしそれであるが、尊はなほその妻を慕うて、阿豆麻波夜の歎聲を禁じ得なかつた。

かくて、尊はあらゆる困難と戦ひ、あらゆる危険を冒して東北地方平定の大任を一步々々に果した。自己の苦しい境遇を知りながらも、なほ自己の努力を惜まなかつた。しかし、その運命は遂に不幸なものであつた。いかなる強敵に對しても挫けなかつた尊も、病氣には敵し得なかつた。東北討伐の大業を果して都へ歸る途上、尊は終に伊勢で此の世を去られた。吾が心恆に虚よりも翔り

行かむと念ひつるを、今吾が足え歩まず、當蘆斯の形に成れり。といふ尊の歎聲には、實に悲壯な響が籠つてゐる。歩一步に疲れて衰へゆく病軀をよろめき運びながら、尊は絶えず故郷なる大和の國を戀ふる歌をうたはれた。歌ひながら終に斃られた。就中、

命の またけむ人は たゞみこも 平群の山の 熊白楸
が葉を 鬢華にさせ その子

といふ歌の如きは、最もよく尊の生を愛せられる心の熱烈であつたことを示してゐる。身は逆境にあつて、旅に斃れようとしたが、らも、なほかつ、命の全からん故郷人よ、汝等の命の全からんかぎりには、熊白楸の葉を頭に飾つて、楽しく面白く遊べ。と歌ふ。これを後世の死を悲しみ、運命を恨む數多の人々の歌とくらべて見ると、當時の人々の生活に對する心持の如何に積極的であつたかに驚かれるではないか。更に驚かれることは、日本武尊が薨去の後、大きな白鳥と化して、所定めず、行方知れず、天翔り行き給うたことである。御子たちが哭き叫びながら、慕ひ追ふをも顧みられないで、かの大きな白鳥は、野より海へ、海より山へ、山より海へと、天翔り天翔

つて、最後はその行方が知れなくなつた。白鳥の止る處に造られた幾つかの御墓は、遂に日本武尊の最後の住家ではなかつた。御墓はすべて空虚な外形のみで、日本武尊その人の生命は、遂に止る所を知らなかつた。發展極りなき日本武尊の生命は、結局、墓を脱れ脱れて、生ける白鳥となつて天翔り行く生命であつた。(第四節) この日本武尊の生涯のやうに、雄々しい努力に充ちた生活は、我が國の歴史に於ては、殆ど他に求められない。日本武尊の生涯は一刻も休みなき努力の生涯であつた。

第四節

いかなる境遇にあつても、尊の強烈な生活力は常に外に向つて發展した。此の偉大な生活の發展力の向ふところ、尊はいかなる敵とも戦ひ、いかなる敵をも斃さねば止まなかつた。尊は自ら知れる逆境裡にあつて、死に瀕しながらも、なほ聲をあげて生を讚美する歌をうたつた。尊は死してもなほ墓の暗闇を脱れて、天翔り天翔つた。かくの如く最後までも熱烈な生の力の充ち満ちた生涯は、我が國の文藝的産物中、古事記を措いて他のどこに見出し得られようか。尊を通じて感ぜられる我等の祖先の生活そのものに

對する心持が、いかにも我々には慕はしいのである。人間の生活意志そのものの悲痛な發展は、我が國の藝術的産物中、ひとり古事記に於てのみ見られると思ふ。外に向つて最近著しい國家的發展をなし來つた我が日本民族は、內的方面にもまた最近著しい革新の行程を辿りつゝある。無論それは外國思想の影響が多分にあるのだが、しかし、大體からは從來の消極的思想に對する新たな積極的思想の勃興と見て、差支なからう。長い年月の間續いて來た我々民族の消極的生活に對する新しい生活慾の勃興、その生活全體の革新の過渡期、それが現今の我が文藝界を中心とした思潮の情態ではなからうか。かう考へて見て、更にかの古事記時代に於ける我々祖先の積極的生活の空氣を味はつて見ると、我々には一種堪へがたい憧憬の念が涌くのを覺える。(第五節) (黎明期の文學)

第五節

語句の解釋附文法・修辭法上の吟味

【日本書紀】ニホンシヨキ。三十卷。古事記に次いで成つ

たものである。六國史の第一で、最も早く成り、且つ最

も著明な我が國の正史である。

神代より持統天皇までの事蹟を編年體に纂録したものである。

元正天皇の養老四年五月、舍人親王・太安萬侶等が勅を奉じて編修した日本書紀三十卷、系圖一卷を上つた。安萬侶は古事記の編者で當時有数の學者であつたらしい。この書は支那の史書の體裁を模倣したもので、支那史書中の字句をそのままに襲用したもの少くない。又文飾に過ぎるところも多く、古事記の古樸なるに比して遙に遜色が見える。しかし歷朝の事蹟は古事記以上に精細を極めてゐる。

【徹頭徹尾】 テツトウテツビ。

物の一番初めから最後まで。始終。總體。

朱子の語類に「敬字是徹頭徹尾工夫」

又、少しも。決して、斷じて等の意味の副詞として用ひる。

【潤飾】 ジュンシヨク。光澤を添へること。表面をつくろひ飾ること。

【表象化】 表象とは、現在刺戟がなくして生じた心像、即ち記憶心像・想像・概念等をいふのである。こゝで表象

化といつたのは、個々の生活事實、個々の思想・個々の民族精神といふやうなものをそのままに描くのでなく、それらを抽象し、それらに共通な要素が概念的にあらはれて、た事記全體を組立て色彩つてゐることをさしたものである。

【象徴】 ショウチョウ。Symbol. 或る物を表現するのに、他の物を借りてすること。そしてそのあらはす物の方が本體よりもはるかに形式的に短小であるのが特色である。

【蠶も稻も粟も云々】

古事記上卷に「食物を大氣津比賣神に乞ひたまひき。ここに大氣都比賣鼻口また尻より種々の味物を取り出でて、種々作り具へてたてまつる時に、速須佐之男命そのしわざを立ち伺ひて、きたなきもの奉ると思はして、乃ちその大氣津比賣神を殺したまひき。かれ殺さえたまへる神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。かれこゝに神産巢日御祖命これを取らし

めて種となしたまひき。」とある。

【死の國にある伊邪那美命云々】 古事記上卷にある神話である。

伊邪那美命は諸神を生み生んで、最後に火の神を生まれる時、その火のために焼かれ遂に死し、黄泉國に往つた。そこでその夫君たる伊邪那岐命がその死せる妻に會はうがために黄泉國にたづねて往つた。その時伊邪那美命は、黄泉神に向つて再び現國に歸りたい旨を申出るから、その間は決して自分の姿を見てはならないとかたく伊邪那岐命を戒めておいて殿の内に入つた。ところが中々伊邪那美命が出て來ぬので、ひそかに禁を犯して伊邪那岐命がのぞいて見ると、伊邪那美命はまことに醜怪な姿と化してゐた。そこで夫の命は恐れてひたすらに黄泉國から逃げ歸つたが、妻の命は自分を恥かしめたと怒つて黄泉醜女をしてこれを追はしめた。夫の命は辛うじてこれを防ぎ逃れて來たところ、最後は愈、伊邪那美命自ら追ひ迫つた。そこで夫の命は黄泉比良坂に千人力で引く程の大岩を引出して道をさへぎり、その石を中にして、いよ

いよ絶縁する旨を言ひ渡したのである。その時に伊邪那美命が「そんなわけならこれからは敵意をもつて對するから、あなたの國の人を一日に千人絞め殺してやる。」といふと、伊邪那岐命は「それではこちらでは一日に千五百人の子供を産むやうにしよう。」と報ひたといふのである。

「絞り殺さむ」は「グビリ、コロ、さむ」と訓む。

【千五百産屋】 チイホウブヤ。千五百の産屋。上代には出産に血を見る穢を忌んで、別に産小屋を造る習慣であつた。現在に至るまで猶この風習の存してゐる地方がある。

【死を生に變へる】 その一例は古事記上卷にある大國主神に關する神話にも見られる。

大國主神が兄の八十神の怒りを受けて、手間の山本で、あざむかれて灼熱した大石にうたれて死んだ時、大國主神の母の刺國若比賣命の手當によつて再生した。その後また大國主神が八十神に謀られて、大木の間に挟まれて死んだ時も母君の看護によつて再生した。

【多神】 タシン。多神教。一系宗教の中で、性質を異にする多数の神を崇拝するもの。性質を異にする多数の神を信仰するのであるから、各、それに應じて崇拝の方法を異にし、従て名稱、形像を異にする諸神は、獨立し、又同一人間でも、時に従つて異なる神を崇拝し、又一宗教中で、人々は思ひ／＼に諸神を崇拝するのである。

【自然物崇拜】 野蕃・未開の民の間に行はれる信仰で、自然物を神格他してこれを崇拝するものである。その対象となるものは廣く自然現象及び物體である。雷・電光・雲・日・月・星・川・河・森・林・沼・石・狐・狸・蛇・熊・貉・生殖器、其他多くのものが崇拜の対象とされる。

【悲劇云々】 祖先の生活が非常に努力的なものであつたから随つて最高な悲劇的人格が古事記の中に見られるといふことは、どんな因果關係があるのであうか。

それは、悲劇を構成する要素を考へればすぐに納得のいく問題である。悲劇とは一箇の人、一箇の意志が、これに對立し、これに反抗するところの他者（人物・自然・環境・運命等の何物でもよい）に對してはげしい争闘を

挑み、そしてその争闘の結果、遂に一箇の人物、一箇の性格は萬事休して戦に敗れ死に終るといふ形式をそなへたものでなくてはならない。

故に悲劇の深刻なるためには、争闘の劇甚なこと、換言すれば一箇の人、一箇の性格の意志が強固で、その抗争力の強大なことを要する。

そこで最初に掲げた努力的な性格と悲劇的人格との因果關係が明かになつて来る。

【伊勢で此の世を去られた】 倭建命が遠征の途中に於ていか程の困難に遭遇し、どれ程の苦惱をなめられたとしても、最後がはな／＼しい故郷への凱旋となり、論功行賞による榮耀の位を與へられるならばそれは悲劇ではあり得ない。苦惱と戦ひつゞけて最後に伊勢で死なれたことによつて悲劇が成立するのである。

【白鳥と化して云々】 古事記によると、倭建命の薨後、能褒野に御陵を造つたが、白鳥と化して天翔り、濱に下り立つた。それから更に磯に飛び、更に河内の國の志幾に留つた。そこでこの地に御陵を造つたが、又もやそこか

ら白鳥となつて遂に天高く翔け去つたとある。

【自ら知れる逆境裡】 古事記によると、命は西の方熊曾を討つて大和に歸つたところが再び東夷征伐の勅命を受けた。命はこれを以て天皇の御心中を忖度して、かゝる難事業を重ねて命ぜられるのは自分に早く死ねよとの御考であらうと解釋し、叔母倭比賣命に對して泣いて訴へて居られる。して見れば、御自身にとつては正に逆境である。また東夷征伐の最後は悲慘であつた。伊吹山での人事不省、發病、さうして故郷を望んで急がれるその病體は、たぎしの形となり、三重のまがりに似た足となつて日毎に衰弱してゆく。命にとつてはたしかに逆境であつた。

挿圖の説明

古事記 春瓊本

古事記の古寫本には眞福寺本・伊勢本・宮内省本・神宮文庫本・中津本・堀本等があるが、春瓊本もその一つである。

こゝに載せたのは天岩屋戸の條の一部である。

四 寧樂の句

一 解題

萬葉集の歌を採つた。左に萬葉集について解説しよう。

一、編者・時代

本項の参考となるべき記録には左の如きものがあるだけである。

- (1) 古今和歌集卷十八、雜下、
貞觀御時萬葉集はいつばかりつくれるぞと問はせ給ひければ詠みて奉りける 文屋のありす五
神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞ
これ
- (2) 新撰萬葉集序（寛平五年九月二十五日）
夫萬葉集者古歌之流也……（中略）……於是奉輪綜緯之外
更在人口盡以撰集成數十卷……（下略）
- (3) 古今和歌集かな序
……（前略）……古よりかくつたはるうちにもならの御時よ
りぞひろまりにける。……かのおほむ時におほきみつのく

らる柿の本人唐なむ歌の聖なりける。……又山部の赤人と
いふ人ありけり……此の人々のおきて又すぐれたる人も吳竹
の世々に聞え、片絲のよりくに絶えずぞありける。これより
さきの歌を集めてなむ萬葉集と名付けられたりける。……か
の御時よりこのかた年はもとせあまり世はとつきになむなり
にける。

- (4) 古今和歌集眞名序
昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾來時歷十代最過百年
等集りて萬葉集を撰ばせたまふ。
- (5) 榮華物語 月の宴
昔高野の女帝の御代、天平勝寶五年には左大臣橘卿、諸卿大夫
右の資料と萬葉集そのものの性質の考察とによつて、撰
定の時代及び撰者を撰定するより仕様がなないので、古來
種々の異論を生じて、未だ決定を見ない。
従來の諸説を列擧すると左の如くである。
- (1) 平城天皇勅撰説
顯昭が、古今集序註及萬葉集時代雜事の中で、平城から

醍醐まで十代である事と、大同から延喜までほぼ百年である事とは、古今の序にあてはまるので、平城天皇勅撰説を主張した。顯昭の外には、八雲御抄・異制庭訓往來・尺素往來等が同説で、平城天皇の御代に橘諸兄が撰したとする。

(2) 聖武天皇の勅により橘諸兄が撰定し、更に孝謙天皇の勅により藤原眞楯が加へたとする説。

この説を唱へた人は、道因・勝命の外に、清輔(袋草紙)・俊成(古來風體抄)等がある。

(3) 橘諸兄の撰定に、家持が續撰したといふ説。

拾芥抄に見える藤原定家の説——孝謙天皇の時代に、諸兄勅を奉じて撰し、諸兄の死後、家持が筆を加へたものとする。仙覺律師は萬葉集註釋の第一巻に於て、卷十九の左註の例をとつて、諸兄・家持兩人の撰としてゐる。聖武より醍醐まで父子相續を一代として十代となるといつてゐる。此の外荷田春滿も諸兄の撰したものに家持の集の混じたものとしてゐる。

(4) 家持の私撰説

此の説は僧契沖がはじめである。

「集中を考へ見るに勅撰にもあらず、撰者は諸兄公にもあらず

して、家持私家の家に若年より見聞に隨て記しおかれたるを十六卷までは天平十七年の頃までに、二十七八歳の内に撰び定め、十七卷の天平十六年四月五日の歌までは遺たるを拾ひ、十八年正月の歌より第二十の終までは日記の如く部を立てず次第に集めて寶字三年に一部と成されたるなり。〔代匠記總釋〕
雅澄は古義に於いて、この語をうけて、家持の草案のまゝ傳つたといふ事程かであるとしてゐる。

(5) 諸兄撰と家持家集其他種々の集といふ説

これは賀茂眞淵が萬葉考に述べた説である。眞淵は今の卷一・二・十三・十一・十二・十四の六卷を古萬葉集とし、あとの十四卷は家々の集などであつたのを、後の代に一つにまじつて二十卷となつたとし、卷の順序も改めてゐるのである。

(6) 卷一・二勅撰説

これは品田太吉の説。(心の花十七卷十號、書畫苑一卷一・二號・アララギ十三卷八號等)
佐佐木信綱博士、この説に賛成。

(7) 家持以後の撰とする説

武田祐吉博士、「上代國文學の研究」の「萬葉集の撰定に關する研究」

(8) 寶龜二年以後とする説。

山田孝雄博士、「心の花第二十八卷第十二號」の説。

それは卷十四の東歌で國名の明なもの、東海道は遠江から、東山道は信濃からいづれも東へ國の順序に配列されてゐる。そしてその相聞歌の部に於て、武藏の國は相模と上總との間に入れられてゐる。然るに武藏の國が東海道に編入されたのは寶龜二年十月であるそれ以前は東山道であつたから、もし寶龜二年以前にこの集が編まれたものであつたならば、武藏は上野と下野との間にあるべきである。これ本集を寶龜二年以後の編纂と見る依據であるといふのである。

以上諸説あつて、いまだ決定を見るに至らないのであるが、少くも、左く如く考へてゐて差支ないのである。

1 卷一・二の兩卷は家持以前、養老の頃には既に撰定せられてゐたものである。或は勅撰であつたかも知れない。

2 卷九・卷三などのやうに、家持がある資料によつて整理して今日の形をなしたとも考へられる。(山田博士武田博士の説を整理とみるのは、矛盾しない。)

二、内 容

萬葉集で一番古い歌は、仁徳天皇の皇后磐之姫皇后の作であり、最も新しいのは、淳仁天皇の天平寶字三年正月の作である。その間凡そ四百五十年に互つての歌を輯め

たものである。しかし、舒明天皇以前三百餘年間の作は甚だ少く、天武天皇の御宇以後七・八十年間の歌が最も多い。之を大體三期にわけることができる。

前期 (舒明—天武)。約五十年間。

都が飛鳥にあつた時代。歌風は素樸

中期 (天武、持統、文武)。約二十年間。

都が藤原にあつた時代。歌風は崇高。

後期 (元明—聖武—淳仁) 約五十年間。

都が平城京にあつた時代。歌風は優麗。

此の三期は正に美術史上に於ける、推古時代、白鳳時代、天平時代にも比すべきものであつて、その展開のありさまも一致するのである。今日の遺物を以ていふならば、法隆寺の伽藍及び佛像と、藥師寺の塔及び三等佛と、東大寺の三月堂の諸佛との間にある比較對照を、また萬葉の歌に於いても試みる事が出来るのである。

作者は上は天皇・皇后・諸皇族乃至群臣から田夫野人に至り、下つては遊行女婦・乞食にまで及んでゐる。

代表的歌人は、前期に於ては舒明天皇・天智天皇(中大

兄皇子・天武天皇・有馬皇子・額田王、中期では持統・文武兩天皇をはじめ、志貴皇子・柿本人麻呂・高市黒人・山部赤人等であり、後期は山上憶良・大伴旅人・大伴家持・大伴坂上郎女・高橋蟲麿等である。歌數、諸書によつて多少の異同がある。それは「一本云」等を獨立に見るか見ないかによつて起るのである。

袋草子。四千三百十三首。

代匠記。四千五百十五首。

古義。長歌 二百六十二首。

短歌 四千七百七十三首。

旋頭歌 六十一首。

合計 四千四百九十六首。

國歌大觀本 四千五百十六首。

三、用字法

萬葉集は所謂萬葉假名で書いてあり、國訓を寫すにすべて漢字を以てしてある。それで難訓の書となり、後世は専らそれを正しく訓むことに力が注がれてゐる。そして今日まだ悉く正確に訓まれてゐるとは考へられないので

ある。古來この事に就いて注意してきた人は多い。就中、仙覺・契沖を経て春登上人に至り、有名な「萬葉用字格」が著はされた。今日尙氏の説を不十分としている／＼新説を出す學者がある。(岩波講座日本文學第一の森本治吉の研究を見よ。)

四、題號

萬葉集といふ題號については、よろづの言葉の義と萬世の義との二つがある。仙覺・春滿・眞淵・木村正辭は前説を唱へ、鹿持雅澄は後説をとつてゐる。近頃山田孝雄は「萬葉集名義考」(國語と國文學二ノ二)を發表した。

それによると、「萬葉」の字面は既に唐以前の支那の文にも多く見え、本邦でも日本後紀・古語拾遺その他に散見して、いづれも萬世の義に用ひられ、萬の言葉の義に用ひられた事は和漢古今を通じて一も例が見えないのである。

五、參考書

萬葉關係の文獻は非常に多い。くはしくは木村正辭の萬葉集書目提要、近くは校本萬葉集中の「萬葉集諸本解

説「萬葉集注釋書の研究」「萬葉集研究史」等があり、又佐佐木信綱の「萬葉集選釋」の附録「萬葉集研究書目解題」がある。

今は極く大體をあげるに止める。

1、校本萬葉集

佐佐木・橋本・千田・武田・久松

共同編纂。

2、萬葉集總索引

正宗敦夫編

3、萬葉集註釋

仙覺

4、萬葉集代匠記

契沖

5、萬葉考

眞淵

6、萬葉集略解

千蔭

7、萬葉集古義

雅澄

8、萬葉集新考

通泰

9、萬葉集の鑑賞と其の批評

赤彦

四 寧樂の句

近江の荒都を過ぐる時よめる歌

柿本人麿

玉禰 畝傍の山の 樞原の ひじりの御代ゆ 生れまし
し 神のことく 櫻の木の いやつきに 天の下
知ろしめししを 天にみつ 大和をおきて あをによし
奈良山をこえ いかさまに 思ほしめせか 天さかる
鄙にはあれど いはぼしの 近江の國の さなみの
大津の宮に 天の下 知ろしめしけむ すめろぎの 神

近江の荒都
天智天皇の都さ
れた近江の大津
宮の舊址
滋賀縣近江國滋
賀郡滋賀村南滋
賀崇禰寺の址が
當時内裏のあつ
た邊だといふ
大津市の北四軒
奈良山
奈良市の西北に
ある山
歌姫越

辛崎
滋賀の都の東北
琵琶湖に臨んだ
ところ

山部赤人
聖武天皇頃の歌
人

のみことの 大宮は こゝと聞けども 大殿は こゝと
言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れ
る もゝしきの 大宮處 見ればかなしも

反歌

さゝなみの滋賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちかね
つ さゝなみの滋賀のおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢は
めやも

富士山を望みて

山部 赤人

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる
富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日の 影
もかくろひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きは
ばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言継ぎ行
かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士のたかねに雪は

山上憶良

文武天皇より聖
武天皇頃までの
歌人
筑前守
天平五年(一九三)
卒

等しく衆生を
思ふ

吾觀ニ衆生ニ無ニ
偏黨一如ニ羅怛
羅(最勝王經)
羅睺羅
釋迦の子
Rahula
十大弟子の一
人

族を喻す歌

出雲守大伴古慈
悲が淡海三船の
讒言によつて免
官された時家持
が大伴氏の一族
に喻した歌
大伴家持
聖武天皇より桓
武天皇頃までの
歌人

降りける

子等を思ふ歌

山上 憶良

釋迦如來金口正しく説きたまふ等しく衆生を思ふこと
羅睺羅の如し。と。又説きたまふ愛は子に過ぎたるは無
し。と。至極の大聖すら尙子を愛する心あり。況や世界
の蒼生誰か子を愛せざらむや。
うりはめば こども思ほゆ 栗はめば ましてしぬばゆ
いづくより 來たりしものぞ まなかひに もとなかゝ
りて やすいしなさぬ

反歌

銀も金も玉もなにせむにまされる寶子にしかめやも

族を喻す歌

大伴 家持

ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし 皇
祖の 神の御代より 櫓弓を 手握り持たし 眞鹿兒矢

延暦四年(725) 卒

を 手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先に立て
 穀取りおほせ 山川を 岩根さくみて 履みとほり 國
 覺ぎしつゝ ちはやぶる 神をことむけ まつろはぬ
 人をもはやはし 掃き淨め 仕へ奉りて 秋津洲 大和
 の國の 樞原の 畝傍の宮に 宮柱 太知り立てて 天
 の下 知らしめしける 皇祖の 天の日繼と 繼ぎて來
 る 君の御代々々 隠さはぬ 明き心を 皇方に 極め
 つくして 仕へ來る 祖の司と 言立てて 授け給へる
 生みの子の いやつきくに見る人の 語りつぎでて
 聞く人の 鑑にせむを あたらしき 清きその名ぞ お
 ほろかに 心思ひて 虚言も 祖の名斷つな 大伴の
 氏と名に負へる ますらをの伴

反歌

劍太刀いよとぐべしいにしへゆさやけく負ひて來にし
 その名ぞ

志貴皇子

志貴皇子 天智天皇の皇子 歌人 聖德二年(726) 薨

輕皇子 天武天皇の御孫 草壁皇子の御子 安騎野 奈良縣大和國宇陀郡

高市黒人 文武天皇頃の歌人

安禮の崎 靜岡縣遠江國濱名郡新居の崎の舊名

大伴 今の大阪市の海岸あたり

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりけるか
 な

輕皇子安騎野に宿し給ふ時よめる歌 柿本人麿

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月
 かたぶきぬ 高市黒人

いづくにか舟はてすらむ安禮の崎漕ぎたみ行きし棚無し
 小舟 大唐に在る時本郷を憶ひてよめる歌 山上憶良

いさ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬら
 む 病に沈める時の歌

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てず
 して

楸

山部 赤人

ひさかきともいふ
楊桐科の常緑樹

ぬばたまの夜の更けぬれば楸生ふる清き河原に千鳥しば啼く

芳野離宮
奈良縣大和國吉野郡中莊村宮瀧にあつたといふ

暮春の月芳野離宮に幸せる時勅を奉りて

勅

大伴 旅人

聖武天皇の象の小川

むかし見し象の小川を今見ればいよ清けくなりけるかも

奈良縣大和國吉野郡中莊村宮瀧にある小川

布勢の水海に遊覽し船を多祢瀨に泊めて藤の花を望み見て

象山から出て吉野川に入る

大伴 家持

布勢の水海

藤浪の影なる海の底清みしづく石をも玉とぞ吾が見る興に依りて詠める歌

富山縣越中國水見郡水見町にある十二町瀧

わが宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

今は干拓されて小さくなつた多祢瀨

天平五年遣唐使の舶難波を發ちて海に入る

水見町の南四軒田子

時母の子に贈れる歌

もとは布勢の水海がこゝまでつづいてゐた

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子はくくめ天の鶴群

天平五年

防人の歌

聖武天皇の御代

丈部造人麿

聖武天皇 (一三九)

第四十五代

天平勝寶八年(四六〇)崩

壽五十八

元興寺

もと蘇我馬子が大和國高市郡飛鳥に立てた寺で法興寺ともいふ今の飛鳥大佛の地
奈良朝時代に奈良の左京に移り新元興寺といふこの歌は天平十年(七三〇)の詠

大君のみことかしこみ磯にふりうのばらわたる父母をおきて

今奉行部與會布

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは

酒を節度使卿等に賜ふときの御歌

聖武天皇

大丈夫の行くといふ道ぞおほろかに思ひて行くな大丈夫の伴

自ら嘆く歌

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知れらば知らずともよし (萬葉集)

語句の解釋附文法・修辭法上の吟味

【柿本人麿】 カキノモト ヒトマロ。
詳しくは柿本朝臣人麿。此の人の傳記は歴史には見えない。

故にその生涯に就いては萬葉集より外には知るべきがない。萬葉によると卷二にある日並皇子尊殯宮之時(即ち持統三年四月)の歌が時代の知り得られる最初の作である。眞淵は此の時を凡そ二十四・五歳とみる。すると天

智天皇の御代の誕生となる。誕生地に就いては石見、近江などの説があるが、大和が正しいやうである。(石見の高津神社では八月朔日を生日としてゐるが、根據なし。)ともかくも持統・文武の兩朝に仕へた人であることは確かである。持統天皇に供奉して吉野へ行つたり、輕皇子に従つて安騎野にやどり、長皇子に従つて獵路野に赴き、或は近江の荒都を訪ひ、或は筑紫に使用したりしてゐるが、晩年石見國の役人となつて彼の地に下り遂に任地に歿した。歿年は和銅二・三年頃と見るのが穩當である。外に天平元年、神龜元年等の説があるが、從ひ難い。

人麿は萬葉集の代表歌人であるばかりでなく、わが國文學史上の最も偉大なる歌人である。作品は主として卷一・二・三・四にあるが、就中、長歌に秀でてゐる。その歌風は雄渾壯大、誠に調の高いものである。眞淵は評して「その長歌、いきほひは雲風にのりてみ空行く龍の如く、言は大うみの原に八百湖のわくが如し。」といつてゐる。萬葉集には尙「柿本朝臣人麿歌集に出づ」と註記した作がたくさんある。しかしその原本は傳らず不明。後の三

十六人集中の柿本集は後人の集めたものである。

【近江の荒都】 近江遷都は天智天皇の六年三月で、十年十二月に天皇崩御、その後都は飛鳥に移された。人麿の訪れたのは何時の頃か、不明であるが、とにかく既に荒涼たるものであつたらしい。この大津の宮の位置は今の大津市でなく、是より遠く北の方、唐崎の近くの滋賀村南滋賀の地であるといふ。近年、崇福寺の地が發掘せられて、餘程確實なものとなつた。

左に原文を掲げておく。

過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌(卷一ノ二九)

玉手次、畝火之山乃、極原乃、日知之御世從自宮、阿禮

座師、神之靈、穆木乃、彌繼爾爾、天下、所知食之乎、

或云、天雨滿、倭乎置而、青丹吉、平山乎越、或云、虛見倭乎

食來、何方、御念食可、計米可、天離、夷者雖有、石走、

淡海國乃、樂浪乃、大津宮爾、天下、所知食兼、天皇之、

神之御言能、大宮者、此間等、雖聞、大殿者、此間等雖云、

春草之、茂生有、霞立、春日之霧流、或云霞立春日香霧

百磯城之、大宮處見者悲毛、或云見者、左夫思母

反歌

樂浪之、思賀乃辛崎、雖幸有、大宮人之、船麻知兼津。

左散難彌乃、志我能、一云比、良乃、大和木與村六友、昔人二、

亦母相目八毛、一云將會、跡母戸八

【玉櫛】 タマガスキ。畝傍の枕詞。玉はほめていふ辭。畝

火のつゞけ方については諸説ある。或は「畝傍はうねみ、

櫛は采女の衣裳だから、玉だすき采女と續く(燭明抄)

といひ、或は「櫛を纏るとつゞける(春滿)といふ。い

まだよくわからない。枕詞には尙種々の不明のところが多

いことを注意させておき度い。

【畝傍の山】 香具山・耳梨山と共に、所謂大和三山といは

れるもの。藤原宮の西にあり、東の香具山と相對してゐ

る。三山のうち最も高く、頂上の眺めもよい。高さ一九

九米。

【極原】 カシハラ。神武天皇の都をさす。畝傍山の東南極

原の地に宮を造られたのである。いまの極原神宮はその

一部。

【ひじりの御代ゆ】 「ひじり」はこゝでは天皇を申す。「極原

のひじりの御代ゆ」は即ち神武天皇の御代からの意。「ゆ」はよりの義。當時、ヨリ、ユリ、ヨ、ユと四様に用ひた。

【生れましし】 「ある」は生れる。現はれるの意。

【穆の木】 穆は梅とも書く。とがのき、おほつが、などと

もいふ。ツガ、ツギと言をくりかへす枕詞。

【知らしめしを】 「所知」は古來「シラシメシヲ」と訓

んで來たが、僻案抄に「シロシメス」とよんだのでそれ

に従つた。是は祝詞に「所知食」の注に「古語云志呂志

女須」とあるからであるが、萬葉集中、假字書のところ

は、いづれも「之良志賣之……」となつてゐるので、

古來の通り「シラシメシ……」とよむべき由、山田孝

雄の講義に見えてゐる。

【天にみつ】 「そらみつ」に同じ。やまとの枕詞。但しその

つゞき方は諸説あつて決定を見ない。代匠記は「空に見

つと同じ。雅澄は「虚御津なり。みは美稱にて眞津とい

はむが如し。守部「そより滿つ山跡國。」

【あをによし】 奈良の枕詞。「よし」は玉藻よし、あさ裳よ

しなどの「よし」と同じ助詞。奈良からは昔よい青土を出したからであらうといふ。

【奈良山】 昔の平城の都の北に、東西に連つてゐる山で、東は今の佐保山から、西は西大寺邊の北までを廣く奈良山といつたらしい。そして當時の奈良山は大極殿の北にあたる、今の歌姫越であらうといはれる。しかし當時まだ平城京があつたわけではないから、必ずしも大極殿の位置に左右されずに、今少し東の方、即ち磐之媛皇后の陵のあたりから行つたのではなからうか。

【いかさまに思ほしめせか】 「めせか」は「めせばか」の意。この句は下の「天の下知らしめしけむ」にかゝる。

【天さかる】 ひなの枕詞。冠辭考に「こは都がたよりひなの國をのぞめば天とともに遠ざけて見ゆるよしにて、天放るとは冠らせたり」といひ、古義には「高光、天傳、天照などいへるたぐひに、天に離る日といふ意に、此の一言にいひにけんのみ」と云つてゐる。

【鄙にはあれど】 近江遷都以前は田舎であつたけれどもの意。

【いははしの】 近江の枕詞。石橋（イハバシ）は今のとび石である。冠辭考に「いははしのあはひといふを、あはうみのあはにひかけしなるべし」と云つてゐる。

萬葉卷七に「青みづらよさみの原に人あはぬかも、石走淡海縣の物語りせむ」

【さなみの】 昔の志賀の總名。志賀・比良などその邊の地名に冠らせる。

【天の下】 山田孝雄の説に、「この語の源は蓋し天下といふ漢語を譯せしものなるべきか」とある。

【すめらぎの】 代々の天皇を申す事もあり、今の天皇を申す事もある。こゝは天智天皇を申し上げる。

【神のみこと】 みことは命の意。天皇を尊んで申し上げる言葉。天皇は現人神でますからかくいふのである。

【春草の茂く生ひたる】 共に「大宮處」にかゝる句。「霧れる」は霞む義。

【もゝしきの】 大宮の枕詞。數多くの石をたゝんで築いた大宮といふ事。

「もゝしきの。大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝにつどへる」

玉釋畝傍の山の檜原の地に宮居をお定めになつた神武天皇の御代からこの方、あとから〜とお生れ遊ばした代代の天皇方が、皆つき〜に大和の地に都して、天の下をお治めになつてゐましたのに、それであるのに、その大和の地をさしおかれて、奈良山を越え、どういふお思召であつたのであるか、それまでは田舎であつた近江のさなみの大津の宮に天の下をお治めになることとなりました。その天智天皇の大宮はこゝであつたと聞きますが、その大殿はこゝであつたといひますけれども、今はもうその宮殿のおもかげもとどめず、徒に春の草のみ茂つて、春の霞があたりを立ちこめてゐる、この大宮のあところを見ると、誠に物がなしい心になります。

技巧

遠く神武天皇の檜原に宮居を定められたところから歌ひ出して來るといふところに、人麿のものの考へ方の特色

がある。莊重であり、悠遠である。荒都を痛む感動が一層深くなつて來る。

「大宮はこゝと聞けども、大殿はこゝといへども」といひ、そして、「春草の茂く生ひたる、霞立つ春日の霧れる」と實景を直寫してゐるところ、仲々いゝ。特に疊句をなしてゐる處注意。枕詞の使用が非常に多いところなど、素朴な調子の中に、感情のあふれるところがよく描き出されてゐる。

【辛崎】 カラサキ。或は唐崎ともかく。今も唐崎といふ、所謂近江八景の一で、松のあるところ。

【さきくあれど】 「さきく」は、日本紀に「無恙」又は「平安」の文字をよんでゐるのでも知られるやうに「恙がなく平安にある」といふこと。この「さきく」は「カラサキ」のサキの音が重つてゐて調子がよい。卷十三に「さなみのしかのからさき幸くあれば……」

【大宮人】 皇居に奉仕する貴人。大宮人の船とは大宮人が乗つて遊ぶ船である。辛崎は船を着けるのによいところである。

【まぢかねつ】「かね」は「難」の意ある下二段の動詞。大官人の船を待つても、その目的を達することが出来ないの意。

一首の意は、さゞなみの滋賀の幸崎は昔のまゝに變らずにあるけれども、かつてこゝで舟乗りをして遊んだ大官人の舟を待ちうけることは出来なくなつてしまつた。すべては古の夢物語となつてしまつた。

【おほわだ】水の入り込んで入江になつた處をさしたもので、地名に輪田・和田などあるのもその形象から名づけられたものである。(代匠記・考・略解)

山田孝雄は拾穂抄の説によつて、大海の義とした。【淀むとも】淀めども。

【逢はめやも】「や」は反語。「も」は感動の助辭。

一首の意は、さゞなみの滋賀の入江は、人待ちがほに淀んでゐるけれど、昔こゝに遊んだことのある大官人に再び相逢ふことが出来るであらうか、出来ないといふ意。

【山部赤人】ヤマベノアカヒト。

山部宿禰赤人の傳記は、人麿と同様、歴史には見えない。

たゞ萬葉にあるだけである。誕生地についても伊豫、上總などの説があるが、やはり人麿の場合と同じく、大和と見るべきであらう。赤人の作で年代が一番古いのは、神龜元年十月の作である。そして天平八年のものが最も新しい。赤人は奈良朝のはじめの人で、身分は五位に達せず、官位は低く、宮廷詩人として用ひられてゐたのであらう。東國にも旅し、四國へも渡つてゐる。特に短歌に秀で、長歌も短いものである。いろ／＼の點に於いて、人麿と對立的の人である。自然詩人としては、わが國最初の人といふべきであらう。感情のきめが細かく、歌風は清澄である。

山部宿禰赤人望不盡山歌一首並短歌

天地之、分時從、神左備而、高貴寸、駿河有、布士能高嶺乎、天原、振放見者、度日之、陰毛隱比、照月乃、光毛不見、白雲母、伊去波伐加利、時自久曾、雪者落家留、語告、言繼將往、不盡能高嶺者。

反歌

田兒之浦從、打出而見者、眞白衣、不盡能高嶺爾、雪

者零家留。

【天地のわかれし時ゆ】「ゆ」はよりの意。天地開闢以來と云ふこと。

【神さびて】「さび」と云ふ言葉は、それらしい振舞をすることの接尾語。例へば「おとこさびする」をとめさびする。こゝでは神々しくの意。

難波戸を漕ぎいでてみれば可美佐夫流いこまたかねにくもぞたなびく(卷二十)

【天の原ふりさけ見れば】こゝはアマノハラニのニを略したもので、普通とは違ふ。普通ならばアマノハラヲのヲを略したことになる(新考)高天原まで遙々に仰ぎ見放るのである。

【渡る日】大空を經度る日といふ意。

【かげもかくろひ】「かげ」は日の光。「かくろひ」の「ひ」はかくろふの意で、作用の繼續をあらはす助動詞とみる。きる(霧)がきらふ。

うつる がうつろふ。

は、ひ、ふ、への四段に活用する。

【云行きはばかり】「云」は接頭語。山の威におされて雲も行き憚るの意。

み吉野の高城の山に白雲は行憚りてたなびけり見ゆ(卷三)

【時じく】「時じ」といふ形容詞の連用形で、書紀垂仁天皇の卷に「非時香菓」をトキジクノカグノコノミと訓み、萬葉でも「非時」「不時」などをトキジクと訓んでゐるので、其の意が察せられる。時ならぬこと、時のきまりのないこと。

【語り繼ぎ言繼ぎ行かむ】槻落葉に「後の世までもまだ見ぬ人にかたりつぎ、しらぬ人にもいひつぎゆかむ山ぞといへる也」とある。

天地開闢この方、神々しく高く貴い姿をしてゐる、駿河にある富士の高嶺を、高天の原まで遙に仰ぎ見ると、空ゆく日の光も山にかくれ、照る月の光も見えない。白雲も山を憚つて行きかねて居り、頂には時ならず雪が降つてゐる。この富士の高嶺はまだ見ぬ人にも後の世の人に

も云ひつぎ語りついでゆかう。

【田子の浦】 駿河國富士川口附近の海岸。

【田子の浦ゆ打出て見れば】 この「ゆ」に就いては諸説ある。契沖、「題ニ望ト云シハ田兒浦ヨリナリ。」とある。

「より」の意と解するのであらう。

眞淵の考「打出て田兒の浦より見ればと心得べし。」

同 宇比麻奈備「さつた山の東の倉澤てふところに來れば富士は見放らる。此邊みな田兒の浦なり。……かくて過にし磯もこも、同じ田兒の浦ながら、かの山陰を打出て望みし故に、田兒の浦從打出てみればといへるなり。」

荒木田久老の楓落葉「この從は、常いふ、よりといふ言には違ひて、軽く爾の手爾波に似たり。」

加藤千蔭の略解「田兒のうらより東へうち出て見ればといふ意にかくはよめり。」

鹿持雅澄の古義「……田兒の浦より海の沖の方へ船漕出て、不盡山を見ればといふ意なり。」

井上通泰の新考「久老の説に従ふべし。」

佐佐木信綱「久老と同説。」

今はこの久老説が有力なやうである。しかしまた、たゞ

「に」だけでも少し物足りない。なにかのかけから、打ち開いたところから、田子の浦へ出たとすべきか。

一首の意は、田子の浦に、打出てみると、眞つ白く富士の高嶺に雪が降つてゐることだといふこと。

島木赤彦、(萬葉集の鑑賞と其批評 二五〇頁)

「赤人の有名な富士山長歌の反歌である。田子の浦から(ゆはよりの意)汀づたひに出て見れば、富士の高嶺に眞白く雪が降つてゐるといふのであつて、何等の奇なき所が、この歌の大柄にして富士の大きな姿を現し得てゐる所以である。之について、賀茂眞淵は『大方の人一節を思ひ得て本末を續くるぞ常なると、古へ人は直に言ひ連ねしぞ多き。そが中に赤人は殊に節あるは未だしく心低き事と思ひけん、斯くうち見るさまを其のまゝに言ひつゞけたるなり。』と評してゐるのは甚だ意を得てゐる。平凡の如く見える所が、天地自然の心に合してゐる所であつて、この平凡は、平俗を意

味する世上の平凡とは違ふ。誦すれば誦するほど長河の海を朝する如き勢と力とを感じる。『田子の浦ゆ。うち出でて見れば』と強く係つてゐる勢を受くるに『眞白にぞ』と起して、そのぞが第五句『降りける』に入つて初めて止どまつてゐる勢を思ふべきである。』
尙此の歌に考ふべきことは、新古今集(即ち百人一首)にある形との比較である
たこの浦にうち出て見れば白たへ、のふじのたかねに雪はふりつゝ、

萬葉集のそれとのリズムの比較である。生徒に比較考察させてみたい。やがて、短歌に於ける萬葉集的なものと、新古今集的なものとの比較となるのである。

【山上憶良】 ヤマノウヘノオクラ。

正しくは「山上臣憶良」。大寶元年正月遣唐少録となつて、翌二年六月に渡唐した。歸朝の時日は明かではないが、その時の遣唐使粟田真人と共に慶雲元年七月に歸朝したものかと思はれる。その後、伯耆守となつたり、東宮の侍講となつたりしたが、神龜の年の終りから天平の

はじめ頃にかけて、大伴旅人が太宰帥であつた時、筑前守として任地にあつた。憶良の作で年代の最も新しいのは、天平五年の左の作である。
士そのこやも空しかるべき萬代に語りつゞべき名は立てずして
年代の最も古いのは、唐土にあるときの作である。
いざ子ども早くやまとへ大伴のみ津の濱松待ち戀ひぬらむ

【金口】 コンク。如來の身體の色は黄金色であるといふのでいふ。即ち如來の口舌。釋迦の説教。

【羅睺羅】 ラゴラ。或は羅怛羅ともかく。釋迦の子で十大弟子の一人。胎内にあること六年、釋迦成道の夜に生れたといふことである。十五歳で出家し、舍利佛に就いて沙彌となり、十大弟子中密行第一の稱があつた。母は耶輸多羅。

【等しく衆生を思ふ】 頭註にある通り、最勝王經の句によつたやうである。(契沖、代匠記の説)

【愛は子に過ぎたるは無し】 之も最勝王經の言葉。「愛無過

子、誰不愛子乎。最勝王經は奈良時代によく誦まれた經文とみえて、書紀などにもよく出て来る名である。

【うりはめば】 瓜を食べると。

【こども思ほゆ】 子どももおもほゆ。子供のことが自然におもはれる。

【栗はめば】 栗を食べると。

【ましてしぬばゆ】 一層思ひ出される。

【いづくより】 何處より。「子といふものは、いかなる宿世の因縁にて、何くより生れ來りしものぞとなり」(古義)

【まなかひに】 眼間に。「まなかひは眼之間にて常に目前に在る如く思ふ意か」(略解)「眼之交なり、眼の間といはむがごとし」(古義)

【もとなかりて】 「もとな」の語は萬葉集中たくさん見えてゐるが、古來種々に譯されてきた。山田孝雄の「母等奈考」(雜誌、奈良文化第十二號)に諸例を擧げて論じた。據るべき論である。即ちいふ。

「もと」といふ名詞と形容詞「なし」の語幹「な」との合成語なるべく考へらるゝなり。「もと」は漢字にていはば、根元又は根據の義にあたるものなりと思ふ。而して、その「もとな」は「理

由なく「根據なく」などの精神によりて「わけもなく」「よしなく」「みだりに」などその場合によつて適する語をあてて解すべきものなり」

と。「甲斐なきことが徒にせられるなげき」で、單に「いたづらに」「よしなく」と譯してよい場合が多く、或は「わけもなく」で通ずる。こゝではまづ「いたづらに」の意とすべきか。

【やすいしなさぬ】 安寐しなさぬ。「し」は強める辭。「な」は「ねま」のつゞまつたもの。安く眠ることをせぬの意。

瓜をたべると、京においてきた子等のことが自然とおもはれる。栗をたべるとまして慕はれる。一體子といふものはどんな因縁でどこから此の世に生れてきたものであらうか。子供のことがいたづらに眼前にちらついて安らかにねむることも出来ないことだ。

【金も玉も】 萬葉讀みの普通としてはクガネと訓む。卷十八、賀陸奥國出金詔書歌に、「久我禰」とあるのを據りどころとする。和名抄に和名古賀禰とあるが、これは後の轉か。

【なにせむに】 何せむに。何故にといふこと。

一首の意は金銀珠玉は、この上もないよい寶ではあるが、そのよい寶も子には及ばないから、何故に寶を惜しむのであるかといふ事。

これに就いて佐佐木信綱の解を掲げておかう。

「……序詞には釋迦の言をひいて、至極の大聖すらなほ子を愛する心あるを、まして世間の蒼生何人か子を愛せざらむやと記してゐる。歌の意は極めて明瞭で、さらでだに忘れがたいのを、瓜をたべると、この瓜をたべさせたらば、どのやうに喜ぶであらうかと思ひ出され、まして栗をたべると、平常から栗を好む子どもが思ひ出される。そも如何なる宿世の因縁で親となり子となつて、かくは此の世に生れ出たのであるぞ。かうして離れてをると、その面影がたえず眼の前にちらついて、夜の目もねられぬことよの意。まなかひは眼の交にて、めまへにといふ程のこと。「もとな」は心もとなしと同じ詞。萬葉考に、都にとどめたる子を筑前の國にて思ふなりとあるごとくである。

……此の長歌は、家庭の主人として温い情の詩人であることを示してゐる。

代匠記に、陶淵明の詩に、通子重九齡、但覺梨與栗とあるを引いてをる。さる古詩から指示を得た句と見るよりも、子どもが瓜や栗を好む實際の情から生れた句と解するが自然であらう。

反歌について

「金銀珠玉の上なき寶とても何にしようぞ。子にまさる寶はないとの意。同じ作者の長歌の中に「世の人の貴みねがふ、七種の寶も我は、何せむに、わが中の生れいでたる、白玉の吾子古日は」云々とあると同意である。」

この歌は前の長歌の反歌で、古來親の子に對する愛情を歌つた作としては、最も有名な、代表的なものである。(萬葉集選釋 一七七頁)

【大伴家持】 オホトモノヤカモチ。

詳しくは大伴宿禰家持。旅人の子である。父の旅人が太宰帥であつたときには、叔母の坂上郎女などと共に太宰府に居つた。天平三年、父旅人の薨じた時は十四歳であつた。天平十年内舎人となり、十七年正六位から從五位下を授けられ、十八年に越中守となり、任地に赴き、天平勝寶三年、少納言で歸京。天平寶字二年には因幡守となつた。後、信部大輔、薩摩守、相模守、伊勢守などを經て、天應元年春宮大夫となり、延暦二年には中納言となり、四年八月二十八日歿。家持と萬葉とは非常に關係

が深い。歌風は一般に繊細、優麗で、所謂萬葉末期の徴を示してゐる。

【喻族歌】 ヤカラヲサトスウタ。

本歌は萬葉卷二十【四四六七】で、その左註には左の如くある。

右縁淡海真人三船讒言、出雲守大伴古慈悲宿禰、解任、是以家持作此歌。

これは續日本紀には、左の如くなつてゐる。

勝寶八年五月出雲國守從四位上大伴宿禰古慈悲内豎淡海真人三船、坐誹謗朝廷、無人臣之禮、禁於左右衛士府、丙寅詔並放免。

これによると、三船も古慈悲も共に罪有て、衛士府に禁ぜられたのであるが、萬葉の左註とはちがつてゐる。どちらが正しいのかよくわからない。

喻族歌

比左加多能、安麻能刀比良伎、多可知保乃、多氣爾阿毛理之、須賣侶伎能、可未能御代欲利、波自由美乎、多爾藝利母多之、麻可胡也乎、多波左美蘇倍且、於保

久米能、麻須良多祁乎乎、佐吉爾多且、由伎登利於保世、山河乎、伊波禰左久美且、布美等保利、久爾麻藝之都

都、知波夜布流、神乎許等牟氣、麻都呂倍奴、比等乎母夜波之、波吉伎欲米、都可倍麻都里且、安吉豆之萬、

夜萬登能久爾乃、可之婆良能、宇禰備乃宮爾、美也婆之良、布刀之利多且且、安米能之多、之良志賣之祁流、

須賣呂伎能、安麻能日繼等、都藝且久流、伎美能御代御代、加久佐波奴、安加吉許己呂乎、須賣良弊爾、伎

波米都久之且、都加倍久流、於夜能都可佐等、許等太且且、佐豆氣多麻弊流、宇美乃古能、伊也都藝都岐爾、

美流比等乃、可多里都藝且且、伎久比等能、可我見爾世武乎、安多良之伎、吉用伎曾乃名曾、於煩呂加爾、

己許呂於母比且、牟奈許等母、於夜乃名多都系、大伴乃、宇治等名爾於敵流、麻須良乎能等母、

反歌

都流藝多知、伊與餘刀具倍之、伊爾之敵由、佐夜氣久於比且、伎爾之曾乃名曾

本課には省略してあるが、この外に左の反歌が一首あ

る。

之奇志麻乃、夜末等能久爾爾、安伎良氣伎、名爾於布等毛能乎、己許呂都乃米與

(敷島の大和の國にあきらけき名に負ふ伴の緒心つとめよ)

【ひさかたの】 天の枕詞。「久堅」といふ文字の如く、天は久しく堅く永劫變りなき意といふ説、日さす方の義とする説、天の形は匏形であるとする説などがあるが、未だ定説はない。雨、月、雲などにもつゞける。

【天の門開き】 天から現れて来ることを、かく敘したのである。日本書紀の一書に「高皇産靈の尊、眞床の覆衾に、天津彦國光彦火の瓊々杵の尊を裹みて、天の磐戸を引き開き、天の八重雲を排し分けて降り奉りき。」とある。合せ考へるといふ。

【高千穂の岳に天降りし】 古事記、上卷に「故爾に天津日子番能邇々藝命、天之石位を離れ、天之八重多那雲を押し分けて、伊都能知和岐知和岐且、天浮橋に宇岐士摩理蘇理多々斯且、筑紫日向の高千穂の久士布流多氣に天降

り坐しき。……」とある。日本書紀にも「筑紫日向高千穂くしふる峯」日向くしひ高千穂之峯」などある。

【天降る】は「アマオル」の約言で、天から降下すること。

【皇祖】 瓊々杵の尊をいふ。

【櫛弓を】 古事記上卷には左の如くある。「天の忍日の命、天津久米の命二人、天の石鞆を取り負ひ、頭椎の太刀を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の眞鹿兒矢を手挟み、御前に立ちて仕へ奉りき。」とある。この天忍日の命はすなはち大伴氏の先祖である。櫛弓とは、櫛の木で作つた弓のこと。古事記の天若日子の物語の條には「天之波々矢」ともある。名は異つても同一のもの。櫛は或は梶とも書く。

【眞鹿兒矢】 「眞」は接頭語。「鹿兒」は只鹿のこと。(猪など

の例) 即ち鹿を射る弓矢の義で、狩獵に用ひる弓矢。

【大久米の】 大伴氏の祖先は、大久米を率ゐて奉仕したといふのである。

【鞆】 ユキ。獸革で作つた矢を入れて負ふ器。

【岩根さくみて】 岩根は「垣根」の根などと同様、たゞ岩といふこと。「さくみ」は踏み裂き砕くこと。

【國覓きしつゝ】 國を求めつゝ。よき國土をさがし歩くこと。

【ちはやぶる】 こゝでは、枕詞ではなくて、強暴といふこと。萬葉卷二、人麿の長歌に「ちはやぶる人をやはせと、まつろはぬ國ををさめと……」とある。

【神をことむけ】 「ことむけ」は服従せしめること。古事記には「言趣」「言向」とある。記傳によると、「言は(假字)事にて、事依事避などの事と同じ。牟氣は牟加世にて背ける者を、此方へ令し向意の言なり。平の字を書きて牟氣とのみも云へり、此方へ向は即ち歸服なり。」

【まつろはぬ】 原文にマツロ倍又とあるので、「マツロヘヌ」とよむ説もある。それに就いて新考には左の如くいつてゐる。

マツロ倍ヌの倍は常にはへとよめば(此歌の上にもタバサミツ倍テとあり)こゝもマツロヘヌとよみてマツロフはいにしへ下二段にも活きしなりとせむか。又は波などの誤とせむか。又はもとのまゝにてへとよまむか。記傳卷十九(一一七七頁)に

「この倍は必波とあるべき處なるをもとより如此よみ誤れるか。又後に寫誤れるか」といひ、字音辨證(下一頁)『よみ誤れるにもあらず後の寫誤にもあらざるなり。倍をハと呼は漢原音ハイの省略也』といへり。卷十七に「ヤドカルケフシカナシクオモ倍ユとあればこゝもとのまゝにてマツロハヌとよむべし」(四一六七)

【やはし】 和げる。

【掃き淨め】 妖物を拂つて、清淨にする意で、掃除するやうにいつてある。

【秋津洲】 アキツシマ。大和の枕詞。

【檜原の畝傍の宮】 神武天皇の宮室。

【太知り立てて】 フトシルはヒロシクと同じく豊に占める事。

【天の日繼と】 天の日嗣としての意。御代々々の天皇を申す。

【隠さはぬ】 かくすところのない明い心。赤心。誠忠の心。

【皇方に】 天皇の御あたりへ。皇室の方向に。

【祖の司と】 司はツカサ。祖先の職務として。大伴氏の武

人として世襲して來た職をいふ。

【言立てて】 言に立てて聲明してといふ意。卷十八、賀陸奥國出金詔書歌に「おほきみのへにこそ死なめ、かへりみはせじとことだてて……大伴と佐伯の氏は、人のおやのたつることだて……」とある。

【授け給へる】 天皇よりお授けになつた意であるが、文章上に多少の不審はある。連體形ではあるが次の句には積かない。授け給へることなるをの意であらう。

【生みの子の】 子孫のこと。

【語りつきでて】 古義に「語次而なり。次第々々に語り繼での意なり。次第を、都藝氏々と用かしのいふは、掟を於伎氏々といふに同格なり。つれづれ草にも、高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木にのぼせて梢をきらせしに云々とある、このおきてて、掟而にて同格なり。」とある。新考には「巨氏は巨婆の誤ならむ。カタリツギテバは語り繼ギタラバにてカタリツギテバ鏡ニセムと照應したるなり。」とある。

【あたらしき】 惜きといふことである。

【おほろかに】 おろそかに、なほざりに。

【心思ひて】 「心に思ひて」の「に」が省略せられてゐる。

【虚言】 ムナゴト。虚言にも意。實の無い言も、かりそめの言にも。

【祖の名断つな】 祖先以來の名を断絶するな。家名を落すな。の意。

【大伴の……】 我が大伴の一族の人々よの意。名に負へるは「名に負ひ持てる」の意。此の長歌に就いて、新考は左の如くいつてゐる。

「初の二十三句をツカヘマツリテにて東ね、次の十六句をツカヘタルにて東ね、さてツカヘタルオヤノツカサトとついでたり。さればツカヘタルまで四十一句の主格はオヤ即ち先祖なり。就中ツカヘマツリテまでは天孫瓊々杵尊に仕へ奉りし忍日ノ命と神武天皇に仕へ奉りし道臣命との事をいひ、アキツシマ以下は道臣命以後の祖先の事をいへるなり」(四一六四頁)

口譯

天の戸を開いて、高千穂の嶽に天降つた、皇祖の御代から、櫛弓を手に取り持ち、眞鹿兒矢を手挟み添へて、大久米の勇士を先に立て、靱を背負はせ、山河を岩踏み破

つて通行し、よい國を求めつゝ、亂暴な神を征討し、服従しない人をも平げ、掃き淨めお仕へ申し上げて、大和の國の橿原の畝傍の宮に、宮殿を立派に立てて、天下を御統治遊ばした、皇祖の、御世嗣として繼いで来る天皇の御代々々に、隠す所の無い真心を、皇室に極め盡してお仕へ申して来る、祖先以來の職務であると、特に言葉に立ててお授け下さつたのを、子孫の、いよく次々に、見る人が語り繼いで、聞く人の手本にしようものを。惜むべき清きその名であるぞ。おろそかに心に思つて、かりそめにも祖先の佳名を斷絶させるな。大伴の氏と名に負つてゐる男兒の人々よ。

【劍太刀】 枕詞で「磨ぐ」といふ事をいふため、卷十三に「劍太刀磨ぎし心を天雲に念散し……」とある。

【さやけく】 清け。明らけく。

一首の意は、劍太刀を磨ぐごとくいよく磨ぐべきである。古代から清く名に負つてきた、その大伴といふ名であるぞ。

【志貴皇子】 シキノミコ。天智天皇の第七皇子。御誕生の

年月は不明であるが、齊明天皇の御代の頃かと思はれる。光仁天皇の御父である。靈龜二年薨。

【石ばしる……】 この歌は題詞に「志貴皇子よろこ 御歌一首」とある。これは何かおよろこびの事があつて、お詠みになつたものと思はれる。

【石ばしる】 垂水の枕詞。石の上を水が走り流れる意。

【垂水】 タルミ。仙覺は「タルミトイヘルハ、タルミツ也」といつて、垂れる水即ち瀧としたが、契沖は「津の國豊島郡にあり」とし、爾來、地名説が専ら行はれてゐるのであるが、これは仙覺のやうに、瀧とすべきであらう。

(澤鴻氏、萬葉集新釋二八八)

【上】 垂水のほとりの意。

一首の意は、石の上を激して流れる瀧のほとりの蕨が萌え出る春になつたことだといふ事。

島木赤彦は次のやうに述べてゐる。

「水の涌き垂るゝほとりに早蕨の萌え出づるほどの春になつた。といふのであつて、垣々たる現れに自ら春の心が泌み出でゐて、如何にも快く心持の徹つた歌である。垂水の上の早蕨は、一見何の奇なくして、實にいゝ所を見てゐるのであつて、恐らく、

作者の空想でなく、實際そのほとりに立つて寫生したのであらう。その寫生が斯の如く單純にいつてゐるのは、感應の心が純粹に動いたからであらう。第一句より第五句まで連続して、層層を成しつゝ一筋に徹つてゐる句法が、その純粹な感應と相通じてゐるといふ觀がある。この歌、倭に萬葉集中の秀逸である。(萬葉集の鑑賞と其批評一七四頁)

【輕皇子】 カルノミコ。草壁皇子の皇子。後に文武天皇と申し上げる。聖武天皇の御父君。皇子でいらせられた時のこと。

【安騎野】 アキノヌ。大和國宇陀郡。延喜式に阿紀神社がある。その邊をいふのであらう。今は吾城野。

これは長歌に添へた反歌の中の一つである。今その反歌四首をあけておかう。いはゆる連作をなしてゐる。

阿騎の野に宿る旅人うち靡き寐もぬらめやも古おもふに。

眞草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ來し。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ。

日並しの皇子の命の馬なめて御獵たゝしし時は來向ふ。

【かぎろひ】 水蒸氣のちら／＼するのをいふ、朝東方に日が昇らうとして明るくなつた野の末に、陽炎の動くのが見えるのである。

【かへりみすれば】 西の方を願ればの意。

一首の意は、東方の野には、陽炎の立つのが見えて、願みて西方を見ると、月が傾いて山に入らうとしてゐる。

島木赤彦は次のやうに言つてゐる、

「草の枕から首をあげて見れば、東方の空に微白が動いてゐる、あたりは猶月の明りである。願みて西方を望めば、大月將に落ちんとして猶空の一方に懸つてゐる。境が俤で意が遙かである。之を貫くに音調の高朗を以てしてゐるから、天地清澄にして枕頭霜の結ぶあるかをさへ思はしめるに足りる。第一句より三句まで押して行つた勢を「見えて」と切り、更に第四句を起して第五句「月傾きぬ」の二五音を以て結んでゐる手法、句勢、甚だ「弓月が嶽」の歌に似てゐて、これはそれに比して稍や下風に立つの感あるは、弓月が嶽の歌がよく渾然一如の域に入つて居るに對し、これは上下句間に猶分岐の痕があり、それを聯ねんとした「願みすれば」の力も猶及び難きの觀ある所にある。これは材料が多過ぎ、境地が大き過ぎて、流石の人磨もやゝ持

て餘したといふ所もあらうが、一面よりいへば人麿の雄偉高邁な性格が自己の長所に誇り入り過ぎようとしてゐる一端を窺ふことが出来るともいへる。……(六一〇二—一〇三)

燕村の俳句。

菜の花や月は東に日は西に。

【有間皇子】 アリマノミコ。

有間皇子は孝徳天皇の皇子。母は左大臣阿倍倉梯麿の女小足媛。齊明天皇四年十月、天皇紀の湯(湯崎温泉)に行幸せられた時、蘇我赤兄の言に動かされて謀反を企てられた。事あらはれて十一月九日捕へられ、紀伊に送られ、十一日に失はれた。時に御年十九。海草郡内海町藤白の町はづれ、藤白峠の下に椿の地藏といふのが、皇子の御墓と傳へられてゐる。

【筥】 ケ。食を盛る器。

【草枕】 旅の枕詞。昔は草を結んで枕としたからいふ。

一首の意は、家にゐたならば筥に盛つてたべる飯を、旅にあるので椎の葉に盛つてたべることだ。痛ましい御心情がよくあらはれてゐる。悲しいの何のといふ主観的用語は用ひてゐないが、おのづからにして、人の心を深く

打つものがある。誠にすぐれた歌といふべきである。皇子の此の時の歌はもう一つある。

磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらばまたかへりみむ。

【高市黒人】 タケチノクロヒト。傳は未詳。人麿とは同時代の人。旅行の歌に秀れたのが残つてゐる。

【舟はてすらむ】 「舟乗る」に對する言葉で「舟を泊めること」。

【安禮の崎】 未詳。但し黒人の旅の歌、大體東國であるので、或は、東國をさすのであらう。美濃國の「荒崎」をこれにあてるのは不穩當。

【漕ぎたみ行きし】 漕ぎ廻つてゆく。

【棚無し小舟】 「棚」はふなだなの事。和名抄に「和名不奈太那。大船ノ旁ノ板也。」とある。棚のない小舟即ち一枚棚の舟のことをいふ。

一首の意は、どこであの舟は泊るのであらうか。安禮の崎を漕ぎ廻つて行つたあの棚無し小舟は、といふのである。旅中に於ける所見であらう。高市黒人の他の作をあ

げよう。

旅にしているものこひしきに山下の赤のそは船おきにこぐ見ゆ。

【本郷】 本國をいふ。

【いざ子とも】 従者を親んでよびかけた言葉。

【はやく日本へ】 日本へ早く行かうの意。

【大伴の御津】 難波の御津のこと、大伴は此の邊の總名。ささなみが滋賀の總名であると同様。

【濱松】 ハママツといつて、その中に自ら家の者を思ひやつたと見るべきであらう。

一首の意は、いざ人々よ、早く日本へ歸らう。難波の御津の濱松も自分達の歸りを待ちかねてゐる事であらうといふ事。憶良の作としては、最も古いことは前述の通り。【をのこやも……】 卷六にある。山上憶良が重病の床に横はりつゝ感慨に堪へないで詠んだもの。苟しくも堂々たる男子が、後世萬代に言ひ傳へ語り繼ぐべき立派な名も立てないで、空しくなつてよいものであらうか。いや／＼そのやうな俯甲斐ないことではならな

いとの意。

「をのこやも」の「や」も」は共に感動詞で、意味を強めたものである。

【ぬばたまの……】 卷六にある長歌の反歌で、赤人が吉野へ行つた時の詠である。恐らく神龜のはじめと思はれるもの。

【ぬばたまの】 夜の枕詞。ぬばたまは射扇ひるよぎ(又、烏扇からすよぎともいふ)の實。その色が黒いので、黒、暗、夜などの枕詞に用ひられた。

【楸】 ヒサギ。和名抄に、唐韻云、楸木名也。漢語抄云、比佐木。貝原篤信云、「楸樹は山林村落處々にあり、ひさきとも、又かしはとも云、其葉は桐葉に似、又梓にも似たり。苗及葉の莖、葉の筋赤し、故に赤目柏アカメカシと云、葉の末三處尖角あり。梓實は豇豆の如く長き莢あり、楸の實は長き莢なし。」

楸を「木さゝげ」といふ説は誤。一首の意は、夜が更けてゆくまゝに、久木の生えてゐる清い河原に千鳥が度々鳴くことである、といふ意。

島木赤彦いふ。

「……………一讀して一首の意明瞭である。第一句より三句まで押して行く勢が既に異常であつて、一種澄み入つた世界へ誘ひ入れられる心地がある。それを第三句より第五句まで連続した句法で受けて、最後に「千鳥しば鳴く」といふ引き緊つた音で結んでゐる。暢達の姿があつて軽い滑りにならない。一首各音の持つ響が度ましく緊つてゐることが、更に一首の感じに大きな影響を與へてゐる。

【大伴旅人】 オホトモノタビト。大納言大伴安麻呂の第一子。懷風藻に記された年齢によると、天智四年の誕生である。公卿補任によると、その時伯父の御行は二十歳であつたから父の若い時の子であつた事が察せられる。和銅三年正月の條に、右將軍正五位上大伴宿禰旅人とあるのが歴史に見えるはじめである。後、中務卿・中納言等を経て、太宰帥となつた。神龜三四年の頃、彼が六十二・三歳の頃と思はれる。天平二年十月、大納言に任ぜられ、其の年十二月上京。天平三年七月二十五日大納言從二位大伴宿禰旅人薨と續日本紀に出てゐる。年六十七。

【暮春の月】 いつであるか、はつきりしないが卷三の歌の順序から「中納言」とあるところから、恐らく旅人が太宰帥になる前、即ち神龜三年頃ではあるまいか。勅は、聖武天皇の事。此の歌はその時の長歌に添へた反歌である。

みよしぬの吉野の宮は山からし貴かるらし河からし清かるらし天地と長く久しく、萬代にかはらすあらむ行幸の宮。

【芳野離宮】 芳野離宮址は今の吉野郡中莊村大字宮瀧の地。近頃別の説をたてて同郡大瀧となすものもあるが、信ずることが出来ない。持統天皇は特にこの地に度々行幸せられた。

【象の小川】 キサ。頭註にある通り、芳野離宮址の對岸、象山から出て、吉野川にそゞぐ小川。その邊を今も喜佐谷といふ。

一首の意は、昔見たことのあるこの象の小川に来て、今また見るに、むかしよりもいよ／＼まさつて、さやかになつたことであることよといふ事。

旅人は筑紫へ行つてからも、かういふ作をよんでゐる。

吾が命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため

【布勢の水海】 フセのウミ。越中國氷見郡氷見町にある十二町潟はそのあとであるといふ。舊時はもつと廣かつたものは思はれる。今日の地形から押しても十分うなづかれる。

多祇灣の址は、今の田子村のこと、此は卷十九の歌。

【藤浪】 藤の花の靡くさまが、さながら浪のやうなので、藤浪といふ。

【しづく】 沈むと同じ。

一首の意は、藤の花の影をなしてゐる湖水の底が、あまり清いので、沈んでゐる石をも、玉と見ることであるといふ事。

【興に依りて詠める歌】 卷十九にある作で、所は越中、時は天平勝寶五年二月二十三日のことである。この前後にある作、家持としては傑作のものである。

二十三日依り興作二首

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕影に驚なくも。

わがやどの……………

二十五日作歌一首

うら／＼に照れる春日に雲雀あがり情悲しも一人し念へば

【いさゝ群竹】 小群竹。「いさゝ」は、聊の意。

【音のかそけき】 音のかすかなこと。

一首の意は、わが庭前の、いさゝかの竹群を、吹く風の音のかすかなこの夕であることよといふ事。

しづかな境涯のあらはれた歌である。一體に家持は、人鷹・赤人などに比べると、歌人としては、小さく且つ見劣りがするのであるが、此の邊の歌になると、優に一家の風格を備へてゐるといふべきである。

【天平五年遣唐使云々】 續紀によると、天平四年八月、以從四位上多治比真人廣成爲遣唐大使。從五位下中臣朝臣名代爲副使、判官四人録事四人云々。同五年三月節刀を授く。四月遣唐四船難波津より發する由がある。此の人のうちの母の歌であらう。卷九（一七九〇）の歌。

秋萩を 妻どふ鹿こそ 一つ子に 子持たりといへ
鹿兒じもの 吾が獨子の 草枕 旅にし行けば 竹珠
を繁に貫き垂り 齋戸に 木綿とり垂して 齋ひつゝ
吾が思ふ吾子 眞幸くありこそ

【霜降らば】 略解に「舟出は夏ながら、霜をよめるは、遠き海山のおぼつかなさと思ひて、末をかけてよめる也。」といつてゐる。

【はぐくめ】 羽を以て包めよといふこと。

【天の鶴群】 鶴は天を飛び交ふものであるから、天のと冠したのである。天から降り来つてといふ程の意を寓してゐる。

一首の意は、旅人の野宿をしようとする野に霜が降つたならば、羽を以て我が子を包んで下さい。天飛ぶ鶴の群よ。

獨り子を遠き旅にやる、母親の心中をよくうたひあげてゐる。

【防人】 サキモリ。防人は兵士に徴されて邊を守る者といふ。天智天皇の三年に、對馬の島、壹岐の島、筑紫の國

等に、防人と烽を置くところがあるのが、文獻に見えた初めてある。これらの兵士は、諸國から徴されるのであるが、いつの頃よりか、東國の人を徴してこれにあてることになつた。その後、天平寶字元年に、東國の人をあててことをやめて、九州の人を以てこれに代へた。

防人の年限は三年であるが、毎年順次に一部分を交替せしめた。

【丈部造人麿】 傳記は未詳。

【磯にふり】 古義には「磯に船の觸り當るよしなり」とし萬葉集選擇には「枕詞」としてある。

【うのぼら】 「海原」の東語。

【わたる】 渡る。後悔する。

一首の意は、天皇の御命令のかしこさに、なつかしい父母を故郷に残しておいて、大海原を渡つてゆくことかなの意。

【今奉部與會布】 下野の國の防人である。火長(十人の長)である。

【かへりみなくて】 後を顧ること無くして。

【醜の御楯】 シコのミタテ。「醜の」は自卑の稱。役にも立たない下等なといふ程の意で、罵詈して用ひるのが普通であるが、こゝでは自分の上に用ひてゐる。醜の醜草、醜ぼとゞぎす、醜屋、醜の醜手などの用例がある。「御楯」は楯となるべきもの即ち兵士をいふ。

一首の意は、今日からは顧みることなく、天皇陛下の、つまらないまもりとして、私はいでたします。防人としての、忠誠のこゝろがあらはれ深く出てゐる。

【節度使】 セツドシ。古昔、一方面の所部を都督し、軍旅の事のある地には旌節を賜ひて征討に任じた職。

【大丈夫の云々】 この歌は藤原宇合外二人の節度使を各地に遣はされる時、聖武天皇が親しく酒を賜つて、送別の意をもつて饒せられた御製で、長歌に添へられた反歌である。

一首の意は、大丈夫たるものが任ぜられて赴任するといふ、重大な節度使として出かける道であるから、尋常一様の旅と思つて行つてはならないぞ、わが信頼する丈夫たちよ。といふのである。「おろかに思ふ」とは輕視する

ことである。

【元興寺】 グワンガウジ。續日本紀、靈龜元年五月の條に、「始建元興寺于左京六條四坊云々」

同紀養老二年八月の條に「遷法興寺於新京」とある。

元亨釋書に、「元興寺者、上宮太子討守屋時、蘇我馬子又誓誓寺。故於飛鳥地創之。推古四年成。始曰法興寺。」

【白珠】 シラタマ。自分の才能を譽へてゐる。

【人に知らえず】 人に知られず。

【知らずともよし】 人は知らないでも差支ない。

【吾し知れらば】 「し」はつめよる辭。自分が知つてさへるれば。

一首の意は、白珠は人に知られずにあるが、知られないでもよい。他人が知らないでも、自分一人知つて居れば、それでよいのだ。

この歌はいはゆる旋頭歌である。五七七の句をかさねてゐる。集中に、かういふ旋頭歌は全部で六十一首ある。

挿圖の説明

元曆校本萬葉集。

元曆校本萬葉集は高松宮家と古河男爵家との兩處にわかれて存してゐる。高松宮家御藏のものは、卷一、四、六、十、十二、十九の六冊百十一丁で、古河男爵家のものは卷一、二、四、六、七、九、十、十二、十三、十四、十七、十八、十九、二十の十四冊七百八十八丁。同じ巻が兩方に別れてゐるが、之を合せても猶各巻とも多少の脱落があつて、一卷として完いものはないのである。

卷二十の終に

元曆元年六月九日以或人校了

右近權少將(花押)

とある。それで元曆校本といふ。

五 歌の調子

一 解題

島木赤彦著「歌道小見」の中から一節を採つた。但し原文中から處々省略したところがあるが、それは取扱はれてゐる歌の性質によつて、必ずしも讀本教材として上乘でないと思はれるものを除いたためである。

「歌道小見」は、そのはしがきに、

「歌道小見」は、歌に入りはじめた人にも、久しく歌の道に居る人にも、或は單に歌を鑑賞する人にも通ずるやうな歌論をなしたいと思つて稿を起したものである。久しく歌にゐるもの必ずしも歌を解せず。歌の門外にゐる人が往々巨人の眼で歌を見ることがある。歌の道は人情自然の道であつて、萬人共通の大道にあるべきである。歌の門内門外を問はず、博く教示をうけたいと希うて、この稿を起した所以である。

と記してゐる所によつて、その内容を窺知し得る。

本論「歌道小見」と、「萬葉集の系統」及び「隨見録」二附録から成る。

二 作者

大正十三年五月、東京、岩波書店發行。

島木赤彦 シマキ アカヒコ。

本名は久保田俊彦。舊姓は塚原。島木赤彦といふ名のよりどころは別でない。たゞ土屋文明の歌「みむなみの島、つばきさきたらば、おもふ子が、髪を枕に、そこにしぬべし」に感心した折につけた名であるから、或は何等かの暗示があつたかもしれないとのこと。又、赤彦の赤と赤人の赤とも別に關係はないとのこと。

生國は長野縣上諏訪町大字角間町。生れたのは明治九年十二月十六日。生後間もなく、八ヶ嶽の麓、豊平村に移つた。そこは廣漠たる、まづしい裾野であつた。その村に、十九の年まで居つた。十九の年には、長野縣尋常師範學校に入學した。入學して始めて萬葉を讀んだ。當時は書物が自由に手に入らなかつたので、萬葉を書寫した

とのこと。始めは、新體詩をやつてゐたが、子規の歌を讀んで大いに感激した。廿四歳のとき、新聞「日本」に十四首の歌を送つたが、僅かに、一首採られたのみであつた。そこで、もつと勉強せねばならぬと考へた。

師範學校を卒業したのは、二十三のときで、爾後十六年間、教育のことに従事した。最後の二年は郡視學を務めた。大正三年四月、東京に出て、「アララギ」に關係し、斯道のために盡したが大正十五年三月歿した。

歌風は子規以來の寫生道に立ち、萬葉調を唱へ、「アララギ」派の中心人物となつてゐる。

一見すると、田舎の村長といつたやうな風采がある。尤もなことで、日常は信州の高木で百姓をし、蠶を飼つてゐた。自由な田園生活のうちこそ、萬葉調の歌はよまれるのである。晩年は毎月一回、東京に出てきて、「アララギ」の會員に面會し、歌の添削をした。アグラをかき、左脚を右膝の上深くのせ、「これは大かびだ」うはづりだ（概念的といふ意味）などと評した。純粹の歌人であるから、歌境を説明することはできない。しかし、心

持と詞との關係、詞のもつ感じに對しては誠に鋭敏である。それが赤彦の生命であつて尊い體驗である。彼はその體驗を快適な詞を以つて表現した。

歌集及び著書

- 馬鈴薯の花 (中村憲吉と合著)
- 切火 (大正四年三月、東京アララギ發行所)
- 水魚 (大正九年六月、岩波書店)
- 大虛集 (大正十三年十一月、古今書院)
- 十年 (大正十四年五月、改造社)
- 柿蔭集 (大正十五年七月、岩波書店)
- 歌道小見 (大正十三年五月、岩波書店)
- 萬葉集の鑑賞及び其の批評 (大正十四年十一月、岩波書店)

三 主眼

文學は意味ではない。直接的な思想や信仰や感情や生活をそのまゝ描いても、それは文學とはならない。それらものを姿に描いてこそ、始めて文學となる。姿とは事物々が存在してゐるまゝの姿である。しかしどこまでも姿である。事物々が存在してゐるまゝの説明ではない。姿とは事物々の眞諦を形に捉へたものである。全

精神の集中統一を以て、事物々を見つめてをれば、自ら事物々の姿が見える。その姿には、自らそれを表現し得る唯一の詞がある。

表現されたものは姿である。姿は統一調和のある完全な姿であつて、生きてゐなくてはならぬ。姿とは生きてゐるまゝの姿である。説明したものは死んでくる。生きてゐるまゝの姿は盛に生動する。少しも停滞しない。少しも停滞しないで盛に生動するといふことが、リズムカルであるといふことであり、節奏的であるといふことであり、語をかへていへば、流動的の力の感じがあるといふことである。流動的な力の感じとは眞善美が一體となつて動いてゐるといふことで、結局は生きてゐるから價値があるのである。

それ故、すべての文學は姿の表現であらねばならぬ。生きたまゝの姿を捉へねばならぬ。生々したリズムは自ら伴うてくる。

短歌は殊にこのリズムを尊ぶ。弾力あり、屈折あるリズムを以て、自ら流れてゆく詞の中に、あらゆる現象を表

現して行くのである。逆にいへば、トン／＼と流動して行く現象と主観とが一體となり、融合抱合したとき、始めて「うた」が出来るのである。かく主客自然一致の境地は既に實在を超越して、絶對普遍の境地に達するものである。かくして、始めて、歌の文學が白光を放つのである。

それ故、歌の調子といふことは、單なる聽覺上の問題に止らないで、本質的價値の問題から出發する。結局「緊張の調子が緊張の主観から生れる」といふのも、この意味であつて、眞の歌境に達する作者の用意として精神の緊張を必要とするといふのである。

四 概説

第一節 歌は意味の外に重要な要素として、歌の調子といふものがあるといふこと。

第二節 作歌衝動となる感動には、いろ／＼の模様があらるが、それが一々の語の持つ感じや、三十一文字全體の氣持に表出されてゐることが大切である。そこから歌の價値の過半が生じてくる。

第三節 萬葉集の歌、及び實朝の歌を例にとり、實例の上で歌の調子の實際を述べてゐる。

第四節 扱て緊張した調子はどうして生れるかといふことの重要な、點睛的な答であると同時に、歌論に於ける次の問題の糸口となるものである。

五 取扱上の用意

この一篇、萬葉精神の本質を説明し得て痛快である。世に萬葉々々と口にするものは多いが、ほんとに萬葉を解

するものは幾人あるか。歌はむづかしい。まして萬葉の眞髓は會得し難い。會得し得ないものは、萬葉の精神を捨てて新しきものに走る。新しきものは、すべて官能のものか、さもなれば皮相なるセンチメンタリズムである。赤彦は萬葉精神の眞髓に生きてゐる。それは彼の信仰といつてもよい。赤彦は古今以下の歌を排斥する。赤彦にとつては尤なことである。しかし古今には古今の精神がある。古今には古今が生れるだけの必然がある。一般的文學研究はこの點を忘れてはならない。

島木赤彦

本名久保田俊彦

歌人

教育者

明治九年長野縣

上諏訪町生

大正十五年歿

年五十一

五 歌の調子

島木赤彦

短歌に於ける表現は、單に歌の言葉の持つ意味のみで足りりとする事は出来ません。その表現しようとする感動の調子が、歌の各の言葉の響や、それらの響をつらねた全體の節奏の上に現れて始めて歌の生命が生れるのであります。歌の言葉の響節奏、これを歌の調子若しくは聲調格調と謂ひます。(第一節)
我々の感動は、伸びくと働く場合、ゆるくと働く場合、切迫して

第一節

柿本人麿歌集
萬葉集に引用せられた歌集
滅びて傳はらな
い
弓月が嶽
奈良縣大和國磯
城郡磯向村にあ
る山
三輪山の近く

働く場合、沈潜して働く場合といふやうに、箇々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、さながらに歌の言葉の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒軽するところがないほど、短歌表現上の重要な要求になるのであります。古來の秀作は、皆歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるために、永久の生命を持つてゐるのであります。例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわた
る (萬葉集卷七)

の歌について言ひましても、山川の瀬の鳴るなべにと一氣に進んで第四句を呼び起すところに、多く生動の趣があるのであります。この「なべ」といふ濁音を含んだ第三句が第四句二箇の濁音と相俟つて山川の景情を生動させてゐる勢は、これを他の如何なる句法を以てしても言換へることの出来ないものであります。これは勿論、なべにの持つ意味より來る力もあるのであります。

響から来る力と、その響の全體の節奏に及す影響とが大きいのであります。殊に第一二句「巨爾波」の疊用を受けて、鳴るなべにと押進んでゆく勢を想ふべきであります。第四五句は、これに對して更に非常の力を以て据つてゐるのであります。金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も主として調子の上に現れてくるのであります。第五句「二五音」が主として力の中心となつて居ります。試に第五句を「雲ぞ立つなる」白雲立つもなどの三四音、四三音としたら、どうでありませう。歌の力がめちやく／＼に碎けてしまふでありませう。歌の生命が内容や材料よりは、調子にあることが分ります。この歌は、實に山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が徹底して歌の調子に現れてゐるのであります。かやうな歌によつて歌の調子を會得することは、ためになることでもあります。(第二節)

第二節

み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲かも (萬葉集卷六)

これは山部赤人の歌であります。「山のまは、山の際、木ぬれは、木の

末」こゝだは、許多の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀬の」歌によく似てゐるのみならず、み吉野の象山のまの「と巨爾波」の疊用して初句を起してゐる手法までも、よく似て居るのであります。第三句以下にいたつて、全く前者と異なる感動をあらはして居ります。これは前の人麿の歌の第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、み吉野の象山のまの木ぬれにはと呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押進めてゐるからでありまして、こゝだもさわぐ鳥の聲かもといふ四三音、三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」といふ七音、二五音の諧調と、自ら別趣の勢をなして居ります。人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つて居ります。赤人のこの歌は、赤人の沈潜した靜肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つて居ります。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は、個性の異なるがまゝ、にちがつてゐるのであります。人麿の歌は、數歩を過

天の香具山
大和三山の一
奈良縣大和國十
市郡香久山村に
ある

(萬葉集卷一)

れば騒はしくなりませう。赤人の歌は、數歩を過れば平板になりませう。これは皆兩者の歌の調子から來てゐる相違でありまして、調子の相違は兩者性格の相違から來てゐること勿論であります。猶この赤人の歌で、上句を受ける第四五句に重々しい響を持つた詞の多いといふことが、讀者の感動を異常な所へ誘つて行く力になつてゐることに注意すべきであらうと思ひます。

春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり天の香具山

持統天皇の御製として知られて居ります。第二句と第四句で切れてゐるために、調子が落着いて、初夏の心持が現れて居ります。第五句の名詞止めも、この場合よくすわつて、動かさない重みを持つて居ります。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句で定まります。第五句だけでは無論定まりませんが、少なくとも第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやうであります。これは、前に擧げた例について見ても分ります。萬葉集には、字餘りの句が多いのでありますが、それは、大抵第五句にあるやうであ

夏實の川

吉野川の上流
いま宮瀧の上手
に菜摘村がある
湯原王
天智天皇の皇孫
志貴皇子の御子
光仁天皇の皇弟

(萬葉集卷三)

ります。それも第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かけにして

湯原王の御歌であります。第一句からすらくと連続した句法を第四句で一旦踏切つてゐるために、緊りと勢とが生じ、さらに山かけにしてといふ生動の句を据ゑて、この句が一首全體に反響するほどの力になつて居ります。感嘆に値する作であります。以上の例は、皆葉集から擧げました。今一つ、源實朝の歌を擧げます。

大海の磯もとゞろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも
(金槐集)

波の鞆と寄せかへす景情に對して、割れてといひ、碎けてと重ね、裂けてと疊んで、その重疊の勢を、かもといふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本には、第三句が、よる波のとありますが、これは、必ず、よする波と一旦踏切らねば、歌の勢を成さぬので

あります。波の姿と、感動の姿と、それを現した歌の姿とが、如何によく一致して居るかを知らることが出来ませう。(第三節)

以上諸例によつて、少しく歌の調子を説きましたが、心の相が人々によつて異なるばかりでなく、一人の心も様々に動きますから、その動きの状が、如何にして歌の調子に現れるかといふことは、到底説き盡せる筈がありません。只それが如何なる心の動きであらうとも、調子の上に緊張して現れて居らねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔きものは柔きに緊張して居り、強きものは強きに緊張して居り、暢やかなるは暢やかなるに緊張して居らねばなりません。而してその緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集であります。左様な歌の調子を我々は萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主観から生れることは贅言に及びません。(第四節) (歌道小見)

第三節

第四節

語句の解釋附文法・修辭法上の吟味

【短歌】 タンカ。三十一文字の歌をいふ。長歌ナガウタに對して、

短歌ミツカウタといつてゐたのを長歌ナガウタ・短歌といふ。現在では、短歌といへば、新しいものを指し、和歌といへば、傳統的

な古い歌を指すやうである。

【表現】 ヒヤウゲン。ある氣持を形にあらはす、氣持とは主観客觀の融合した第三の世界を描くことである。外界の現象を凝視し、又は個性の内面を批判してゐるとき、ある感じが湧いてくる。(これを理念といふ)その感じを何かの手段によつて形に示す。その手段の相違が、諸藝術の形式の相違となる。いはば氣持を表現するといふことは寫眞術に於ける「定着」のやうなものである。

【感動の調子】 歌をつくる實際の手續は、外界の刺激によつて感動し、その感動を十分高めてから、表出するといふことになる。それ故、感動といふことが歌ふことの第一要素である。感動はある氣持といつてもよい。その感動の様子が調子である。

【響】 ヒビキ。一々の語にふくまれる感じである。「温泉」といへば何となくおちつきがないが、「いでゆ」といへばおちついてくる。「散歩」といへば何となくおちつきがないが、「そとろあるき」といへばおちつく。「頭痛」などといつては、てんでおちつきがない。これらは語の響きから

くる問題である。但し、響きは、「なれる」といふことか
らくるので、「汽車」などは大分、ならされてゐる。

【節奏】 セツソウ。ふし。音の流れて行く模様。「全體の節奏」とは三十一文字全體を流れる音の流動である。その流動には緊縮した力の感じがなくてはならぬ。

三十一文字は五と七とに分解される。五は更に221、又は212となる。221は1のところを休んで結局222となる。この休むことをポーズ(Pause)といふ。221はポーズが句のうづりめにあるので、なだらかななる。212は中間にポーズをおいて、句のうづりめは休まな
いから、急迫した氣持になる。七は2212、2122
又は2221となる。2212は強い。例へば、「夕暮の
空」は「夕暮の¹」と「氣にいつて、²」の¹で一寸休んで「空²」
と出るから、「空」が強くなる。「2122」は固定的で
ある。例へば、「雪の夕暮」は「雪の¹」で、早く休み、「夕
暮²」でをさまる。「2221」は流動的である。例へば
「風やむ山の¹」は「風やむ山²」までを一氣によみ來つて、
「の¹」でポーズをとり、更に次の句に前進して行かうとす

る。又三十一文字の五句には二句切れ、三句切れ、名詞止め、動詞止めなどの形式がある。二句切れ、又は第三句に枕詞を入れるものは五七調となる。例へば、

この夕べ秋かぜふきね白露に争ふ萩のあす咲かむ見む。

春すぎて夏きたるらし、白妙のころもほしたり天香具山。

三句切れは七五調となる。例へば、

大海の磯もとゞろによする波、割れて碎けて裂けてちるかも。

又第三句まで一氣にいふものも七五調である。例へば、
み吉野の象山のまの木ねれには、こゝだもさわぐ鳥の聲かも。

以上の諸條件が全體となつて、節奏の内容をなす。

【聲調】 聲のしらべといふ意味。

【格調】 字句の配列の上の調子といふ意味。

【感動】 創作衝動。感動は珍らしきもの、新しきものに起ることが多い。旅行といふ意味はこゝにある。その地の

人は何とも感じない山を、旅の人は無性によろこぶことがある。都會の人は田舎の祭禮がなつかしい。しかし又感動は日常見なれてゐるものを、もう一度新な心で見るときに起る場合もある。老母の顔をしみくと見る。おのがもつ書物の表紙をふと見るといふことがある。

【伸びく】 は外象の刺戟の方面からいひ。

【ゆるく】 は主観のはたらしの方面からいふ。

【切迫】 死別、訣別等の場合の如きもの。

【沈潜】 チンセン。沈みひそむ。個性の内面に沈み潜むこと。即ち我が非我を見ることが。一口にいへば、思ひ入る思ひ深まる意。

【軒軽】 ケンチ。軒は車の前の高さこと。軽は車の前の低きこと。二つの觀念を合せ考へて、高低・あがりさがり・優劣などの意味となる。漢書馬援傳「居前不能令二人輕、居後不能令二人軒。」本文では歌の意味——よまれた対象と、歌の形の上の要素——調子とは平等に大切であるといふ意味。

【快適に合ふ】 心持よく、びたりとあふ。感動と調子とが

びたりとあひ、少しも長短・過不足のなきこと。この語

は本來美學上の用語で個人的、主観的な條件が快感を起すことをいふ。

【柿本人麿】 前課参照。

【あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる】

詠雲

足引之、山河之瀬之、響苗爾、弓月高、雲立渡

【あしびきの】 山につく枕詞。

【山河】 ヤマガハ。「やまかは」と讀めば、山と川と二つの名詞になる。「やまがは」と讀めば、山にある河となる。こゝは後の意味である。

【なべに】 「並」の意にて、「に、つれて」「同時に」「と共に」「に、あはせて」「苗」であるから、略解は「なへ」とよんでゐる。しかし、古義は「なべ」とよんでゐる。赤彦の論は、「なべ」とよむことの上に立つてゐる。しかしこの事はなほ研究の餘地ある問題である。

【弓月が嶽】 頭註の如し。「が」は萬葉特有。「わがをれば」

の「が」も同様。

【雲立ちわたる】 山の峰にもくくくとくろくもがかゝる。終止形にいひ切りたるところに力がある。

【一首の意】

奥山の川瀬がゴ〜とすさまじく鳴るよと思ふまゝ、に向ふの弓月が嶽にはもく〜たる黒雲が盛に來去往來する。

一方にはすさまじき瀬音を聞き、他方には漠々たる黒雲を見、耳目ともに活動してゐる。そこから、緊張した調子が生れるのである。

【山川の瀬の鳴るなべに】 一氣によむから七五調。一氣によんで、下二句の副詞句となる。一氣呵成によんで、「に」

にポーズをおき、やゝ注意を集中する。そして、

【第四句を呼び起す】 のである。

【第四句二箇の濁音】 「ゆづきがたけに」づ」と「が」。

【濁音】 濁音のもつ感じが自ら山川に振動するさまを表現してゐるやうな感じがする。これは言語發生の上から證明されることで、旗は「バタ〜」とひるがへるから、

「バタ」といつてゐたのを「ハタ」といふやうになつた如く、物の音に聯關して名詞をつくることは多い。而して物の音は、その物の姿をかなりよく髣髴させるものである。副詞などには、この種のものが多い。「がたく」「ぶるく」などの如し。

【他の如何なる句法を以てしても云々】ある氣持はそれを表現する唯一の表現形式があるのみ。氣持は既に表現形式を指定してゐるといふ謂。

【勿論「なべ」の持つ意味より來る力もあるのであります】「なべ」のもつ意味「まゝに」が平行的な、自由な感じを持つてゐるためであるが、

【響から來る力】「なべ」といふ音にふくまれる感じが、偉大な効果をもつてゐる。これは歌人の敏感による。

【その響の】「の」は主格。

【全體の節奏に及す影響】「なべ」といふ音の感じが、下一句まで餘韻を残してゐる。

【巨仁波】テニハ。助詞のこと。「て」「に」「は」は主要な助詞であるから。又「を」を入れて「てにをは」ともい

ふ。

【「の」の疊用】あしびきの山川の瀬の鳴るなべに。」

これをシラブルに分けると、

「あしびきの・やまがはのせの・なるなべに、」

みな句末にポーズがあるので、流動的に次の句にうつつてゆく。たゞ、「やまがはのせの」は、「やまがはの・」のところにポーズがあるやうであるが、そこではあまり休まないで、かつ「せ」を早くよみ、「せの」の「の」で休むやうになる。

【非常の力を以つて据つてゐる】「ゆづきががけに・くもたちわたる。」これも句末にポーズがある。第五句まで、句末にポーズをもつといふことは、萬葉の特有で、新古今などにはないことである。第五句末にポーズのあるといふことは、どこまでも停滯しない、をさまりかへらぬといふことで、そこに流動的な力が出てくる。殊に「る」といふ音には、進行の狀がふくまれてゐるのである。

【金剛力】コンガウリキ。金剛力士のやうな力。金剛力士とは、寺の門にある仁王さまのことで、左を密跡金剛と

いひ。右を那羅延金剛といふ。

【概】ガイ。おもむき。

【第五句二五音】「くもたちわたる」

【三四音】「くもぞたつたる」

【四三音】「しらくもたつも」「しらくもたつも」(A)

「くもたちわたる」(B)

(A)(B)は同じ形式であるが、その調子のちがふのは、(一)「たちわたる」は接頭語「たち」がつき、「わたる」と複合して特殊の感じをもつ。

(二)「る」のもつ感じが「も」のもつ感じより強い。

(三)終止形で結んでゐること。

【寂寥感】今日感傷的な意味でもちひられてゐる「さびし」とはちがふ「さびしさ」である。山川の振動、雲のゆききを見てゐると、自ら自然現象に感動して、一つのショックを感じることである。

○【み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲かも】

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

(長歌を省く)

反歌

三吉野乃、象山際乃、木末爾波、幾許毛散和口、鳥之聲可聞

【み吉野の】野は「ぬ」とよむべし。萬葉にはみな然り。

「ひむがしのぬ」の如し。「み」は接頭語。

【こゝだもさわぐ】「さわぐ」といふ表現は、赤人に多い。

例へば、

あしびきの山にも野にも御獵人さつやたばさみ散動ぎたり見る (卷六)

沖つ浪邊静けみ漁りすと藤江の浦に船ぞ騒げる (卷六)

騒がしきものを聴く心は静かなのである。静かな心で、騒がしきものを聴くのが赤人の特色である。

【鳥の聲かも】鳥の聲そのものを掌中に入れたる氣持がする。「かも」は「かまあ」といふ意味。沈潜の氣持がある。【一首の意】

吉野山の象山の木の梢には、たくさん鳥がないてゐることかまあ。

かういつて、その場所を立ち去るといふ静けさがある。

【赤人】 前課参照。

【境地】 心のうち。こゝでは歌境の謂。

【手法】 建築・彫刻に用ひられる語。繪畫では描法。文では句法。各、融通して用ふ。

【手法までも、よ】 あしびきの山川のせの鳴るなべく似て居る】
【みよしぬの象山のまの木ぬれには

大體似てゐる。嚴密にいへばちがふ。人麿の方は、「山川の瀬の」が主語となり、「鳴るなべ」と動作してゐるが、赤人の方は屬性の展開に止つてゐる。そこに兩者の歌境の相違の一端がある。

【第四句に至つて突然山の名を提示し】 これを「切りかへ」といふ。(著者の語) 新しい材料を提示して、氣分を更へ、以て、停滯を防ぐのである。

【一首を直線的に押進めて】 「みよしぬの象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ」までが、「鳥の聲かも」にかゝる

形容詞の如くなつてゐるといふ意味である。しかし、實際は、「こゝだもさわぐ」は連體形といふよりは、むしろ終止形に近く、そこで一度ポーズをおき、注意を整頓して、「鳥の聲かも」に集中する。このポーズが力強きひびきをなすのである。

【四三音、三四音の諧調が】 こゝだもさわぐとりのこゑかも】
實は「こゝだもさわぐ・とりのこゑかも」となる。即ち「こゝだもさわぐ」は2221で流動してゆき、「とりのこゑかも」が2122でおちつくのである。

【諧調】 音楽的には、二音の振動数の比が比較的簡單であれば、二音は融合して、諧調となることをいふ。こゝでは「こゝだもさわぐとりのこゑかも」ゆづきがたけにくもたちわたる」の十四音の連続が氣持よきリズムを持つてゐることをいふ。

【人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つて居ります】 人麿は、すさまじき河瀬の音、漠々たる黒雲を見てゐる。始めから終まで活動の相を見てゐるのである。活動の相を見てゐながら、自

然現象の律動に完全に乗りうるところに、人間意識に透徹したさびがある。

【赤人のこの歌は、赤人の沈潜した靜肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つて居ります】 赤人は始めから心を靜かにし、思を深めて、さわがしい鳥の聲をきいて、「ああ」とその場所を立ち去るやうなさびがある。「かも」は沈潜するといふ氣持をもつてゐる。

【性格に徹する】 おのが個性の向き方におしつめて行く。雄渾をおしつめて行くと、一つの境地に達する。静けさをおしつめて行つても、一つの境地に達する。この二つの境地はある共通のところがある。それは何れも普遍的であるからである。おしつめて行くといふことは、本質をつかむ、本體界にはいるといふ意味である。つまり物のほんとの姿を捕へるといふことで、文學、歌、少くとも萬葉調のうたは、そこをねらつてゐるのである。そこに文學の絶對境があり、法悦があり、悟りがある。法悦、悟りは超越又は逃避でなくて、不離不即である。不離不即であるから、さびがあるのである。全精神を盡し

果てたところに、法悦といふ、歌道の究極がある。一部の感情の興味には未だ眞の價値はない。これが、ほんとの詩の心と、センチメンタリズムとの相違である。

【感動の相は、個性の異なるがまゝにちがつてゐるのであります】
感動を普遍性の方面から見れば、共通のものである。しかし、特殊性の方面から見れば、いろ／＼ちがふ。それは相がちがふのである。相とは表にきる衣であり、姿であり模様であり、色彩である。文學は根本精神を尊ぶと共に、この特殊性を尊ぶ。近松とシエクスピヤーとは、ちがふといへばちがひ、一つだといへば一つである。一の如くして、一ならぬがほんとである。

その異なる感動の相が、自ら、異なる表現形式をとつて特殊性のある歌となる。

【人麿の歌は、數歩を過れば騒がしくなりませう】 人麿は物の活動的方面を見てゐるので、もし、物を見る自我と、自我の統一がなく、見ることに於て、活動の相の奥底に透徹しないで、途中で停滯することがあるとすれば

活動の姿はたゞ、さわがしいばかりとなる。つまり現象の波に完全に乗りきつて、現象と平行し、融和することができないときは、意識と現象とが、ぐはぐはになるのである。歌に就いていへば、あの歌は、
あしびきの・山川の瀬の・鳴るなべに・弓月が嶽に・雲たちわたるの如く、すべての句末にポーズを持つてゐて、前進的の律動をもつてゐるが、假に上、三句に視覚的の描寫がはいつてくると、下二句の視覚と混乱し、焦點が分裂し、折角の律動も臺なしとなる。されど一方は聽覺であり、他方は視覺であつて、二つはよく調和し、しかも現象は、河瀬、黒雲などと、流動的なものである爲めに、この律動は完全に生きてゐる。

【赤人の歌は、數歩を過れば平板になりませう】赤人は靜かな心で騒がしいものを見てゐる。もし靜かな心に徹してゐなかつたら、騒がしいものは、うるさく、やかましくなる。けれども騒がしいものを、靜かにきゝうるほどの徹底と餘裕とが、赤人にはある。
又靜かといふことがたゞ、穩やかといふのみで、何等の

感激——心の躍動、魂の微動——がなかつたら、それはかぬむりである。歌についていへば、あの歌は

「み吉野の象山のまの木ぬれには、こゝだもさわぐ」までは宛も形容詞かの如くなつてゐる。(既に述べたところ)しかし、實際は「こゝだもさわぐ」で一度、息をかへ、注意を整頓して、「鳥の聲かも」に集中してゐるのである。又「鳥の聲かも」に統一してゐる。この集中統一がなかつたならば、助詞「の」の助けによつて、屬性を細にべて行くうたになつて、どこに焦點があるやらわからぬ、印象不鮮明なうたとなるのである。

【第四五句に重々しい響きを持つた詞が多い】「こゝだもわぐ鳥の聲かも」は實におちついて、しかも引きしまつた表現形式である。試みに國歌大觀の索引を見るに

こゝだもさわぐ
鳥の聲かも

の二つの語法は、他に一つもない。赤人獨特の句法である。

【備考一】赤人の歌は、音の表現に於て特にすぐれてゐる。

るところがあるやうである。例へば、

若の浦に潮みちくれば濁をなみ葦邊をさして鶴なきわたる。

(卷六)

鳥羽玉の夜の更けゆけば久木(秋)生ふる清き河原に千鳥しばなく。

(卷六)

「鶴なきわたる」「千鳥しばなく」は一句のうち、主語説明語を含み、しかも、なきわたると主體の運動を示し又は「しばなく」と複數的に表現されてゐることは誠によく洗煉されてゐる。

【備考二】「み吉野の」の歌について、赤彦が、別著、「萬葉集の鑑賞及び其批評」に論じてゐるところの大意をあげると。

「神龜二年聖武天皇の吉野行幸に従駕した時の長歌の反歌である。(中略)境は吉野の山中で、耳に聞えるものは木々々の鳥の聲である。一首の意至簡にして、澄み入る所が自ら天地の寂寥相に合してゐる。騒ぐというて却つて寂しく、鳥の聲が多いというて愈々寂しいのは、歌の姿がその寂しさに調子を合せ得るまでに至純である爲めである。試みに、第一句より第五句までを誦して見れば、それが如何に至簡な力の進行であるかが分る。直線であるから寂しく、寂しいけれども勢がある、けれど

も、それが人麿の如き豪宕な勢でなくて、度ましく滑ましき勢である。これは、人麿・赤人の特徴を較ぶるに根柢的な對稱をなすものである。」

【春すぎて夏きたるらし白砂のころもほしたり天の香具山】春過而、夏來良之、白妙能、衣乾有、天之香來山

【春すぎて】靜かに過ぎ行きにし春を思ひ出してゐる。靜かにといふ感じは第二句に關聯してのことである。「春すぎて夏來たるらし」といへで自然の道行きである。随つて「春すぎて」が221と分れ、1の「て」にて、ゆつくり休むことができる。もし「春すぎていくかもあらねど」などといへば、「春すぎて」がをどつてくる。

【夏きたるらし】夏がきたらしい。「たる」は「たり」の連體形である。「たり」は完了の意味をあらはすが、連體形に「たる」とした爲めに、その感じにひたつてゐる氣持がする。「らし」は軽い推量で、「らしい」といふほどの意である。軽い推量といふことは判斷を強制しないといふことであつて、それだけ主觀に餘裕があり、粘着性がある。又強制しないといふのは自ら感じられるといふ氣持がある。

【白妙の】 シロタヘノ。枕詞。衣・袂・紐・帯、又は雲・雪等の白きものにかゝる。白妙は白栲(シ)で、栲の布が色が白いからいふ。

【衣ほしたり】 「ほしたり」の「たり」は完了形で、眼前に衣の乾してあるのを直視してゐるのである。

【天の香具山】 天高く聳ゆる香具山といふ意。香具山は香來山・香山(高山)ともかく。香山を「かぐ山」とよむことは、相模を「さがみ」とよむが如し。香の字音は(カミ)であつて。鼻にかゝるが、「ぐ」となつたのである。香山は大和國高市郡にあつて、三山相聞傳説の内の一つである。三山相聞傳説は播磨風土記に出てゐるが、萬葉には、

中大兄三山歌一首

かぐ山はうねびををしと、みまなしとあひあらそひき、かみよよりかくなるべし、いにしへもしかなれこそ、うつせみもつまをあらそふらしき。

三山とは香山・畝火山・耳梨山である。畝火山は女性の山で、男性の山、香山・耳梨山がこれを獲んとして競争し

たといふのである。中大兄はこの傳説を聞き、更にその當時の戀愛合戦を合せ考へてお歌ひになつたのである。「一首の意」あわたしい春もすぎて夏が來たやうだ天の香具山にはころもをほしてゐる。

この歌は天の香具山に衣をほしてゐるのを見て、自ら、夏のきたのをしり、春のすぎ去つたのを感じたのであるが、その感じきたつた道行を正に逆にあともどりをし、春すぎて……天の香山と、もとのさやにをさまつてゐる。その間に配列をかへる、論理的にまとめるといふところが無い。もとのさやにそのまゝをさまるといふので、靜かにおちついたところがあり、無理がなくて、實感が出てゐる。

【持統天皇】 天智天皇の第二女、野菟讚良皇女、天武天皇の皇后。内助の功が多い。天武天皇崩御の後、朝に臨みて制を稱し、後即位させられた。都を飛鳥より藤原(香山・畝火山の間)に遷された。後、位を天武天皇に譲り給ふ。大寶二年崩御。年五十八。

【第二句と第四句で切れてゐる】 読み方できると、

春すぎて夏きたるらし
白砂のころもほしたり
天の香具山

の如く、五七、五七、七となる。即ち五七調である。萬葉集中にも、かゝる完全な五七調の短歌は少ない。

【調子が落ち着く】 シラブルに分けると、

春(1)すぎ(2)て・夏(1)きた(2)る・ら(1)し・
白(2)妙(1)の・こ(1)ろ(2)も・ほ(1)し(2)たり・

の如くなる。「春すぎて」は早くよみて「夏きたるらし」にかゝる。「夏きたるらし」は「夏きたる」まで早くよみ、「る」にほんの一寸休み、「らし」をつめる。「白妙の」は又早くよみて、「ころもほしたり」にかゝる。「ころもほしたり」は2122でおちつく。即ち五七の各がまとまつた音調をもち、「夏きたるらし」はポーズが句の終にあつて、次の句につながらうとし、「ころもほしたり」はポーズが句の上部にあつておちついてゐる。

表現形式の上でいへば、先述の如く、心發生的に感じた過程を正にひつくりかへしてゐるからである。

【初夏の心持が現れて居る】 春はリズムが外に向ふ。夏は再びリズムが歸つてくる。秋はリズムが心内に入り、冬は籠る。夏は外から歸つてきたリズムと主観とが、表面に交錯してゐるので、初夏の感動、若葉のさゝやきが、きこえる。その気持はどつちかといへば、きれくである。それが五七、五七、七の調にあらはれてゐるといふ謂。

【第五句の名詞止めも、この場合よくすわつて】 第四句までの五七、五七が切れくとなつて、ポーズが非常に多いので、注意はいつも内在的である。そこで「天の香具山」とうたひ出し、大きく山の名を提示したので、よく据つてゐる。大體、名詞止めといふことは近世の和歌に流行したことである。ある物の名を提示して、その物の觀念の周圍に、ある氣分を引きおこすといふ。稍、沈潜的な表現方法である。この名詞止めに必要なことは、句切れをなして、注意を整頓させることである。さもなくば物の觀念の周圍にある氣分を引き起すことができな

春くればなほ色まさる山城のときはの森のあをやぎのいと。

(金槐集 春)

【歌の命は、大抵第五句で定まる】 第五句は結びであるからこゝでしまり、をさめなければならぬ。

【第五句の字餘り】 例へば、

さなみの滋賀のおほわた淀むとも昔の人にまたあはめやも。

新しき年のはじめに思ふどち、いむれて居ればうれしくもあるか。

近江の湖夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬに、いにしへおほほゆ。

【吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして】

湯原王芳野作歌一首

吉野爾有、夏實之河乃、川余杼爾、鴨會鳴成、山影爾之氏

【夏實の川】 ナツミのカハ。吉野川の上流。大瀧と秋津との間にあつて、山の際を落ちるので、淀瀬が多い。

【夏實の川の川淀に】 之を「反覆」といふ。音韻上の効果をもつてゐる。

一首の意。吉野山のなつみ川その川よどに鴨が鳴いて

ゐるぞ山かげのところに。

【第一句からすらくと連続した句】 シラブルに分けると、みよしぬの・なつみのかはの・かはよどに。

の如く、221・2221・2221・221となり、各句末にポーズがあつて、前進的である。

【緊りと勢とが生ず】 第三句まで前進してきたのを「……ぞ……」に結んでゐる爲めである。「……ぞ……」はかく、勢よく前進しておいて、結ぶところに效用がある。「鳴くなる」の「る」に強い感じのあることは前述の如し。

【生動の句】 「山かげにして」は、「山かげのところに」と譯しうる。鴨がないてゐる場所の指示を川よどのみにすませて、早く「鴨のなく」といふところを表現したかつたのである。ところが川よどは、又、山かげであつたので、そのことをいひたしたのである。それが「して」といふ中止的の語法をとつてゐるので生動してゐる。もし、二つの場所を一時に表現しようとして、「みよしぬのやまかげながるなつみ川、その川よどに鴨ぞなくなる」などといへば平板になる。「山かげにして」と別にとり出した

ところが強くひびく。

【源實朝】 頼朝の第二子。母は政子。(時政の女) 建久三年八月七日生れた。幼名を千幡といひ、頼朝の寵愛をうく。建仁三年九月、比企能員の亂に、將軍頼家及其の子一幡が失脚したので、實朝が將軍となる。時に年十二。承久元年正月二十七日、鶴ヶ岡八幡宮に、右大臣拜賀の式を行つた。前日から大雪が降つてゐた。この日も夜に入つて雪が降り、二尺ばかりも積つた。拜賀式は晩方から行はれ、夜陰に及んだ。式が果てて、實朝は衣冠束帯に威儀を正して、お宮の階段をおりてくると、甥の公暁が、例の大銀杏のかけからあらはれ來つて、實朝を襲つた。一の太刀は笏(シヤク)にてうけたが、二の太刀にあへなき最後を遂げた。時に年二十八。公暁は、義時の指喉によつたといふ説があるが怪しい。實朝の事蹟に就いては、

吾妻鏡

鎌倉時代史(三浦周行)

を見よ。

實朝は歌が上手であつた。その歌は當時定家を中心とし

てゐる新古今派とは全然ちがつて、萬葉の古精神を汲んでゐる。實朝は定家の教をうけたが、それでなほ、萬葉

調の歌を詠んだといふことが面白い現象である。歌集を「金槐集」といふ。歌の数七二七。そのうち純粹に萬葉調として有名なのは少い。それは實朝が萬葉を見たのは二十二のときであつて、そのまへに既に多くの歌を詠んでゐたといふ事實による。(實朝は十四にして歌をつくり始めた。)しかし、實朝の歌は、どの歌でも、萬葉調である。物の見方、その態度、表現方法が萬葉的である。たゞ語法を新古今、又は古今に假りたままでである。實朝があの時代に出たといふことは時代的に意味がある。即ちあの時代は、自我、統一、新生といふ氣分の盛なときである。その爲めに物に面接する、物の本質につきこむといふ氣持が動いてくる。これが萬葉の精神と合致する。實朝の歌については、

子規全集第五卷、又は竹里歌話

金槐集私鈔(齋藤茂吉)等が参考すべき書である。

尚坪内逍遙作の「名残りの星月夜」は實朝の精神を悲

劇的に解釋したものである。

【大海の磯もとどろに寄する波割れて砕けて裂けて、散るかも】

詞書には

「あら磯に浪のよるを見てよめる」とある。

【大海の】「の」は磯にかゝる所有格を示すものでなくて、

「大海」がといふやうに主格を示す。

【磯もとどろに】 荒磯を振動させて。とどろは音の形容。

「一首の意」自ら明である。これは實感のうたである。

恐らくは實朝が二所（箱根権現・伊豆権現）に参詣した

とき、伊豆山の上から、荒れる相模灣を見てうたつたも

のであらう。

【鞋踏】 ダウタフ。また鞋踏ともかく。波濤や瀑布などの

大きく鳴る音。宋の蘇東坡の石鐘山記に「竅坎鞋踏者魏

獻子之歌鐘也」

【割れてといひ砕けてと重ね裂けてと疊んで】 はあまりく

どいといふ説もあるが、これは音韻上の効果を考へねば

ならぬ。又荒浪が荒磯を嘯むすさまじさは、動詞を一つ

や二つ位用ひては表現し切らぬ。助詞「て」に結ばる四つの動詞は如何にも撓陶性があるやうである。それが

「重疊の勢」である。

【ちるかも】「かも」には沈潛の氣持があるといふことは、

「鳥の聲かも」のところでのべた。なほ、「かも」には、現

象を意識の内にとりこみ、対象を克服するといふ氣持が

ある。即ち、それは「かも」の「も」が閉口音である爲

めであつて、それが「かも」と「かな」とのちがひであ

る。閉口音は内に藏するといふ氣持があるのである。

【一本には第三句が「よる波の」とある】 一本といふの

は、群書類従本のことであり、著者のよつてゐるのは、

貞享本である。「よる波の」といへば「よる」は自動詞

である。それは、「大海の」の「の」を所有格に見たから

である。

【よる波】「大海の」の「の」を主格的にとると、「よす

る」と他動詞に用ゐねばならぬ。この方が正しい。

【一旦踏切らねば歌の勢を成さぬ】 上三句は波の提示であ

り、又それだけで主語となつてゐる。下二句は四つの動

詞を連ねた述語である。そんな大げさな、雄大な述語に

照應する爲めには、「よする波」と一旦きり、注意をまと

める必要もあり、又「よする波」といつた方が、どさりと

よく据る。それを、「よる波の」などといつては上下不

釣合となり、勝ちすぎた下二句がをどる。

【波の姿と感動の姿とそれを現した歌の姿とが】 この三つ

はこの歌に於ける三つの要素である。波はゴー／＼とお

しよせ、物すさまじく、物すごく岸を嘯む。その荒波を

見てゐる實朝は、その自然現象の波動に平行し、融和

し、諧調して、波のおしよせ、くだけるまゝに感動して

ゐる。表現は「とどろによする」といひ、「われてくだけ

てさけてちる」と波の運動のまゝに反覆捻轉して表現し

てゐる。三つは三拍子そろつてゐる。

かく、自然現象と主観とがよく融和するところにほんとの

歌境のあることを、齋藤茂吉は、

「謂ゆる敘景歌は天然現象が作歌衝動に働きかけるので

あるが、天然現象の空間的展開並に時間的流動と吾人の

内的節奏が相共鳴し、相抱化融合する時、茲に詩は生れ

むとするのである。換言すれば、天然無爲が吾等内心の

シンボルたる時、茲に詩は生るのである。（短歌私鈔）

といつてゐる。實際この歌は象徴歌といふべきである。

【参考】 この歌は萬葉模倣のうたである。本歌は、

伊勢の海の磯もとどろによする波かききこき人にこひわたる

かも。

きしり物と思へばわが胸はわれてくだけてとこゝろもな

し。

萬葉模倣といつても實朝の價值には少しのかはりもない。

【緊張】 緊張といふことが歌の調子に大切な要素となる。

緊張とは、はりきつてゐるといふことであり、停滞して

ゐないといふことである。それは精神が集中統一してよ

く緊張してをれば、物の見方が緊張してき、その感動が

緊張したものになり、それが自ら表現にあらはれる。結

局は精神の問題になり、一生懸命に見つめてゐるといふ

ことが大切になる。寫生といふことは忠實にすなほに見

るといふことであるが、それはやがて凝視といふことに

なる。凝視には自我の統一がある。統一した精神は統一

した自然現象を見、統一した表現を伴ひ來るのである。

【緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集である】 著者の萬葉観は緊張といふことになる。

【左様な歌の調子を我々は萬葉調と唱へる】 アララギ派の萬葉はこれである。「かも」をつかつただけでは萬葉調にならぬ。「かも」はつかはなくとも萬葉調になる。

【主観】 こゝでは「精神」といふほどの意味にとればわかり易い。

【贅言に及びません】 くどくといはなくつたてわかつてゐるの意。

六 土佐日記鈔

一 解題

土佐日記

一卷。紀貫之の作。貫之が土佐守に任ぜられて國に下つたのは、延長八年であつて、在府六年の後、承平五年歸洛した日記はその年十二月二十日國府を出立し、翌年二月十六日京の故宅に歸る間の紀行である。當時の男子は専ら漢文を用ひ、假名は女文字と稱して女流の使用するところであつたから、貫之がこの假名文の日記を書くにあつて、

「男もすなる日記といふものを、女もして見むとするなり。」と冒頭して、作者を女に假託したのである。

香川景樹は、「貫之の古今集を撰んだ時は既に四十五六歳であつて、この日記を書いた時は七十三四歳頃であらう」と推定してゐる。日記の文章について藤岡作太郎博士の所説を引用しよう。「古今集序(貫之作)と土佐

日記とを並べ見よ。序は文に抑揚頓挫あり、秩序整然、名將が三軍を率ゐて行進するが如くなれども、華美に過ぎ語句の雕琢を主として、情熱に闕くるところあるが如し。これを措いて日記に向へば、鰻鱺の厚味に厭いて奈良茶の淡泊に舌うつが如く、しかもいふべからざる興趣のその中に存するを見る。これすなはち中古の綺語麗句を重ねて無意義の文を飾る弊に懲りて、近世の士が日記を敷衍する所以なり。しかれども理路の整頓を喜び行文の莊嚴を尙ぶ勅撰集の序と、一時の興に乗じて情熱の動くに任ずる日記の文とを同じ尺度を以て測らんとするは、測る者の過にあらずや。彼は珠玉を碎き金銀を切りて彩華炫耀たる三尊來迎の畫幅にして、此は一抹の墨痕に雲煙の影を留むる墨繪の卷物なり。彼は花の宴に錦を張りたる幕の陰より舞ひ出でたる蘭陵王にして、此は曉暗く袂冷やかなる馬道に蟲の音にまがふ朗詠なり。……(中略)

土佐日記の文、簡勁なりと賞美せらるれども、これを伊勢物語などに比するに、またその敵にあらず……(略)

(國文學全史、平安朝篇に據る)

参考書

- 土佐日記抄 北村季吟著
- 土佐日記註 加藤宇萬伎著
- 土佐日記考證 岸本由豆流著
- 土佐日記燈 富士谷御杖著
- 土佐日記創見 香川景樹著
- 土佐日記假言解 佐々木弘綱著

二 作者

紀貫之 キノツラユキ

藏人、望行の子である。延喜年間、御書所預をつとめた。

凡河内躬恆(オホシガウチ ミツネ)壬生忠岑(ミブタミミネ)等と勅を奉じて古今集を撰し、之が序(假名文の序)を作つた。これが即ち勅撰集のはじめである。

而して古今集中に收められた貫之の作は大約百首の多きに及んでゐる。

延長年中、大監物右京亮に任じ、土佐守となつた。承平年中任滿ちて歸り、紀行土佐日記を著した。

土佐日記に先つて、勅を奉じて新撰和歌集を撰したといふ。

天慶年中、玄蕃頭となり、從五位下に進み、木工權頭にうつり、從四位下に陞つた。天慶九年歿。

家集及び萬葉集鈔の著作がある。又書に巧であつた。

三 主眼

國文學史上日記文學の先驅と稱され、又紀行文文學の源泉と云はれて居る土佐日記をあげて平安朝文學の一面をうかがはしめる目的を有する。前課は隨筆としての代表をあげたがさういふ才氣ある筆致と比して、流水の如き而も素朴典雅なる本篇の特色がはつきりするであらう。

四 概説

文章として段節は附することが出来ないから、左の三節につきその梗概をのべらる。

(1) 出立ち。土佐守の任地より出發して來る折のことを記述してある。別れ難く人々が送つて來て、にぎやかに酔うたりした。その中でも人情のうつろひも見えてさびしかつた。

(2) 海の上。大湊より那波へ志して船を出す。猶こゝ迄慕ひ來し人々といよく別れはてしてしまふ。別離の情堪へられぬものがある。海上に日暮れて心細くあはれな心持に浸る。翌日時化のため船を出さず二十日の月を眺め耽りつゝ古人仲鷹の事などを偲ぶ。

(3) 都入り。月明桂川を渡つて故郷にかへり着く。荒れ果てたる家の様、月の光にあらはに、亡き女子のこと等そとろに身に沁むことが多い。

五 取擧上の用意

土佐日記は日記とはいひながら、平安朝の他の日記と類

を異にして居るところは、紀行である點である。伊勢物語・和泉式部日記等、和歌が先づあつて出來た日記文學と先づ相異なる點であり、紫式部日記の如く身邊の日常を寫實したものと相違する點である。そしてその紀行たるや、漢文でかゝれた旅行記とはちがつて、單なる記録ではなく、備忘録でもなく、詩情ゆたかな、和歌の句としてもいゝやうな、しらべをもつた句々にみだされて居るのである。淡如として水の流るゝ如きあはれさの中に、現實味を失はず、そこに他の平安朝の物語の一面と相通するものがあると同時に、紀行文として更科日記や海道記等の先驅となつて居る趣がある。素朴性といふ事に於て前課で言つたと同様、國文の源泉の相を究明しうるのであつて、文學史的教材として特に注意すべきものである。冒頭「男もすといふ日記を」云々の如き、さやうな意で特に注目していゝのであらう。

紀貫之
平安朝の歌人

六 土佐日記鈔

紀貫之

古今集の撰者
天慶九年(二六〇)
卒
年六十五
その年
朱雀天皇の承平
四年(二五四)
解由
在任中の會計に
相違ないことの
證明書
住む館
國守の館
土佐の國府は長
岡郡にあつた

出立ち

(1) 男もすといふ日記といふものを女もして見むとてするなり。その年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。その由いさゝか物に書きつく。
或人縣の四年五年果てて例の事ども皆しをへて、解由⁽²⁾など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき處へわたる。これかれ知る知らぬ送りす。年頃よく具しつる人々なむ別れ難く思ひて、しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。
二十二日、和泉國まで平らかにと願ひ立つ。藤原言實⁽³⁾船路なれど、うまのはなむけす。上中下酔ひすぎでいとあやしく、潮海のほとりにてあされあへり。
二十三日、八木康教といふ人あり。この人國に必ずしもゐてつかふものにもあらず。これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の常として今はとて見えざるを、心あるものは恥ぢずなむ來ける。これは物によりてほむるにしもあらず。

(1) 文學史の材料として注意すべき句である。

(2) 簡潔であつてたくみである。

(3) 咄々として素樸な趣をそなへて居る。

九日
朱雀天皇の承平
五年正月九日
大湊
高知縣長岡郡に
あつた
那波
高知縣安藝郡奈
半利川の川口

二十四日、講師馬のはなむけしに出でませり。ありとある上下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ。

海の上

九日のつとめて、大湊より那波⁽¹⁾のとまりを追はむとて漕出でけり。これかれたがひに國のさかひのうちはとて、見送に來る人あまたが中に、藤原言實、橋季、衡長、谷部行政等なむ、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追ひくる。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。⁽²⁾これより今は漕ぎはなれてゆく。これを見送らむとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕ぎゆくまに、海のほとりに留れる人も遠くなりぬ、船の人も見えすなりぬ。岸にも言ふことあるべし、舟にも思ふことあれど、かひなし。かゝれば、此の歌どもをひとりごとにしてやみぬ。

おもひやる心は海をわたれども
ふみしなれば知らずやあるらむ

(1) 何となく古雅な筆づかひである。

(2) 短歌の一句ともなりさうな所を注意すべきである。

(3) 對句のやうな行文で淡彩心をひかれる流麗さである。

字多
高知縣香美郡岸
本村宇田

かくて字多の松原をゆき過ぐ。其の松の數、いくそばく、幾千年経たりと知らず。もごとくに浪うちよせ枝ごとに鶴ぞとびかふ。⁽¹⁾
おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめるうた、

見わたせば松のうれごとすむつるは

千代のどちとぞおもふべらなる

とや。此の歌は處を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ、漕ぎゆくまに、山も海も皆暮れ夜ふけて西東も見えずして、天氣の事機取の心に任せつ。男も習はぬはいとも心細し。まして女は船ぞこに頭をつきあてて、音のみぞ泣く。かく思へば、舟子機取は船歌うたひて、何とも思へらず。

二十日、昨日の様なれば船出さず。皆人々憂へ歎く。苦しう心許なければ、只、日の經ぬる數を、けふはいくか、二十日、三十日と數ふれば、およびも損はれぬべし。⁽³⁾いとわびし。夜はいもねず。二十日の月出でにけり。山のはもなく、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見て、昔、安倍の仲麿といひける人は、唐土に渡りて歸り

安倍の仲麿

聖德二年(二五六)
唐に留學し後唐
朝に仕へ實德二
年(二四三)彼の地
に歿した
年七十一

(1)どこか漢詩の影響のあるやうな句でよくこなれてゐる。

(2)海はやはり時化になつて居たのであらう。さうした心細さがみえる。

(3)このみじかく句を切つた所など古體であらう。

(4)月のゆらめき出づるを思はしめる句調である。

男文字
漢字

來ける時に、舟に乗るべき處にて、かの國の人、馬のはなむけし、わかれを惜みて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。⁽¹⁾その月は海よりぞ出でける。それを見て、仲麿のぬし、我が國にはかゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今は上中下の人も、かやうにわかれ惜み、喜もあり、悲みもある時には詠む。とて、よめりける歌、

あをうなばらふりさけ見れば春日なる

みかさのやまに出でし月かも

とぞよめりける。かの國の人、聞きしるまじうおぼえけれど、ことの心を、男文字に、さまを書きいだして、こゝの言葉傳へたる人に言ひ知らせければ、心をや聽き得たりけむ、いと思の外になむ愛でける。唐土とこの國とは言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

都にて山のはに見し月なれど

波より出でて波にこそいれ

(1)かういふ短い句に味深いものがある。

都入り

十六日 承平五年二月
 山崎 今の京都府山城
 國乙訓郡大山崎
 村
 島坂 同郡向日町の西
 の長岡の上にあ
 る
 桂川 大堰川の下流
 末は淀川に入る
 飛鳥川 世の中は何か常
 なる飛鳥川昨日
 の淵ぞ今日は瀬
 になる(古今集
 讀人不知)

十六日、今日の夕つ方京へのぼる序に見れば山崎の店なる小櫃の繪も糺餅の法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬ。とぞいふなる。かくて京へ行くに島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは歸る時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月の明きにぞわたる。人々のいはく、この川飛鳥川にあらねば淵瀬さらに變らざりけり。といひて、ある人のよめる歌、

ひさかたの月に生ひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる、

天雲のはるかなりつるかづら川

そでをひでても渡りぬるかな

又或人よめる、

(1) 遠旅より舊地に入る
 情趣湧くが如し。

(2) 濃い味ひがある。平
 安朝文學の一派泉で
 ある。

かつら川わが心にも通はねど

おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて、處々も見えず。京に入立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。さるは、便ごとにも物も絶えず得させたり。今宵かゝる事と、聲高にももの言はせず、いとほしく見ゆれど、志はせむとす。さて池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちに、猶悲みに堪へずして、密かに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に

(1) 情あふれて言葉の足
 りない趣である。

(2) 素朴な古人の世間心
 をみる。

(3) 素朴な歌である。た
 い少しよわいやう
 だ。萬葉集の大伴旅
 人が妻を亡くして故
 郷の家にかへりつい
 た歌と比較してみ
 とよくわかる。

小松のあるを見るが悲しさとぞいへる。あかすやあらむまたかくなむ
見し人を松のちとせに見ましかば
遠くかなしきわかれせましや
忘れがたくくちをしき事多かれど、えつくさず。とまれかうまれ、
とくやりてむ。(土佐日記)

語句の解釋附文法修辭法上の吟味

(出立ち)

【男もすといふ日記云々】「す」は「する」である。當時の男子の日記はすべて漢文體であつた。

【女】これは作者が自分を女に假託して書いたのである。

【その年】某年。實際は朱雀天皇の承平四年である。

【戌の時】イヌのトキ。今の午後八時から九時の間。

【或人】貫之のこと。

【縣】アガタ。昔、地方官が、その任國をさしていつた語。

【解由】ゲユ。解由狀といふ。王朝時代に、内外官の任期が満ちて、事務引繼の際、新任の人から前任の人に、引渡しの滞りなかつた由を記して渡す文書。

【年頃よく具しつる入】この數年來いつも側近くつれてゐた人。

【うまのはなむけ】(馬の鼻向けの義。もと旅立つ人に酒肴などをすゝめ、その馬の口を取つて行くべき方へ馬の鼻を向けてやつたことから起つた語である。)

【上中・下】カミ・ナカ・シモ。國司からはじめて下人まで、すべての人をいふ。

【あさる】古語。とりみだして騒ぐこと。

萬葉集に「たちあさり我が乞ひのめど。」

【この人云々】この人は何時もきまつて國司の館においてつかつたものではないのだが、ちやんと法にかなつた正式の餞別をして。

【守がらにやあらむ云々】土佐日記考證(岸本由豆流著)に、「こは紀氏みづから謙退のことばなり。そは國司のあしき故にやあらん、今任限はてて京にのぼる時は、なべての人は薄情なれば、今はとてうまのはなむけにも見えざるを、心ある人は、さる薄情なる事を恥ぢて、とぶらひ來たるよとの意なり。」

【講師】カウジ。昔、諸國の國分寺に居て、佛教の講説をした僧官。

伊勢集に「せきう法師、和泉の講師になりて流されし時に」

【酔ひしれる】「しる」は愚になること、ぼけること。

酔つて常態を失ふこと。

【知らぬものしが】「し」は意味を強めた助詞である。

【足を十文字に踏む】千鳥足に亂れた足どりで歎び騒いだことをいふ。

海上

【つとめて】早朝。

【那波】ナハ。和名抄に「土佐國安藝郡奈半」とある。これをいふのであらう。今は名半利村・田野村・北川村等となつてゐる。名半利川の河口である。

【とまりを追はむと】「追ふ」は、其方に向つてゆくといふ意味がある。この日記の中にも他の個所に「十一日曉に船を出して室津を追ふ」とある。

【御館】貫之の居た土佐の國府の館である。敬稱を用ひたのは、例の女の作としたことから起つたことであつて、別に不思議はない。

【船の人も見えすなりぬ】これは岸に残る人の目に、船中の人の姿が見えなくなつたことをいふ。香川景樹の土佐日記創見に

「さて漕ぎゆくまに、海づらに立ちとまりては見送る

人も遠くなりぬ。さこそこの船の中の人も見えすなりぬべし。さは岸にもきはめて言ひたき事あるべし。船にも思ふことあれども、いひやらん方なければ、そのかひなしといふ。『見えすなりぬべし。』といふべきを『なりぬ』といへり。こはいかに書きたりとも船と岸との事まがふべきことなければ、理の上にかゝはらず、口調に任せてたゞ浮ぶ景色を專にせるなり。……かくも調をいたはりて理を顧みぬは古の常なり。』

【思やる心は】 創見に、

「文だにあれば、いかに隔てし人の心も知らるゝものなれど、今わが思ひやる心の使は、たゞ海路を渡り行くばかりにて、その書なければ、かばかり甚だしき思も、さきにはえ知らざらんといふなり」

【宇多の松原】 土佐日記地理考に、

「宇陀の松原は香美郡岸本村にありて西、赤岡村に互りたり。……地理辨（安政二年鹿持雅澄著・土佐日記地理辨）に『赤岡の北、鬼田村あり。鬼田はうたとしるし、今の菟田村より南、須留田・王子・赤岡・岸木などの村々なべて

廣くうさいだと呼ぶことになれるなるべし』といへり。……列松は天正年間に伐採したるも、なほ一老松の残りたるありて尾池春水その緑芽を採り、筆の軸を製し、千歳管と稱し、日野資短卿に呈したりとぞ。……今岸本村の宇田町はその名残りとぞ。」

【見渡せば云々】

「うれ」は「うら」である。梢をいふ。

「どち」は友の意。「べら」は「可き」の意である。この時代の訛言の一種であらう。

一首の意は、「見渡せば宇多の松原の松の梢には鶴が住んでゐるが、鶴の心では松を千歳の友と思つてゐるのであらう。」

富士谷御杖の土佐日記燈に「松鶴の間を羨みてわが親しき友とあかず別れゆくをなげきたる心あり……」としてゐるのは、少し穿ちすぎたものといふべきである。

【處を見るにえまさらず】 その處の勝れた風景に比較して歌の出来ばえの方が劣つてゐる意。自らの歌を謙遜したものである。源氏物語の歌に於ける紫式部の態度と同一

法である。

【天氣の事機取の心に任せつ】 天氣のよしあしによつて、船を進めもし止めもすることであるが、それは心を使つてもいたし方がないから、多年海上生活の経験に富んでゐる船頭の見込に一任して、自らは全く氣にとめぬ意。

【習はぬは】 船路の旅になれぬ者は。

【船ぞこに頭をつきあてて】 夜の船路の心細いために、起きてゐることも出来ないで、船底に平伏してゐるのである。

【音をのみぞなく】 創見に、

「音になくは、たゞ聲を立てて泣く事のみならず。そのかみは打ちくどき、歎くをも皆おしこめて音になくといふめり。」とある。

たゞ聲をたてて泣きかなしむばかりであるとの意。

【思へらす】 「思へり」の「り」を活かしてそれを「す」で打消したのである。思ひてあらずの意。

【昨日の様なれば】 十九日の條に「日あしければ舟いださず。」とある。

【二十日、三十日】 ハツカ・ミソカ。

【および】 指のこと。

毎日指を折つて日数を數へてゐるので、そのため指もいたむであらうとの意。

【いもねす】 寝もせぬこと。「い」は「寝る」の名詞。寝ても寝やられずの意味である。

【山のはもなくて云々】 今迄見た月はたいはい山の端から出て來たが、この月は海上なので、直ちに海の中から出て來るとの意。

【かしこ】 彼所。

【あかずやありけむ云々】 仲聲が乗船に際して催した、唐の人との別れの宴は、中々興が盡きなかつたのであらう、遂に二十日の夜の月が昇る時刻までその別宴は續いた。

【神もよみたび】 神も詠みたまひ。

【ことの心】 そのことの意味。

【男文字】 ヲトコモジ。漢字のこと。假名は女文字といはれた。

【さまを】「さま」は體裁。漢文に書き直して。

【この言葉】日本の言葉。

【心をやき、得たりけむ】その意味を理解することが出来たのであらう。

【そのかみ】その昔。

都入り

【小櫃】コビツ。小さい櫃。察する所玩具の類であらう。

【糰餅】マガリ。糯米の粉をこね、細くひねつて輪の如くし、胡麻の油で揚げたもの、其の形が輪の曲つてゐるので「まがり」といふ。こゝは法螺の形にこしらへたまがりである。

【賣る人の心をぞ知らぬ】その店先に並べてゐる小櫃やまがり、昔のまゝに變つてゐないが、その店の主人は果して昔のまゝの心かどうかわからぬといふ意。貫之が初瀬に参詣して「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける」の歌を詠んだ時と同様の心持であつたのであらう。

【あるじする】主人となつて人を養應すること。

【必ずしもあるまじきわざなり】萬人が誰でもする事ではない。特志があればこそ養應してくれたのであるとの意。

【立ちて行きし時よりは云々】出發の時よりも、歸洛の時の方が、あれこれとよくもてなしてくれたの意。

【これにかへりごとす】一本に「これにもそれにも」とある。この人にも答禮をした。「かへりごと」とは返禮・答禮の意。

【夜になして】夜になるのを待つての意。日を暮らして。

【飛鳥川】アスカガハ。古今集の雜に「世の中は何か常なるあすか川。昨日の淵ぞ今日は瀬になる。」

【ひさかたの歌】月の中に生えてゐる桂といふ名を負うた桂川であるから、その底にうつる月影も、桂の葉の色が變らぬやうに、昔と少しの變りもない。

【天雲の歌】天雲がはるか遠くにあるやうに、土佐にゐる時は、はるかに離れてゐると思つてゐたこの桂川に、今は現在來て、袖をぬらしながら渡ることが出来た。

【かつら川の歌】桂川と我が心が相通じたといふわけではないけれど、桂川の水が深いと同じやうに、自分が久し振りにこゝに歸つて來たこの感慨は、随分深いものがある。

【家】貫之の舊住宅。

【家を預けたりつる人】土佐在任の間、その住宅を預けておいた人。

【中垣こそあれ云々】その人の家と貫之の家とは、間にへだての垣はあるが、まるで一つの家のやうであるから、先方から希望して留守を預つたのである。

【さるは】一本に「されば」とある。

【便ごとに云々】幸便のある度毎に、土佐の方から物を送つて與へたとの意。

【聲高にもも言はせず】人々は預り人に對する不満を言はうとしたが、聲高には言はせなかつた。

【いとほつらく見ゆれど云々】先方は、十分に留守をしてくれなかつた程、しうちがつれなくはあるけれど、預けた自分としては、先方へ對して御禮をしようと思ふとい

ふ意。

【池めいてくぼまり云々】前に池のあつたところが、手入れをせぬために散々に荒れてゐるさまが、これでよく窺はれる。

【水づく】水で濕つてゐる。

【片枝はなくなりけり】片方の枝は、切られたか折られたかしてなくなつてゐた。「千年や過ぎにけむ」といふ語の中に不満と皮肉とが窺はれる。

【この家にて生れし女の子云々】この家で生れた女の子を土佐の國へ連れて行つたが、彼の地で死んだので、再びその生れた家へ一緒に歸ることが出来なかつたのが非常に悲しい。

【のゝしる】口やかましく言ひさわぐ。

【生まれしもの歌】この家で生れた子供も歸つて來ないのに、こゝに歸つて見ると新しい小松が生えてゐる。その小松を見れば、なくなつた子供のことが思はれてむしろ悲しくなる。

【あかずやあらむ云々】その歌でもまだ十分心を盡すこと

出来なかつたのであらうか、また次の歌をよんだ。

【見し人をの歌】 かつて此の家で見たあの子を、若しも松の千歳もかはらぬやうに、いつも無事なさまで見ることが出来るものであるなら、死別といふ悲しい永遠の別などするのでは決してなかつたのであるが、榮枯盛衰の流轉のはげしい世のこととて、何とも致し方がない。

【とまれかうまれ云々】 ともかくにも、この日記は人に見せる程のものでないのであるから、すぐ破つて捨てよう。

修辭法上の吟味

次の語句は文法上注意させたい。

これは物によりてほむるにしもあらず。

一文字をだに知らぬものしが。

ふみしなれば。

急ぎしもせぬ程に。

何とも思へらず。

いもねず。

よめりける歌。

それから「かつら川」の歌の結句

べらなり。

は古今集時代の歌の特有語であることを注意せしめ度い。

次に脚註にもべたが、簡略な筆致で、時には短歌の一句となるやうな句節が散見して、それが古雅な而して道勁な味を興へて居ることを注意させたい。

これかれ知る知らぬ送りす。

平らかにと願ひ立つ。

これより今は漕ぎはなれ行く。

人も遠くなりぬ船も見えずなりぬ。

いとわびし。夜はいもねず。

七 枕草子鈔

一 解題

枕草子

異本……枕草子は本朝書籍目録に清少納言枕草子二巻とあり。その冊数は二巻、三巻、五巻、七巻など本によつて定まらず。刊行の素本に慶長活字本あり、慶安二年の刊本あり。安齋雜考には「惣じてこの草子異本多し、季經の抄めされし本は章段も餘程多し、季經抄は十巻傳はれども、頼元の抄は十四巻といふ内わづかに四巻残り傳はれり。また閑院本とて抄もなき本一本傳はれり。また大放殿本とて傳はれり。」とあり。

註釋……註釋本の刊行せしものには北村季吟の春曙抄十二巻と加藤盤齋の抄（俗に萬歳抄と稱するもの）十五巻とありて、共に延寶二年に出でたり。盤齋は季吟に等しく松永貞徳に學び古書の註解を専とす。その抄は紙繆滿紙、大意にさへ通ぜざるところあれど、本文は春曙抄に異なるところ少からず。彼此對比して發明

するところ多し。春曙抄は尾州より得たる一本といへるによれるものにして、季經の抄はいまだ見ずとあるが、釋義穩當にして世に行はる。近頃詳解等の書發刊せられしが大體はまた春曙抄に基けるものなり。

近時出版の枕草紙註釋書の二三

枕草子評釋、金子元臣著

本文は慶安版本、春曙抄本を底本として他の諸本を參酌し解釋は丁寧綿密萬人の説の誤れるを一掃し、遺漏を補遺し、また發見の説も多い。特に批評に於て著者はその心血を傾注し、一面には文章修辭の批評に注意を拂ひ、一面には藤原氏時代の文化史を基礎とする歴史的批判の方式によつてゐる。尙参考年表、諸家系圖を附し、繪畫を挿入して説明をたすける等、意を用ひてゐる。但し著者の見解によつて本文をみだりに訂正した憾がある。

標題……枕草子といふ名は、本書の末に「宮（定子）の御前に内の大臣（伊周）の奉りたまへりけるを、これに何を書かまし、上の御前には史記といふ文を書かせたまへるなど宣はせしを、枕にこそはし侍らめと申ししかば、さば得よとて賜はせたりしを、あやしきことをや何やと盡きせず多かる紙の數を書きつくさんとせしに、いと物覚えぬ事ぞ多かるや。」とあるによれり、されどこれはた徒然草と同じく、後人のつけたる稱にて、もとは定まりたる名もなかりし故にや、禁秘御抄・八雲御抄・明月記等の古書には、たゞ清少納言が記とあるのみ。安齋雜考によれば「閑院本などにも題號なく、春は曙といふより何となう書き出したり……清原頼之抄にまた、題號ありけるや明かならずと書きたり。大炊殿本と申すに始めて枕草子と題付したり。いかゞ信じかたきやうに侍り。」とあり。活子本などにも清少納言とのみ標題を附したり。

時代・内容……隨時の感興と史的事實と錯雜混交して一篇を成す。すなはち山川草木の名をあげ、うれしき

物、をかしき物など様々に類聚して、折に觸れ心に浮びたること、觀察し感得したることを記せる間に、自己が遭遇したる事實を抉めること多し。その事實は寛和二年花山天皇の御落飾に次いで大納言義懐の通世せることなどや始ならん。少納言がはじめて定子に仕へしは、正暦三四年の頃の事なるべし。なほ淑景舎女御の東宮に參れること、積善寺供養の事などその程の記事少からず。それより進んで長徳中の記事最も多し。長徳元年道隆薨じてより、東三條の一流は頓挫して振はず、

二年伊周九州に謫せられ、定子勢力を失ひ、怏々として薨す。これらはいづれも少納言が枕草子擲筆以前の事なり。……

特色……枕草子に見るべきはその文章にあり。行筆縱横自在にして法格に拘泥せず、寸鐵人を殺し、迅雷耳にとどろき、縷々として春蠶の絲を吐くかと思れば、忽ち一刀にして切り、坦々として平安の大道を行くもの、急に嵯峨たる峻坂に當る。神出鬼没、端倪すべか

らず。紫文は黠々として春日とのどかに、清文は雲霓の如く變化す。彼は正、此は奇、才情の筆に表はるゝところおのづから然らざるを得ず。これらは二人の作を併せ讀むものよく知るところ、多言を要せざるべし。……

影響……枕草子が後世に及ぼせる影響は伊勢・源氏の如く著しからねど、また少なからず。徒然草は蓋しこれより出でたるものなるべく、江戸時代のはじめの犬枕・犬の草子・當世犬の草子などは全くこれに擬し、下りて花月草紙も範をこゝに取れり。風俗文選・鶉衣などの俳文、百花賦・百蟲賦の如きもまた枕草子に得るところありしなるべし。

（國文學全史平安朝篇に據る）

参考書

- 加藤盤齋著 枕草紙抄註
- 北村季吟著 枕草紙春曙抄
- 岡西惟仲著 枕草紙傍註
- 同 枕草紙拾穗抄

二 作者

- 松平靜著 枕草紙詳解
- 金子元臣著 枕草子評釋

清少納言 藤岡博士の論證を引用する。

略傳 著者清少納言は、曾祖父を深養父（清原姓）といひて、古今集中の作者、父は元輔にして後撰集の撰者の一人なり。少納言の傳記詳かならず。一條天皇の皇后定子に仕へて、敏才達識の譽宮廷の間に高し。榮華物語には三條天皇の女御淑景舎に事へたりとす。淑景舎は定子の妹なれば長徳二年定子薨じて後ここに參りて陪侍せしなるべし。しかるに淑景舎も定子の薨去より六年を経てうせぬ。その後の少納言が出處は如何なりけん。若殿上人が淺ましく荒れたる宿を過ぎて、これこそ昔の清少納言がなれの果よと語り合へるに、おどろくしき老婆の顔さし出して、駿馬の骨を買はずやと叫びたり（古事談卷二）といふなどと傳ふるところは、いづれも老齡にして落魄せる由なり。年老い世にも忘れられてひとり住みたるを、音なふ人のあり

ければ

とふ人にありとは得こそ言ひ出でね、われやはわれと驚かれつゝ。

零落して都にも住みかねて地方に住處を求めたりといふは、いまだ信を置くに足らず。無名草紙に「はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、乳母子なりける者に具して、遙かなる田舎に罷りて住みけるに、襖などいふもの乾しに外に出づとて、昔の直衣姿こそ忘れねと、獨りごちけるを見侍りければ、怪しの衣着て、つゞりといふもの帽子にして侍りけるこそ、いと哀なれ。」といへるは、必ずしも憑據ありとも思はれず。ただ傳説に基きて假想に耽りたるものならざらんや。四國にさすらひぬとも傳へて、今讃岐金刀比羅神社の境内にその墓存すれども果してその遺址なりや、これも亦信すべからず。近世伊勢貞丈の安齋雜考の中に、枕草子抄と稱する短篇あり。女房名寄・行成卿志中抄・女房作者部類・淑景舎日記・中關白記・季經抄等の書を引いて、清少納言の實名を記し、酒亂を記し、その性行

を知るに足るものありといへども引用文の眞實甚だ疑ふべく、こゝには取らず。……

性格 枕草子中著者が遭遇せる事實を挾めること多し。その遭遇せる事實といふも過半は自己に關し、しかもいづれも自讃のことなり。……(中略)……多くの記事は自讃にみちて、清少納言が驕慢の性を表はせり。その自讃は概ね己が學識に關し、その艷容麗色に誇るが如きことは殆ど見るべからず。思ふに清少納言は蛾眉朱唇花の姿あるにあらず、もとより和泉式部が大幣の引く手数多なる類にもあらず、御堂殿に音はるゝ紫式部にも及ばず、鏡中の影に山鳥ならぬ木兎の己が姿を喜ぶ能はざりしなるべし。……(中略)……されば女性に通有なる虚飾の念に、少納言が深くみづから誇とするところは、その才識にあり。詩文に明かに、名句を暗んじ、穎才表に顯はれ、傲憤人を凌ぐ性は、篇中至るところに見ゆ。さればこそ紫式部日記に評して「清少納言こそしたり顔に、いみじう侍りける人、さばかりさかしらだち、眞名書きちらし侍る程も、よく見れ

はまだいと堪へぬこと多かり。」といひ、榮華物語にも「清少納言などいであひて、せう／＼の若き人などにもまさりて、をかしうほこりかなるけはひ、」といへるなれ。しかるを少納言が知らず顔に「物語などするにさし出でてわれひとりさいまくるもの、すべてさし出は重も大人もいとにくし。」(枕草子二)といひたるは盲人の人を嘲りて言といふものにて、式部丞信經を評して、「あまりなる御身ほめかなと片腹痛く」(卷五)といへる、その御身ほめこそ片腹痛けれ。

更に枕草子を以て紫式部日記に比するに、日記には儂聲の婦人の風采性情など、微細に描寫したるに、草子には皇后定子・淑景舎女御などの御有様をこそめでたく又なきやうにほめ記したれ、陪侍の女房につきては殆ど一言もこれに及ばず、僅かに宰相の君が皇后に代りて返事したゝめたるを、「いとをかしく書きたまへり。」と一言これを讀し(卷十一)、また中納言の君が「紅の張りたるを着て、前より髪をかいこし」たるを嘲笑せしことあるのみ(卷九)。これまた少納言が驕慢

不遜、袖を列ねて共に宮中にある者の如き、敢て眼中に置かず、従うてその進退などは、以て己が筆を煩はすに足らずとせし故ならんか。しかれども男子に對する著者の言動は全く之に反す。中關白が戲謔を記して委曲の状を盡せるは言ふに及ばず。齋信・行成の容儀を激賞して、これが描寫に力め、わけて一見して慢かに齋信が服装を観察し、定子等はその注意の深きを笑はれたることもあり(卷四)。そのほか權中納言義懷・大納言伊周のこと、または實方・宣方のことなど、いづれも見ること精しく、寫すこと詳かなり。思ふに男女の間の微妙なる懸隔して競争嫉妬の念なく、却つて異性間の微妙なる引力あれば、増上慢の才女も驕悍ある人の爲には、その慢心を忘れて手まどひせしなるべし。「はづかしきもの」とて、少納言が第一に「男の心のうち」(卷六)といひたるを思へ。

しかれどもその官位才色に對して贊稱の念なき時には、人を人ともせざること、男子と見るも、女子におけるに異らず。その兄と稱せらるゝ修理介則光を物と

もせざるが如き、大進生昌・美濃守時柄を愚弄するが如き、才覺至らずと見る男をばいかに侮蔑したるかを知らぬに足らん。少納言にして女らしき心あらば魯直にして世に軽んぜらるゝものは却つて憐みいたはるべきを、驕慢の念強く我意深き癖として、惻隱の心は殆ど求むべからず。元來同情は滑稽諷刺のほかは、詩文に關くべからざる要素なるを、枕草子の一篇、筆に任せ才に誇り、包含せず抑損せず、鋒銳露出して、ひとりこの要素を缺如したるこそ、家に雑作なきこゝちとしてすさまじくそゞろ寒げなれ。いたづらをし、そばゆる小兒をそしらぬ顔に許しおく親を惡めるは(卷八)親心知らぬわざながら、それはまだしも容すべし。ある男の家の焼けたるを笑へる、また長谷に詣でて賤しき人のわが前に蹲まれるを追ひ退けしめんと惡みいへるが如き、清少納言はいかに女らしからざる女なりけるよ。

(國文學全史、平安朝篇に據る)

三 主眼

王朝時代の文學の代表として、又わが隨筆文學の源泉

として、枕草子の二節をあげた。わが上代人が自然と人事に對していかに敏感であつたかは、第四課及第五課に於てかなりあきらかにされたが、それに比してその敏感さが更にこまかく磨かれたこと、殊に女性特有の敏感さから生れた筆致といふものが、如何に優れた香氣を持つかを知らしめ度い。「國文學」の概念は、ごく一般的に初心者にまづ王朝時代の文學を想起せしめる。そしてその源泉は源氏物語と相並んで枕草子であるから、源泉に掘りあてたといふ感激を起さしめるのもまた大切である。

四 概説

本課は二節を鈔したのであるが、隨筆文學の性質として段節を附することは出来にくい。それで左に各二節に對する金子元臣氏の批評を紹介して置くに止める。

(1) 春は曙

「時刻を四季に配當してその特色を紹介したこの企は空前の新案である。さて春は曙、夏は夜、秋は夕ぐれ冬は朝の四綱目がまづ出来て、次の細説を試るに當つ

て、春・夏・秋は専ら敘景につとめ、冬には人事を配して、内容に變化あらしめ、また春、夏を輕々に評し去つて秋、冬に力をそゞぎ、また春・夏・秋は専らその好處のみをあげ、冬には「晝になりて……わろし」と、抑損の轉語を下したなど、筆法が變化に富んでまことに面白い。しかも文の様式が整然としてその結構から布置から、一寸のたるみもない……(略)」

(2) にくきもの

「この條は婦人の觀察として、きはめて敏慧な特徴のあるものの一つである。清少は同性よりはむしろ異性間の方に人望があつたらしくて、そのむきの交際家であるから、自然來客が多かつたのであらう。隨つて長尻のお客には閉口しぬいたものと見える。視の髪の毛は當時の垂髪では落毛の入りがちな筈で、墨の石はさすがに文筆者の觀察である。驗者の居睡、ことごとくなるものの段では大いに同情したのを、こゝではひどく攻撃してゐる。得勝に物いふは引きいれ聲の先生と同様で、一は小面にくく、一は厭味に堪へぬのである。式

部丞が敘辭し、駿河守が前司になる頃は、相應の老境であらう。老人には自我的感情が發達したり、頹廢的の氣分に陥つたりして、社會の禮法などを無視したやうな行動をとるものがよくある。人の家に來て扇で塵をあふぎたてるのは不作法の塵卷ではあるが、昔の殿舎は今の住宅とちがひ、掃除が不行届で塵埃がなかなか多かつたらうと推察される。狩衣の前を捲くり入れるのは塵を附けまいとするのだらう。出入の注意なかなかこまかい。流石に婦人であるとは、あまれる。飲酒家の攻撃は、中ノ關白記に大酒と書かれた清少としては、同情が無さ過ぎるほど辛辣である。醉人の形容は輕妙な筆で、徒然草の酒の段と相匹敵してゐる。「物うらやみし云々」は、さういふ婦人を對象としていつてゐるものらしい。泣く子はさすが子供好の清少も閉口したと見えて、後にも「よるなくものはめでたし」といひながら「乳兒共のみぞさしもなき」と但書を添へてゐるからをかしい。鳥は昔から支那でも日本でも憎まれものとなつてゐるのが氣の毒である。(中略)

蚊の羽風は警句、車の泣くに至つては全く感心しない。貸主さへ憎いのは勝手手の言草のやうで、しかも尤である。さし出口を憎む資格が清少にあるかしらと思ふと、をかしくなる。子供の増長は子供好の清少には實驗する機会が多かつたらう。轉寝中との理由のもとにおひはらふ來客は、元より侮ららしい身分のもので生意氣な今參はさし出口の儔である。(略)」

五 取扱上の用意

萬葉集と比較して、詩の境地と如何に異なるかを知らしめる時、隨筆としての色彩がはつきりする。しかしそれよりも、本質的に自然や人事に對する態度が、萬葉集のそれと異色を爲して居ることを明かに爲し得るのであつてこれは本課取扱上是非爲さなくてはなるまい。又後世の隨筆文學の先驅であるから、この跡を逐うたもの、徒然草や下つて花月草紙との比較が、大切であらう。相似た觀察點に立ち、相似た資材を扱ひながら、時代と筆者の相違によつて、異つた特色を夫々有することを知らしめねばならない。この比較の方が全くちがつた境地でな

いからして、反つて萬葉集とのそれよりはむづかしいであらうが、文學作品評價の力を養ひ得る點ではより効果がある。要するに優れた枕草子の値打を語釋の上でなく文學史的位地の明示によつてより深く知らしめ度い。その基礎は語釋にあることは言ふ迄もない。因に隨筆文學の本質に關する、土居光知氏の所論は甚だ興味あるものであるから、左にその一部を抄録することにしてしよう。

物語は「汝」と「我」との關係の推移——歎び・嘆き・矛盾・消長・環境との交渉——を内容とする。記・紀は外なる世界の歴史であり、萬葉は内なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歴史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歴史を輕んじ、心情の歴史を重んじた。螢の巻に、紫式部は「(物語は)神代よりあることを記し置きけるなんなり。日本紀などは唯かたそぼぞかし。これ等(物語)にこそ道々しく委しきことはあらめ。その人の上とてありのまゝに言ひ出づることこそなけれ、善きも悪しきも世に經る人の有様の、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて言ひ置き始めたるなり。善きさまに言ふとは、善きことの限りをえり出で、人に隨はむとは、又あしきさまの珍しきことを取りあつめたる、皆かた／＼につけて、

この世の外の事ならずかし。」といつてゐる。從來の歴史は眞實の外面を粗雑に語つてゐたにすぎない。心のことが神代よりこのかた眞に在ることである、眞の價值である。物語はこれを精微に表現するものであるとの自覺が源氏物語を産んだ。當時の人々がこの物語に最も充實した價值ある生活を見出したことは更級日記の著者が「源氏を一の巻よりして人も交らず几帳のうちちうち臥してひきいでつゝ見る心地、後の位も何かはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のまめたる限り、火を近くともしてこれを見るより外のことしなれば、自ら名などはそらに覺え浮かぶをいみじき事に」思ひ、物語のうちにある生活に憧れたことからでも想像せられる。しかし紫式部の考へた價值はあまりに主觀的であり、未だ超主觀的なもの知らなかつた。そこには心情の推移が興味を中心

になつてゐる。しかし精神の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良朝以後の人々は狭い主觀の世界に閉ぢこもり、平安朝の貴族は權勢や官位を得んとする運動と、歌舞・遊樂の生活以外になすことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、世間的な經驗を殆ど持たなかつたのである。精神的成長は主觀と超主觀的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後者が内化されることによつて可能になる。主觀に閉ぢこもつた人々は道德的意識も臆げであり、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連續は弛緩・倦怠・分裂に終る。連續的な姿にせんとすれば却つて不徹底な、なまぬい表現になることを感じた人々は、刹那の激潮たる印象を、緊張した斷想を、そのまゝに書きつけた。それは枕草子・徒然草の如き隨筆文學である。(略)(文學序説による)

清少納言

平安朝の文學者
枕草子の著者
肥後守清原元輔
の女
一條天皇の皇后
藤原定子に仕へた

七 枕草子鈔

春は曙

春は曙。やうく白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮。

清少納言

(1) 遒勁なる筆致、まづ一讀胸奥に入る。

炭櫃
圍爐裏
火桶
圓火鉢の類

加持
病氣災難等を攘
ふ爲に佛力の加
護を祈る咒法

夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへ
ゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁
などの列ねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、
風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りた
るはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒
きに、火などいそぎおこして炭もて渡るも、いとつきづきし。晝に
なりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちにな
りぬるはわろし。

にくきもの

いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、
後になどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき
人、いとにくし。硯に髪の入りに磨られたる。又墨の中に石こも
りて、きし／＼ときしみたる。俄かにわづらふ人のあるに、騷者求
むるに例ある處にはあらで、他にある尋ねありくほどに待遠に久
しきを辛うじて待ちつけて喜びながら加持せさするに、この頃物

(1) 後世人の踏襲をうけ
たる所。

(2) 不敏では言ひえな
い。
(3) 微妙な朝より晝にう
つりゆく趣をとらへ
得て居る點驚く可く
敏感である。

(4) 生ま／＼しく迫る
じがある。
(5) 神經のするどきを思
はず。

ひろめき
廣めきか
狩衣
もとは狩獵の時
の布衣
當時は六位以上
の常服で絹製
式部の大夫
五位の式部大丞
駿河の前司
前駿河守

のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはちねぶり聲になりたる、
いとにくし。なんでふことなき人の、すゝろにえがちに物いたう
いひたる。火桶炭櫃などに手の裏打返し、皺押延べなどしてあぶ
り居る者。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老いば
み、うたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物言ふま
まにおしすりなどもすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、居む
とする處を、まづ扇して塵拂ひすて、居も定まらずひろめきて、狩
衣の前、下様にまくり入れても居るか。かゝる事は、いひがひな
き者のきはにやと思へど、少しよろしき者の、式部の大夫、駿河の前
司などいひしが、させしなり。また酒飲みてあめき、口をさぐり、髻
あるものはそれを撫でて、盃人に取らすほどのけしき、いみじく
にくしと見ゆ。また飲め、などいふなるべし。身ぶるひをし、頭振
り、口わきをさへ引垂れて、童べの、國府殿に参りて、など語ふやうに
する。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心づきなし
と思ふなり。
(4) 物羨みし、身の上嘆き、人の上言ひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞か

(1) よみながら腹立たし
くなる。又どこか滑
稽味があるのは作者
の客観味ある筆づか
ひから来る。
(2) きたならしげな老人
の様子を躍如として
居る。

(3) 酒に酔ひし様のたわ
けさを描いて痛烈完
膚なき迄である。

(4) これは前の公卿達に
對して女房の缺點に
對する評であらう。
女の性行を剔抉して
餘すところがない。

伊豫簾
伊豫國浮穴郡から出る細い篠で編んだすだれ帽類の簾
上部に水引のある縁取の精製の簾
遺戸
横における引戸

まほしがりて、言ひ知らせぬをば怨じ譏り、又、わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。伊豫簾など懸けたるをうちかづきて、さらさらと鳴らしたるもいとにくし。(1)帽類の簾は、ましてこはき物の打置かるゝいとしくし。それもやをら引上げて出で入りするは、更に鳴らす。また遺戸など荒くあくるもいとにくし。少し搥ぐるやうにてあくるは、鳴りやはする。悪しうあくれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。わが乗りたるは、その車の主さへにくし。

(1)音について神経質であつたことを示してゐる。かたい音や荒々しい音を描寫してゐて更に又かすかな音迄みのがして居ない。

物語などするに、差出でて、我一人才まくる者。すべて差出では、童も大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でて言腐しなどする、いとにくし。鼠の走り歩く、いとにくし。

(2)才人であるから、才氣走つたことは殊に氣づいてにくらしかつたのであらう。

誦文する
咒文を唱へること
クサメは即ちその咒文の一

あからさまに來たる兒ども童べをらうたがりて、をかしき物など取らするに、習ひて、常に來て居入りて、調度や打散しぬる、にくし。家(1)にても、官仕所にても、逢はでありなむと思ふ人の來るに、空寐をしたるを、我許にある者どもの、起し寄り來ては、寐ぎたなしと思ひ顔に引揺がしたる、いとにくし。今參りの差越えて物知顔に教へやうなる事いひ、後見たる、いとにくし。

(1)作者自身の姿があらはれてゐて面白い。

鼻ひて誦文する人。おほかた家の男主ならでは高くはなひたる者いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたに躍り歩いて、もたぐるやうにするよ。また犬のもろ聲に、長々と鳴きあげたる、まがまがしくにくし。(2)めのとの男こそあれ、女はされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、聊かもこの御事に違ふ者をば、譏し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これが咎を心に任せて、言ふ人もなければ所得、いみじきおもゝちして事を行ひなどするよ。(枕草子)

(2)當時の世俗習慣に對するするとい批評である。少しも關係した子供はわがものと思ふ見にくさを指摘してゐる。

語句の解釋 附 文法修辭法上の吟味

春は曙

【春は曙】これで一文をなしてゐるのである。省略の行は

れてゐることはいふまでもないことであつて、曙の次へ「をかし」などを補つて解くべきである。春の頃は一日の中で曙が面白いとの意。

【白くなりゆく山ぎは】白くは「著く（しるく）」の意に解すべきであらう。夜があけるにつれて山の輪郭の次第にはつきりとして来るのをいつたものである。

【少しあかりて】あかるは「明る」である。もれてくる朝の光のために山肌少し輝きを帯びるのをいふ。

【紫だちたる雲】「たち」は氣のたつこと。今いふ「……がかる」の意。紫がかつた雲、帯紫色の雲である。こゝにいふ紫は、所謂古代紫であつて、現在いふ紫に少し赤味の交つたものである。

【たなびきたる】例の省略である。「たなびきたるがをかし。」等と補つて見たらよい。たなびくは靡く意。「た」は接頭語。

【夏は夜】をかしを省略したことは前に同じ。

【月の頃はさらなり】さらなりは「いふまでもない」「勿論である」の意。「月の出づる頃のをかしきはいふもさらなり。」の意。

り。」の意。

【なほ】「でもまた」の意。闇の夜はつまらないかといふに、闇の夜もやはり螢の亂れてとんでゐるのが面白い。

「螢飛びちがひたる」の下に「をかし」を省略した。

【をかし】興がある。面白い。

をかし及びこれに似たあはれといふ語は國文中に最も多く使用されてある語であつて、その場合に適當な意味をあてることは解釋の上に注意を要することである。左に参考の爲めにをかし、あはれに對する考察の一つを紹介する。勿論これが學者の定説ではない。参考の程度にとどめられたい。

土居光知氏（英文學者、東北帝國大學教授）の説

源氏物語に於ける「あはれ」をかし「うるはし」「うつくし」「あて」「らうたし」「えん」「なまめかし」等の語は平安朝に特有な情趣的内容を持つてゐるが、こゝには始めの二語についてその内容を検してみよう。「哀れてふ事だになくば何をかは戀の亂れのかぬ緒にせむ」「哀れてふ事こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけり」「哀れてふ事に慰さむ世の中をなか悲しと云ひて過ぐらむ」「春はたゞ花の一重に咲くばかり物の哀は秋ぞまされる」「戀せずば人は心もなからまし物の哀は是よりぞ知る」

【ねどころ】寢所（ねどころ）である。疇をいふ。

【あはれ】面白いにつけ、悲しいにつけ、すべて感動の深い時にいふ。前の「をかし」の條参照。こゝでは興味があるといふ位の意。

【まいて】「まして」の音便による變化である。

【列ね】列を作ること。

【風の音、蟲のねなど】この次に「の聞ゆる」或は「を聞きたる」を補つて解くべきであらう。

【つとめて】早朝、翌朝の二義がある。こゝでは前者である。

【いふべきにもあらず】雪の降つた風情の面白さはことごとしく言ふまでもない。

【霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もて渡るも、いとつきん／＼し】霜などの眞白く見えるほどたくさんおいて寒い時、また霜はなくとも寒さの厳しい時に、火をいそいでおこして、炭をもつて殿中そこゝに配つて通ふのは、冬の朝には似つかはしい景物である。

等の歌の意味を考へても「あはれ」が當時の人の重大事であつたことが窺はれる。この語は竹取には「同情を催す」「愛慕する」「惜む」の意に用ひられ、伊勢には「同情する」「寵愛する」「嘆賞する」の意味に、大和物語・落窪物語には「ゆかしく思ふ」の意味を加へて用ひられ、源氏には感傷的な意味が深まり、「寂しく、力なく、趣きある」「情深き」「同情をひく状態」「感動する」「哀傷する」等の意味に多く用ひられてゐる。「をかし」は竹取と伊勢に「興味ある」の意に用ひられ、大和・落窪には才機ある「感心すべき」「面白き」「上手なる」「趣味ある」の如き意味に用ひられ、源氏には「風流」「上品」の意を加へ、枕草子には想深く寂しく趣あるものは「あはれなるもの」の中に入れ、賑はしく晴やかに才機あるものは「をかしきもの」の中に數へてゐる。「あはれ」の趣味が發達すればその反面として「をかし」の趣味も隨伴した。人々が感傷的になればなるほど、それを紛らす可笑的なものが要求される。平安朝文學には後者の趣味に屬し今に傳はらぬものも多量にあつたやうである。「あはれ」は「ああ」なる感嘆のうちに含まれるすべての心持をふくみ、「をかし」は「おゝ」なる驚嘆のうちに含まれてすべての心持をいひあらはす語であらう。……（文學序説）

【夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに】花やかは美しく鮮やかな意。夕日が鮮やかな落暉をかゞやかせつゝ山の端に入らうとして間近かに近づいた時に。

【さらでも】はさらでもであつて「さ(然)は霜のいと白き」をさす。「わたる」はあちらこちらに通ふこと。

【つきくし】似つかはしい。うつりがよい。

【ぬるくゆるびもてゆく】 氣温が段々温かくなり寒さが和んでくるをいふ。「もてゆく」は次第に進行する事にいふ。

【炭櫃】 スピツ。「すみびつ」の略。圍爐裏(キロリ)である。禁秘抄に、禁中殿上の下侍(シモザムラヒ)に炭櫃があつて四方には疊を敷く由が記してある。

にくきもの

【いそぐことある時に云々】 いそぐことは、主人の方のことである。主人が急いで氣のせか／＼してゐるときに、その胸中をも察しないで、綿々としてつきぬ長物語をする客は、先づ憎いもの一つであるのだ。長言は「ナガゴト」と讀む。長い話である。「まらうど」は「まれびと(稀人)」の轉じたもので客人である。「まらうど」の次に「いとにくし」が省かれたものである。以下多くこの省略が行はれてゐる。

【あなづらはしき人】 輕視してもよい人。「あなづる」はあ

などる。おろそかにするの意。

【後に】 「後刻改めてゆつくり承りませう。」との意。

【心はづかしき人、いとにくし】 心はづかしき人は遠慮のいる人である。遠慮のある人に向つては、後にとはいへないので、さういふ人が長話をするのは(補うて解すべし)憎らしいといふのである。

【硯に髪の毛の云々】 當時の婦人の髪は後世の如くかく結髪したものでないので、抜毛などは散亂しやすく、随つて硯の中に髪の毛の入りこむことも多かつたであらう。

【墨の中に石云々】 墨の中に堅いまざりものがあつて、磨る時硯の面とすれ合つて澁ることをいつたのである。

【俄かにわづらふ人云々】 急病をやむ人の出来た場合、平安朝の人は直ちに「物怪のたゝり」を思ふのが常であつた。そこで醫藥を求めるよりも先づ物怪を退散せしめることに力を用ひた。即ち修験者を招いて加持・祈禱を行つたのである。

【験者】 ゲンザ。修験者のこと。法を修して効験を現はす僧をいふ。所謂山伏である。役小角(エンノヲツヌ)を

祖とし、後世一宗となり、天台・眞言兩宗に屬し、大和

の葛城山・金峰山などを其の道場とした。當時の習慣として、験者を頼んで、病氣平癒・惡鬼退散・息災延命などあらゆる祈禱をなさしめた。

【例ある所】 平常験者がゐる所。

【待ちつけて】 験者の來るのを待ちおぼせて。

【加持】 カチ。眞言で行ふ佛力護念を禱る咒法である。

即身成佛義に「加持者表三如来大悲與三衆生信心一佛日之影現三衆生之心水二加。行者心本能感佛日一名持。」とある。

【困す】 コウす。「こんす」の音便。疲れる、くたびれる意。諸方の物怪を調伏したため、すつかり疲勞したのであらうかの意。

【居るまゝにすなはちねぶり聲になる】 すわるや否や咒文を唱へる聲が眠聲となること。これでは到底物怪の調伏は覺束なしと思はれるので憎いといふのである。

【なんでふことなき人】 何といふ取處もない人。なんといふが約まつて「なんでふ」となる。

【すゞろに】 むやみやたらに。

【えがちに】 心得がほに、得意がほに。

【手の裏打返し云々】 火鉢に手をかさす時は普通掌の方を下にするものであるが、いつまでも手をあぶるとなれば甲の方を下にしたり再び掌を下にしたり、打返しつゝあぶるものである。つゞいては一方の手で他の手の皺をこすつてのべなどすることがはじまつてくる。

【いつかは云々】 いつ若いものがそんな不作法な眞似をしたらうぞ、若者はそんな事はないのであるが、年寄じみていやな者に限つて、さうした無遠慮はもとより、遂には火桶のふちに、足までものせて、話をしながら足をこすりあはせたりなどするものだ。「うたてある者」は疎ましくいやなもの。

【さやうのもの】 かゝる不作法な老人をさす。

【居る】 すわること。

【居も定まらず】 むすまひも定まらず。落着いてぢつと坐つて居らぬことをいふ。

【ひろめく】 廣めくの義か。ちらくら動くこと。

【狩衣】 カリギヌ。もと狩獵の時に用ひた服。闕腋で、袖口に括緒(ク、リヲ)を通し、事のある場合には手首で締め括るやうにしてある。後には太上天皇以下、六位以上の常服となつた。(挿圖参照)

【前、下様にまくり入れ】 狩衣の前の垂を向ふへはねてのばし置くべきを、膝の中にまくり込んで敷くのであらう。

【いひがひなききは】 「きはは」は「分際」の意。言葉にかけて言ふ甲斐もない下賤な分際の人。

【よろしきもの】 身分のよいもの。

【式部】 式部省は八省の一で、朝廷の儀禮、内外文官の考課・選敘・祿賜等を校定し、學校を管理し、貢人を策試する等のことを掌る。その職員は、

- 卿 一人(正四位下) 四品以上の親王これに任ず
- 太輔 一人(正五位下)
- 少輔 一人(從五位下)
- 大丞 二人(正六位下)
- 少丞 二人(從六位上)

である。

承に新任を加へんがために、大丞の上席者を六位に敘して職を去らしめることがあるが、中には五位に敘してもなほ留任するものもある。これを「式部の大夫」(シキブのタイフ)といふ。大夫(タイフ—タユ)は五位の稱である。

【前司】 ゼンジ。前の國守。

【いひしがせしなり】 いひし人が、さうしたことをしたのであるとの意。

【あめき】 わめき。

【また飲めなどいふなるべし】 遠目に見てゐる清少納言の推察である。「また飲め」などといひながら盃をさしてゐるのであらう。

【身ふるひをし云々】 泥酔者の歌を歌ふ時の有様である。

【國府殿】 國守のやかた。

【それはしも云々】 それが下賤のものならばともかく、教養ある立派な人がさうした醜態を演じたので、氣にくはなく思ふのである。「心づきなし」は氣にくはぬの義。

【物羨みし】 他人の幸福を羨む。

【身の上嘆く】 自己の不遇を嘆く。

【人のうへいひ】 とやかくと他人のことを批評すること。

【語りしらべる】 しらべるは「明かにする」意。語のつまづまをあはせて、まとまつた話にすること。

【ちこ】 乳兒である。幼兒。

【伊豫簾】 イヨス。伊豫國浮穴郡露の峯の山中より産する細い篠を編んだ粗末な簾である。

【かづく】 かぶる意。簾を押上げてくゞることをいつたのである。

【帽額】 簾の上部の外側に、一幅の帛を、横に幕の如く張つて飾としたもので、後世の水引幕である。簾の縁も帛である。簾の竹は極めて精巧に、細く削つたものを用ひる。

帽額は伊豫簾よりも剛いものであるから、潜ると、かゝげたのを放して下に置く時はよけいに仰々しい音が耳に立つ。

【やをら】 そろりと。靜かに。

【遣戸】 ヤリド。引戸。敷居、鴨居に入れて開閉する戸。横にしげ棧がある。所謂まら戸といふものである。

【悪しうあくれば云々】 闕にこだはつてゐるのを、下手にあけると、障子なども撓まし、ごとくと音を立てるが、それがまたいやに耳に立つものであるとの意。障子は唐紙襖である。

【こほめく】 ごとくと音のすること。

【耳も聞かぬにやあらむ】 乗つてゐる人の耳は聞かないのであらうかとの意。換言すれば乗つてゐる本人には聞えないのであらうか。

【我が乗りたるは】 ぎし／＼きしむ車をかりて自分が乗つた時には、きしむ車だけはその車の持主までが憎らしくなる。

【差出でて、我一人さいまくる】 「さいまくる」は「才捲くる」の義で我ひとり利口ぶつて喋々するをいふ。まくるはいひまくる、叩きまくるなどと同じく、上にある語の意味を強くするための接尾語である。「さしいでて」は俗にいふ「でしやばる」義。

「昔物語などするに云々」人が昔の物語をしてゐる時、それについて自分もよく知つてゐるやうな話であれば、ちよいと傍からさし出口をきいて、そのはなしを悪しざまに言ひ落すのは憎らしいものだ。「くたす」は腐(クサ)すである。俗にいふくさす、けなすにあたる。

【らうたがる】可愛がる。

【ならひて】子供達がなれて。

【家】自分の住家。即ち宮仕へから下つて住んでゐる時の住家。

【空寐】ソラネ。寐たふりをする。狸寐入をすること。

【いぎたなし】眼覺めのわるいこと。俗にいふ寢坊である。

【引き揺がす】體を揺つて眼を覺まさせること。

【今参り】新参者。

【さし越えて】前からゐてよく事情に通じてゐるものをさし越えるのである。

【教へやうなること】教訓がましいこと。指圖がましいこと。

【後見る】ウシロミル。世話を焼くこと。

【鼻ひて誦文する人】異本に「はなひててづからずんじ

いのる人」とある。この意味に解すべきであらう。「はな

ひ」はくさめのこと。誦文(ズモン)は禁厭の文句を唱へ

ること。くさめをして自ら咒文をとへる人はいと憎し

の意である。くさめは古から何かの前兆として、大抵の

場合忌みきつたものである。されば人がくさめをした

時は、その災禍をはらふために傍の人が咒文を唱へてや

つた。四分律に「時世尊嘆、諸比丘咒願言長壽」とあ

る。これによつて見れば、この風習は印度に於て行はれて

ゐたらしい。その時に唱へる咒文は「休息萬命急々如律

令」と、拾芥抄・簾中抄に見えてゐる。又クサメの語も

その咒語である。

【家の男主】一家の男主人である。

【もろ聲】諸聲の義である。數多のものが揃へて聲を出す

こと。

【鳴きあげる】吠え立てること。やかましく大聲になくこと。

【まがくし】不吉なこと。犬の遠吠は縁起のわるいもの

として今も人に厭はれるものである。

【めのとの男こそあれ】こそ、その下に「にくし」が省略せられてゐる。男は「夫」の意。乳母の關係によりて、その夫が専恣な振舞をするのは憎むべきである。

【女はされど云々】「されど女は」といふべきを、女を強く

いひなさんために倒置法を用ひたものである。「されど」

は「にくし」を受けてゐる。乳母の育てゝゐる養君が女兒

である場合は、流石にその夫が近寄りぬ故に、恣な振舞

を起さぬからよいのである。

【をの兒をば云々】「をの兒」は、乳母の育ての男兒である。

前に述べた「めのとの男」の専恣の様をあげたのである。

【たゞわが物にする】その養君に對しては、他からの干渉

を避けて、自分一人で萬事の世話をすること。

【領す】占有すること。

【うしろみる】後見をすること。

【この御事】此の養君の心をさす。

【人をば人とも思ひたらず】「思ひたらず」は「思ひてあらず」の義。人を人とも思つてゐない。即ち旁若無人に勝

手な振舞をすること。

【怪しけれど】その夫の行爲は、けしからぬことであるがの意。

【これが咎】咎は非行の義。これは乳母の夫をさす。

【心に任せていふ】心に感じたまゝを口に出して言ふこ

と。即ち、心の中で乳母の夫の暴狀を憎んでも、そのま

まに主君に對して語るものがないのである。

【所得】トコロエ。尊大にかまへること。高慢ぶること。

【いみじきおももち】偉さうな顔付。

修辭について

省略の多い事が枕草子全體に互つての特色であるがこの文章にもきはめて多く、簡潔、遒勁なる妙味を生んで居る。たとへば「春は曙」の段では

春は曙

ほそくたなびきたる

夏は夜

螢とびちがひたる

秋は夕暮

冬はつとめて

等の下に「をかし」の意味の詞が略されてゐてそれが反つて余韻を感じしめる。「にくきもの」では多く「にくし」をつけて、その中にとき／＼省略を入れて一篇に變化を與へて居る。

長言するまらうど

硯に髪を入れて磨られたる

墨の中に石こもりてきし／＼ときしみたる

皺押のべなどしてあぶり居る者

泣くちご

飛びちがひ鳴きたる

我一人才まくる者

はなひて誦文する人

などである。

挿圖

狩衣

もと狩獵などの時に用ひたので、この名が出たのであ

る。

闕腋(ケツテキ)の袍に似て短く、袖付けは後を少し縫ふばりで、前は縫はない。

袖には括(ククリ)がある。

地質は古くは布を用ひたが、後は、浮織物(ウキオリモノ)、固織物(カタオリモノ)、綾・平絹(ヘイケン)、紗等を用ひることとなつた。模様は一定しない。

江戸時代は、模様のあるものを狩衣、模様のないものを布衣(ホイ)として區別し、狩衣を禮服とした。

八源氏物語

一 解題

新國文學史

五十嵐 力著。早稻田大學出版部發行。

本課は第三篇平安朝文學の第二部「平安朝文學の代表者としての源氏物語」中の「平安朝の時代相と源氏物語」「源氏物語の絶大價值」から採つた。

二 作者

五十嵐 力 イガラシ チカラ。

國文學者で文學博士である。

明治七年十一月山形縣米澤市に生れた。明治二十八年東京專門學校(早稻田大學の前身)文學科卒業。三十四年以來同大學に教鞭を執り、現にその文學部教授で前文學部々長である。修辭學・文章論の造詣が深く、此の方面に於て「新文章講話」「作文三十三講」等の好著がある。

その他「新國文學史」「趣味の傳説」「八重葎」「半農生

活」「我が書翰」「平家物語の研究」「甲鳥園隨筆」「國歌

の胎生及び發達」等の著がある。特に、その最後の二著に就いては、作者自ら「私は昨大正十二年に於て五十歳を迎へました。『五十』といふ歳を迎へて先づしみ／＼と考へられたのは、細川頼之が『人生五十愧無功』の一句であります。私はこれまで、何一つ、これといふ仕事をしてをりませんが、せめては此の際、二つの小著述をまとめて、過去の半生を記念する『愧無功の標』にしたいと思ひました。その一つは創作性のもので、此の『甲鳥園隨筆』がそれでありませう。他の一つは學問性のもので、つゞいて公にすべき『國歌の胎生及び發達』がそれでありませう。(甲鳥園隨筆はしがき)といつてゐるだけであつて、二書ともに好著だとの評が高い。

三 目的

平安朝の物語の代表として、吾國文學の作表作の一とし

て源氏物語の一節を読ませたいと思ふのであるが、現行の文部省の教科書検定内規では、源氏物語の文は教科書には採用させぬ方針であるので、やむを得ず源氏物語の解説のものに代へたのである。然し本課の文は單なる書史的の乾燥無味な記述でなく、潤ひあり趣ある筆で平易に説かれてゐるので、興味が深く、源氏物語に關する大略の理解を得ることが出来る。

四 概説

源氏物語について、その背景をなしてゐる時代を説き、作の性質及び文學としての位置を批評したものである。その段落を辿つて見れば次のやうである。

第一節 平安朝時代の時代風潮の起つた所以を譬喩を用ひて説明した。

第二節 平安朝時代の宮廷・貴族の生活の様様。

第三節 源氏物語とその成立した時代。

第四節 源氏物語は平安朝社會の理想を寫したものであること、並びに源氏物語に對する本居宣長の批評

第五節 文學としての源氏物語に對する批評。

五 取扱上の用意

文學とその時代との關係は極めて緊密である。文學は時代を基調とし且つ背景としてその前面に浮び出たものである。即ち時代は文學を生み、文學は時代を如實に反映したものである。と同時に文學は時代を指導し、その動向の目標を示指する。即ち文學は時代を教化し、時代を作る。かやうな關係にあるが故に、文學研究には時代の姿を明らかにすることが必要である。時代との聯關に於て文學を研究することが最もたしかな理解への道である。この意味に於て本課は單に源氏物語の理解を進めるに便利であるのみならず、文學殊に文學史研究の上に方法的指示を與へるものである。故にかうした點に於ける教授効果を期待して、内容をよく理解するやうに指導せられたい。

六 參考

源氏物語の梗概

源氏物語は、單に王朝時代文學の粹たるのみにとどまらず、又我が國文學の誇りとせられてゐる。前四十一帖は

光源氏を中心とした華やかな生活と、戀の種々相を寫した後十三帖は源氏の子薫を主とし、匂宮を客として淋しい宇治に悲しい實を結んだ戀、大君・中君・浮舟君のことを寫したものである。その最後の十帖は専ら背景を宇治にとつたので、通常宇治十帖と言つて、前四十四帖と區別をする。今各帖の名目と、極めて主なる事項とを摘記する。

一 桐壺 一——一二(これは源氏の年齢)

桐壺の帝、更衣を御寵愛。源氏出生。更衣薨後藤壺入御。源氏元服して(十二歳)葵上(十四歳)と結婚。

二 帚木 一七、夏

雨夜の品さだめ。空蟬を見初む。

三 空蟬 一七

空蟬の連れ子小君を手懐く。軒端の萩。

四 夕顔 一七

六條御息所方へ通ふ。五條の夕顔の宿。河原院の一夜。

五 若紫 一八

藤壺御懷妊、東宮(冷泉院)御出生、實は源氏の子。源氏わらはやまひを北山におこなふ。小柴垣のかいまみ。紫上十歳位。

六 末摘花 一八、春——一九、春

大輔の命婦の手引にて末摘花の許へ通ふ。

七 紅葉賀 一八、冬——一九、秋

桐壺帝御算賀(五十歳)。源氏青海波を舞ふ。源内侍(五十七八歳)との情事。

八 花宴 二〇春

臘月夜(右大臣六の姫君、弘徽殿女御の御妹にして今の東宮即ち源氏の義兄なる朱雀院の后がねと定まれる君)と逢ふ。

九 葵 二二——二三、正月

物見の車争ひ、葵上は夕霧を産みて間なく薨去。六條御息所は御子齋宮の姫君につき伊勢に下向。紫上(十四歳)源氏と新枕。

一〇 桐 二三、秋——二五、夏

桐壺の帝崩御。齋院更代（弘徽殿御腹三ノ宮下りて式部卿宮の姫君に卜定、源氏之にもいひ寄る、應ぜず）。藤壺御出家、薄雲女院と申す。

一一 花散里 二五、夏

源氏の繼母君に當る麗景殿女御の御妹女に三の宮といふがあり。源氏橘の花咲く頃をわざ／＼訪ふ。

一二 須磨 二六―二七

源氏自ら責を引きて明石に移る。方々との悲しき別れ。父帝の夢の御告げ。明石入道の迎への船。

一三 明石 二七、春―二八、秋

明石との契り。都に於ける天變地異。源氏有免。明石の別れ。七月廿日入京。

一四 落標 二八、十月―二九

源氏任内大臣。東宮十一歳にて御元服。源氏住吉を訪ふ。六條御息所は姫（齋宮）を源氏に託して薨去。源氏は姫を入内せしめんとの下心あり。

一五 蓬生 二八―二九、四月

源氏久々にて末摘花を訪ふ。

一六 關屋 二九、秋

源氏石山詣の歸途空蟬と遭ふ、夫伊豫守、常陸介の任解けて歸京の途次。往年の小君も大人びて今右衛門佐となる。空蟬は夫死して尼となる。前齋宮は源氏の後見によりて冷泉院の御妃として御入内、梅壺の女御といひ、後に「秋好中宮」ともいふ。

一七 繪合 三一、春

頭中將の御女（十三歳）弘徽殿女御といひて冷泉院（十二歳）の御妃なり。梅壺の女御（廿三歳）とかく年齢のへだたりによりて御仲親しからず、源氏之を憂ひて院の畫を好ませ給ふを幸ひ、女御二人を左右の主將として繪合を催す、薄雲女院判者し給ふ。左右とも何れ劣らぬ名畫ばかりなりしも最後に梅壺より源氏須磨謫居中に物せられたる繪を出されて勝となる。これより冷泉院しげ／＼梅壺女御がりわたらせらる。

一八 松風 三一

明石女兒分曉、明石の姫君といふ。源氏は三條院東の對をしつらひて花散里を迎ふ。明石は舊領大井の里に

うつる、松吹く風の音夜も晝もさびし。

一九 薄雲 三一、冬―三二、秋

薄雲女院崩御、夜居の僧事實を冷泉院に告げ奉る。紫上明石の姫君を乞ひとりて養ふ。

二〇 權 三二、九月

式部卿薨去。その喪によりて齋院下りて叔母君女五の宮の許にあり。源氏之に言ひ寄る。世人誤解して源氏女五の宮に通はせ給ふなど噂す。紫上寢食安からず。併し、權は源氏に靡かず。

二一 乙女 三三、夏の初め―三五、十月

夕霧元服十二歳。頭中將の姫君雲井の雁（十四歳）とは相思の仲なれど、御入内の豫定ありて許されず。惟光女（十三歳）の五節の舞姿もめでたしとて之と契る。

二二 玉鬘 三四、九月―三五の暮

玉鬘四歳にして九州下り。少貳母子の忠節。肥後の大夫の監玉鬘を所望す、逃げて上京。長谷觀音にて右近（玉鬘の母夕顔の侍女、今源氏の方に引きとらる）と

邂逅。右近がはからひにより、玉鬘を源氏の落し胤と披露して源氏の邸内に引取る。

二三 初音 三六、正月

立ちかへる春景色、源氏平和に情人の誰彼を訪ふ。

二四 胡蝶 三六、三四月

玉鬘益々美し。いひよる貴公子の主なるもの、鬚黒の大將。兵部卿宮。源氏自身も。

二五 螢 三六、五月

源氏執りもちて兵部卿宮と玉鬘とを會はず、折からの螢を忍びの提灯として。

二六 常夏 三六、六月

萬事につけて源氏の向ふを張れる頭中將、賞を懸けて夕顔との間に生まれし一女（實は玉鬘）を求む。實の一女はあり得べくもあらねど、賞與を目あてにあらぬ娘あまた集ふ。その中比較的眞に近きものは近江の君なり。而も品位風貌は玉鬘に下る。

二七 篝火 三六

源氏玉鬘に對して親らしからぬ挑み。

二八 野分 三六、八月
野分の紛れに夕霧始めて紫上を見る。源氏あらぬ心もや起さむとて、爾來紫の上と夕霧と接近せしめず。

二九 行幸 三六、十二月―三七、二月

三〇 藤袴 三七
大宮(頭中將の母君)薨去につき、夕霧も玉鬘も同じく藤衣、消息の贈答あり。

三一 横柱 三七、冬―三八、冬
鬚黒の大將玉鬘を迎ふ、横柱の君の悲しき離別。

三二 梅枝 三九、春三月の半ば
花やかなる宮廷生活の描寫、權より源氏に宛てて薫物に梅枝をそなへての贈物。香合。管絃。明石の姫君入内のいそぎ。

三三 藤のうら葉 三九、春―十月
夕霧中納言に昇進、雲井の雁を許さる。

三四 若菜上 三九、十二月―四一、三月
朱雀院御不例。女三の宮を源氏に託して崩御。源氏四十の賀。玉鬘若菜の羹を祝はる。源氏度々女三の宮を

訪ふ。紫の上不安。明石の姫君御懷妊。明石入道遁世。

三五 若菜下 四一、三月―四七、十二月
柏木右衛門女三の宮に逢ふ、小侍従のはからひなり、源氏早くも之を感じ、内心後悔。紫の上御胸のやまひ。

三六 柏木 四八、正月―秋
柏木悶死。女三の宮御落飾。

三七 横笛 四九、春―秋
夕霧落葉の君(女三の宮の姉君)にして柏木の妻なるに拘らず、柏木の氣に入らず、却て夕霧に慕はれし人を訪うて柏木が遺愛の笛を得、夢の告げによりて薫(表面は源氏と女三の宮との中の御子なれど、實は柏木が女三の宮と一夜のわりなき契りに産れし若君)に傳ふ。

三八 鈴蟲 五〇、夏―八月
源氏、入道女三の宮の御堂にて鈴蟲をめ、蟲の品さだめあり。杯二たびめぐりて、夜はほのくゝとあけわ

たる。

三九 夕霧 五〇、八月―冬
夕霧落葉の君を引きとりて懇ろにいひよる。雲井の雁實家に歸りてかくと告ぐ、頭中將立腹。惟光の女、藤内侍の二人雲井の雁と結託して落葉の君にあたる。

四〇 御法 五一、春―秋
紫の上薨去。匂宮(紫上の外孫、明石の姫君の御子)に色々かなしきあらしごと、源氏の悲哀。

四一 幻 五二、春―年のくれ、薰五歳。
紫の上薨去後の悲哀。

四二 雲がくれ 本文なし。源氏此の間に薨去。

四三 匂の宮 一四―二〇、正月(これより薰大將の年齢)高貴の方々の長逝。たきもの流行。

四三 紅梅 二四、春冬
按察大納言(柏木の直ぐ下の弟)北の方の連れ子を匂宮にすゝむ。

四四 竹河 一四、五―二三、秋
三位の中將(夕霧の子)竹河左大臣の女を娶る。

四五 橋姫 二〇―二二、冬
宇治八の宮のこと。薰の宇治通ひ。尼君留守の一夜の垣間見。老尼辨、薰未生以前の事實を薫に語る

四六 椎本 二三、二月―二四、夏
長谷のかへるさ。八の宮薨去。大君も薨去二十五歳薫中の君を思へども、已に匂の宮に許したり。

四七 總角 二四、八月―年のくれ
匂宮二條院をしつらふ、中君迎への爲め。

四八 早蕨 二五、春
中君、匂宮に迎へらる。夕霧六の君の御裳着匂宮へ進めんの下心なり。

四九 宿木 二六、二月―四月
中君御懷妊。匂宮浮氣。夕霧六の君を愛せずとて匂宮に苦情。中君薰大將をしたへども、今となりては詮なし。従妹浮舟を薦む。

五〇 東屋 二六、秋
浮舟の生ひ立ち、常陸ノ介の後妻の連れ子なり。折角の聲がね左近少將も先妻の娘に横取られて不遇に歎

く。二條院にて匂宮浮舟にいひよる。三條に閑居。ついで薰大將に宇治へ引きとらる。

五一 浮舟 二七

匂宮、大内記の手引にて薰の聲色をつかひ、しひて浮舟に逢ふ。薰四月上旬京迎への豫定、匂宮三月晦日同上。兩方の情使交々宇治に通ふ。遂に同じ日に落ちあふ。浮舟煩悶、身を宇治川に投ぐ。

五二 蜻蛉 二七

入水の浮舟、横川の僧都の妹なる尼君に救はる。

五三 手習 二七

あけくれ下げ尼となりて手習(手習の君といふ)。こゝにも尼君の亡き娘の婿がねと契りし中將といふが慕ひよる。

五四 夢の浮橋

薰、匂宮、浮舟の四十九日の營み、これを傳へきく浮舟の心地。遂に事實判明して薰より浮舟の弟を使として文を送る。浮舟は今更罪の上に罪を重ねじとて文もとらず、弟にもあはず。(三浦氏著日本文學辭典による)

八 源氏物語

五十嵐 力

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稻田大學教授
明治七年山形縣生

こゝに聰明にして情に厚く美を愛する一國の人間があつて、國民中の最高階級に位し、其の國最高の教育を受け、而して其の國特殊の文化が成立ちかけた時に生れたと假定せよ。此の時國民中の他の一國が彼等を保護して、衣食はもとより政治兵馬の實務に至るまで、煩はしい事は一切吾等が引受けるによつて決して心配な

さるな、たゞ、風雅の道に心を潛めて美しく美はしく世を送られよ。といつて、山水明媚なる一郭の土地を其の遊樂の場所にあてがつたと假定せよ。かくして彼等は生活の苦を知らず、事務の煩を知らず、干戈の慘を知らず、感情文藝の世界にほしきまゝに悠遊して二百年三百年を過したとせよ。其の結果、一代の風潮が感情本位になるべきは見易き道理である。従つて其の弊が流れて文弱になり、奢侈になり、淫靡になり、婦女子が重んぜられるやうになり、臆病な陰險な謀計が行はれるやうになつて、腐敗墮落を極むべきことも亦争はれぬ自然の徑路である。(第一節)

第一節

藤原氏專權時代の宮廷生活、公卿生活は、まさしくかくの如きものにして、又まさしくかくの如き結果に達した。彼等は支那、印度の文明が漸く我が國情と融和して、まさに特色ある文明が成立たうとする時にあたり、新文明建設の責任ある地位に居りながら、不思議な運命に操られて、現實と懸け離れた内裏雜式の生活を造ることとなつた。彼等は虚位を擁して、對人民、對國土の政務とは殆ど全く相關することがなかつた。大臣納言はたゞ朝廷の儀式を行

嵐・鴨
京都市右京區の西部にある嵐山と東山區の西境を流れる鴨川

ふための役目、大將中將は弓胡蝶に威嚴を飾る名義だけの武官、文官は民情を知らず、又知らうともせず、武官は武事を習はず、戦争を夢にも見ず、文武を問はずして満廷悉くこれ宮内官、悉くこれ風流歌人であつた。彼等ほど自然に遠ざかつた者は無い。彼等は嵐鴨の山紫水明を賞し、春花秋葉の美を争つたとはいふものの、脚下なる土地や、土地に關した物には一顧を與へる事をも屑しとしなかつた。露を見て、何の玉ぞ。と問ひ、農産物を見て、蕪めくもの、大根らしきもの、葱とかいふものなど言ふのが、彼等の間に於ける一種の誇で、土臭い物は賤山がつと共に、すべて「怪賤」の二義を兼ねた、あやしといふ形容詞の下に却け去られるを常とした。彼等は自ら稱した通り、地を離れ政務を離れた殿上人、雲の上人であつた。而して彼等を羨みながら、其の地位を奪はうとはせず、甘んじて其の下風に立ち、其の爪牙となり、藩屏となつて、彼等を荒い風にあてず、彼等の逸遊費を負担して風流を恣にせしめた者が即ち地下人等である。彼等は地下人が自覺して自立の念を起すに至るまで、快く雲上の夢を食ふことを得たのである。(第二節)

第二節

ダンテ
Dante (1265—1321)
イタリアの大詩人
神曲
Divina Commedia
ダンテの傑作
スコラ哲學
Scholastic Philosophy
第九世紀より第十九世紀のキリスト教哲學の主流

此の感情本位文藝本位の時代思想が十分に發展して行くべき所まで行つた社會——歌舞遊宴歌合繪合供養祈禱祭禮方違及び婦人中心の権力争ひなどが盛に行はれた社會——藤氏の專權を機會として造化翁が描き出した古今東西に比類なき情の社會——端麗なる容姿の前には虎狼も微笑を獻じ、物のあはれを知る者には鬼神も不義を赦すと考へられた社會——平安朝の前後四百年中其の特色の最もよく發揮された時代の社會——此の一あつて二なき社會再び現るべからざる社會をば、當時漸く出来たばかりの新しき假名文字を用ひ、今しも方に熟したる新國語を用ひ、洗煉推敲を重ねて、立派に活き／＼と描き出したものが、即ち紫式部の源氏物語五十四帖である。(第三節)

第三節

想を描いたといはれるほどの意味で、源氏物語が成熟したる平安朝の理想を寫したといふに異論はあるまい。又此の時代の文學は土佐日記竹取物語を初めとして、落窪物語、宇津保物語、古今集枕草子、狭衣物語、榮華物語、大鏡等、一つとして此の時代思想に觸れて居らぬはないけれども、源氏ほど切實に此の思想に觸れ、源氏ほど圓滿に此の思想を現したものはない。本居宣長は「玉の小櫛」に「源氏」を稱して、在來の物語に現れた人物の類型的なるに反して個性を書分けた書、在來の物語が事件趣向の奇拔を狙つたのに反して人情を寫し、平凡自然の事柄を寫した事、漢文一流の粗漫なる形式的文章に反して心理變遷の過程を精細に描いた事、これが此の物語の特色であるといふ意味のことを述べてゐる。これは時代を超越した卓見で、誨淫の書といひ、教訓の書といひ、佛理を現した作といへる類の愚説の、足許にもよられぬ大批評である。江戸中期以前の和漢の文學だけを見た人の批評とて、過褒の嫌はあるが、とにかく急所を捉へ得た名批評といつてよい。(第四節)

第四節

リチャードソン
Richardson
(1686-1761)
イギリスの小説家

パメラ
Pamela

ボッカチオ
Boccaccio
第十四世紀の小説家

デカメロン
Decamerone
ボッカチオの傑作
十日物語

最大傑作の一で、殊に現實的、自然的、平凡的精寫的なる最近文學の趨勢を豫想したと見られる點さへある。別して驚くべきは「源氏」が世界に於ける最古小説の一たる事である。小説を譬喩物語や傳奇の類と區別して、人情展開の過程を寫した物語といふ意味に解すれば、英國の小説はリチャードソンの「パメラ」の出でた一千七百四十年、即ち今より約百七十年以前に其の端を開くといはれる。西洋に於ける寫實小説の元祖と謂はれるボッカチオの「デカメロン」の公にされたのは一千三百五十二年、即ち今より約五百六十年前である。支那、印度には、無論、源氏以前に此の意味の小説といふものがなかつた。此の見地よりすれば、我が源氏物語は、日本に於ける最初の小説であるのみならず、又東洋最初の小説であるのみならず、或は世界に於ける最初の小説であるかも知れぬ、少なくとも世界最古最大の小説の一たる事は疑なきことである。然るに、かゝる古文學の寶典が名のみ徒らに高くして廣く讀まれぬは、何のためか。たゞに普通人の間に於てのみならず、國文研究者にすらも通讀されぬ場合の往々あるは何故か。思ふに、これ一つは其

の題目たる宮廷生活が後代の國民に對して餘りに懸け隔つて理解し難くなつたため、一つは平安朝の朦朧たるほのめかしぶりの語格文體が直截明快を欲する後世の讀者の理解力に多大の租税を掛けるため、一つは洗煉を極めて煎じ詰め過ぎた文體が、走り讀みを常として繰返して讀むことを好まぬ後世の讀者の頭に入り難いためであらう。かやうな面倒不便利はあるが、我が文學の誇となるべき此の傑作を、此のまゝ、棚に上げて敬遠主義を取るの

第五節

語句の解釋附文法・修辭法上の吟味

- 【兵馬】 ヘイバ。兵器と軍馬。轉じて、いくさ。
- 【風雅】 フウガ。詩經の國風と大小雅との義から轉じて詩文の意に用ひ、更に轉じて詩歌を作り、俗事を避け、高尚な遊をすることをいふ。みやびやか。
- 【心を潛める】 物事に専心になること。
- 【一郭】 イッククック。一區劃。
- 【干戈】 カンクワ。たてとほこ。即ちいくさの道具を總稱

する。轉じて戰爭。

【感情】 好・惡・快・苦または喜・怒・哀・樂などのやうな心の動き、即ち感覺又は觀念に伴つて起る一種の心理作用をいふ。從來は知と意との二つと共に心理作用の根本的なものと考へられてゐたが、今は人の心を斯くはつきりと分けることは間違であるといはれてゐる。感情と其の生理的變化との關係に就ては、ヴント其の他多くの心理學者は、情が内に動いて外に發すると言つてゐるがゼーム

ス・ランゲ等は、外に發して内に傳はるとしてゐる。即ち後説によれば悲しいが故に涙が出るのではなくして、涙が出る故に悲しいのであるといつた。

【文藝】 ブンゲイ。文學、即ち詩・戯曲・小説等をいふが、或場合には文學と美術とをひきくるめていふこともある。この場合は廣い意味に解してよからう。

- 【悠遊】 イウ／＼。ゆつくりあそぶこと。
- 【風潮】 フウテウ。時代の傾向。時世のおもむき。
- 【本位】 ホンキ。標準とか基本とかの意。感情本位とは感情を主とすることをいふ。
- 【文弱】 ブンジャク。文事に耽つて氣の弱くなること。
- 【淫靡】 インビ。みだらなこと。女色に溺れること。
- 【陰險】 インケン。内心にわるきのあること。
- 【墮落】 ダラク。道心を失つて惡道に陥ること。轉じて身を持ちくづすこと。不行狀になること。

【藤原氏專權時代】 藤原氏は天兒屋根命から出た。もと中臣氏を稱したが、鎌足の時藤原の姓を賜はつた。其の子不比等の四男が南・北・式・京の四家に分れ、就中北家が

最も盛んであつた。世々皇室の外戚となり、基房が攝政となつて以來、朝政を左右し、最も繁榮を極め、所謂藤原時代を現出した。武家が興るに及んで其の實權を奪つたが、五攝家は尙攝關の名を擁して連綿明治維新に至つた。源・平・橘と供せて四姓と稱する。

- 【宮廷】 キウテイ。宮城と同じ。皇居。御所。宮殿等。
- 【公卿】 コウケイ。公と卿との官。三公九卿、轉じて高位高官の稱。我が邦では攝政・關白・大臣(公)と參議・大中納言・三位以上(卿)との總稱。また殿上人の總稱。クゲ、公家。もとオホヤケの義で天皇即ち朝廷の稱であつたが、後には武家に對して、朝廷の官吏の稱となり、堂上摺紳を呼ぶ名となつた。徳川時代には諸公家法式五箇條が定められ五攝家、七清華の家柄を初め階級が多い。五攝家は九條・二條・一條・鷹司・近衛、清華は昔攝家の次に位し、大臣になり得る家柄で、久我・三條・西園寺・徳大寺・花山院・大炊御門・今出川家を七清華といひ、後に廣幡・醍醐を加へて九家となつた。明治二年に至り此の稱を廢して華族と稱することとなつた。公家華族、大名華族とならべいふ。

【融和】 ユウワ。とけて一つになること。又とかして一つにすること。融合と同じ。

【現實】 理想・空想・想像などに對していふので、實際の事實又は現在の状態の意である。

【内裏雜式】 ダイリビナシキ。内裏雜のやうにたゞ裝飾的形式的のもので、實力を伴はないことをいふ。内裏雜とは内裏様と同じく天皇の御様に擬した大形の雜人形をいふ。

本朝二十不孝に「大和の國吉野の里に、内裏雜を立てて、娘友達集り、彌生の節句遊び。」

芭蕉句集に「内裏雜人形天皇の御宇とかや。」

【虚位を擁す】 キョキをヨウス。虚位は名のみあつて實權の伴はない地位。空名の義。擁すは、抱く、もつ。

【大臣・納言】 ダイジン・ナゴン。大臣は一國政治の重任に當る大官。古、太政官の上官。太政大臣・左大臣・右大臣、内大臣等の稱。おほいまうちぎみ。納言は大・中・少納言の總稱。

大納言—大寶令制の官職で、太政官の次官。大臣と共に

天下の政治を議し、大臣なき時は太政官の政務を專行する。天智帝の御時御史大夫を置き、弘文帝の時大納言と改め、大寶令に四人と定めた。後増減があつた。

中納言—昔時の官職で令外の官。大納言を助けて政務を掌る。持統帝の時既に在つた。大寶元年に廢して令制には入つてゐない。慶雲二年に復置いた。孝謙帝の時更に權中納言を置いた。

少納言—大寶令制の官職。三人ある。内印（天皇御璽）。

官印（太政官印）を取扱ひ、行事を奏宣し、鈴印傳符を請進することを掌る。侍従を兼ねる例であつた。藏人を置いてから、其の職權を失つた。

【胡簾】 ヤナグヒ。矢を入れて背に負ふ具。えびら。

【威嚴】 キゲン。おごそかで犯し難い風格。莊重な風格。

【文官】 ブンクワン。文を以て仕へる役人。武官の對。

【武官】 兵事に關する官吏。文官の對。

【民情】 しもくのありさま。

【滿廷】 マンテイ。朝廷に列る残らずの人々。滿朝。

【宮内官】 クナイクワン。宮内省の官吏。宮内省は大寶令

制八省の一。諸國の調物及び官田を管理し、内廷の供御御

用度を掌る。被官に大膳・木工・大炊・主殿・典藥の五寮、正親・内膳・造酒等十三司があつたが、後合併したものが多し。長官を卿とし、輔・丞・録等の職員がある。明治二年復興して帝室に關する一切の事を處理する。

【嵐・鴨】 アラシ・カモ。嵐山は京都市右京區の西にある一小山。麓を大堰川が流れ、山水が明媚で、殊に櫻楓樹の眺めがよい。櫻は龜山天皇が吉野の名種を移植遊ばされたものだといふ。

拾遺集に「朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦きぬ人ぞなき。」

鴨川（加茂川）山城國愛宕郡の山間に發し、鞍馬・貴船等の諸川を容れ、京都市の東部を貫流して紀伊郡に入り、桂川と合する。河水は古來染工業に適する。その染物を鴨川染といふ。京都市内では荒神口・三條・四條・五條の四大橋がかゝつてゐる。

【一顧を與へる事も屑しとしない】 ちよつとふりかへつて見る事すら快く思はなかつた。全然眼中におかなかつ

たことをいふ。

【露を見て「何の玉ぞ。」と問ひ】 僧正遍昭の歌「はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく。」によつたのであらう。

【蕪めくもの】 めくは其の如くなる、其の状に見えるなどの意にいふ語。

【賤山がつ】 シヅヤマがつ。賤はいやしいもの。下賤のもの。山がつは山里に住む賤しき樵夫ヤコリヤマヒト人などの稱。

【殿上人】 テンジャウヒト。四位五位の人々の、昇殿を許された者の通稱。藏人は六位でも殿上人である。昇殿といふのは、元來、清涼殿の殿上の間に昇る事を聽されるの謂で、四五位の人とは勿論、公卿でも、昇殿を許されるのと、ゆるされぬ者とがあつて、殿上人の人数は定まつてゐない。多い時は百人餘にも及んだといふ。

【雲の上人】 クモのウヘヒト。上は主上を始め奉り、下は禁中に仕へ奉る殿上人、女官等などの稱。公卿・殿上人の總稱。雲客。

【爪牙】 サウガ。つめときば、轉じて自分を助けまもるも

の。

【藩屏】 ハンベイ。まがきとかこひ。守りとなるべきものの守護。

【地下人】 チゲニン。五位以下の昇殿を許されない官人の總稱。又四位・五位に敘せられても、累世昇殿を許されない家格の者。堂上・殿上に對していふ。公家衆からそれ以外の身分の低い者を指していふ。

【時代思想】 如何なる時代にも、其の時代を通じて流れる特有な思想があつて、其の時代の文明に特殊な色調を添へてゐる。その思想の傾向を時代思想といふ。

【歌合】 ウタアハセ。歌人が左右に分れ、所詠を出してその優劣を競ふこと。雙方に頭人・讀師・講師・審判があり、又判者があつて優劣を判する。在原行平の家で行はれたのを初めとして、中世盛んに行はれ、天徳歌合(天徳四年清凉殿で行はれた。)が最も其の名を知られてゐる。詩歌合・句合等、皆之から出た。

【繪合】 エアハセ。左右二組に分れ、繪卷物を出して優劣を競ふ遊戯。中世以來行はれた。源氏物語にも繪合の卷

がある。

【供養】 クヤウ。身口意の三方法を以て財を供へ行を進めて三寶を資養すること。敬供養は堂舎の裝飾、行供養は讀經禮讚等、利供養は飲食衣服等を進めること。又三寶に對して佛法僧供養の名がある。

【祈禱】 キタウ。神佛に所願を祈つて災禍を拂ふこと。もと道家の語である。佛教では之に法式を立て、式の如く行へば佛力を被つて所願が成就するといふ。眞言宗・日蓮宗に多い。基督教でも行はれる。

【方違】 カタタガヘ。天一神又は金神の方位を凶とし、其の方角に行く用のある時は他を迂回して宿泊し、方向を變へて行く事。平安朝時代に盛に行はれた迷信で陰陽家から出たもの。源氏物語などにも屢、あらはれてゐる。

【造化翁】 ザウクワラウ。造物者。

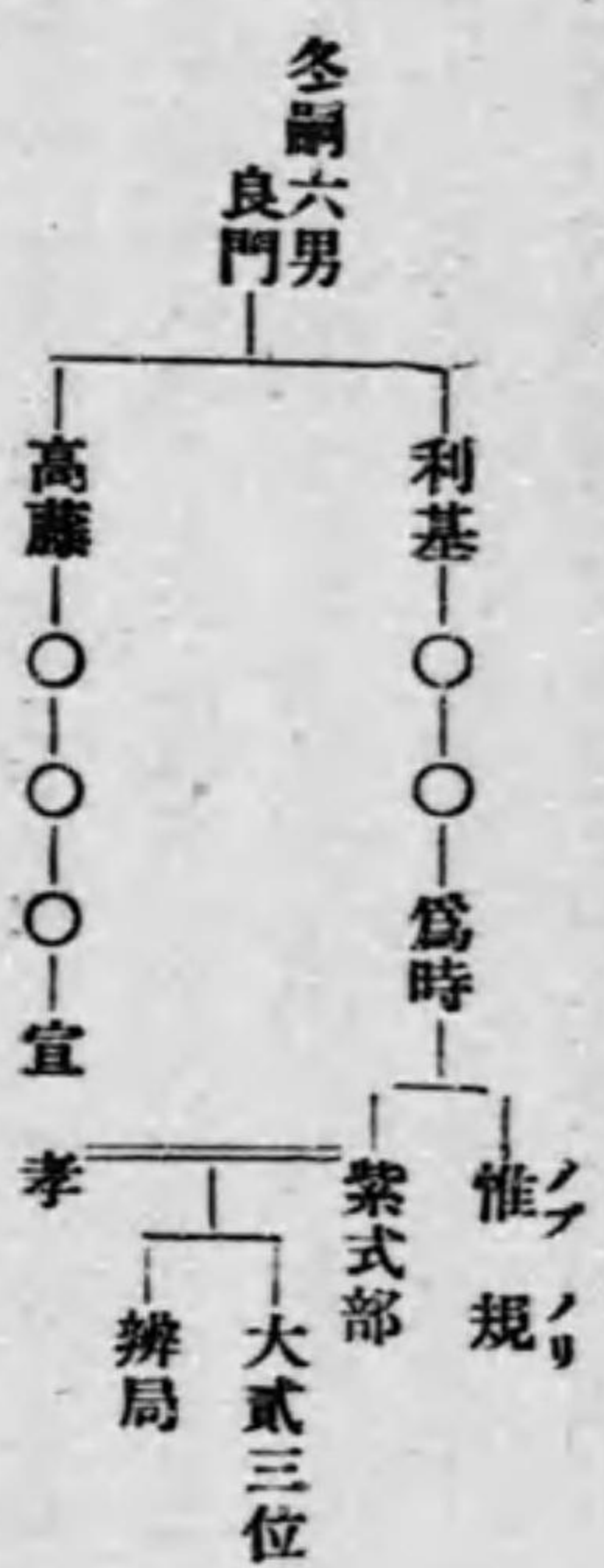
【端麗】 タンレイ。姿の正しく美しいこと。

【方に】 マサに。

【推敲】 スキカウ。詩歌の字句を練り工夫すること。湘素

雜記に唐の詩人賈島が「僧敲月下門」と「僧推月下門」の二句に就いて何れを取るべきかに苦心し、途上夢中で、時の權知事韓愈の儀衛に衝突して引立てられ、愈の意見で敲の字に決したといふ故事から出た語。

【紫式部】 ムラサキシキブ。藤原爲時の女。藤原宣孝に嫁した。資性敏慧、學を好んで和漢の典籍に通じ、最も歌文に巧みであつた。早く寡居して、一條天皇の中宮上東門院に仕へた。嘗て源氏物語を作つた。辭藻艶麗、古今の稗史中之に優るものはない。又貞淑優婉を以て稱せられた。家系は次の通りである。



【ダンテ】 Dante。沈黙せる十世紀の聲と稱された伊太利の大詩人。フロレンスの貴族の家に生れた。三十五歳の時選ばれてフロレンスの市吏となり、市の公務に盡力した。後、ゲルフ及びギベリンの内亂に際し、市外に放逐

せられて漂泊の身となり、彼の萬代不朽の大作たる「神曲」を草するに至つた。ラヴェンナで死んだ時、フロレンスの民は争うて其の屍を得ようとした。墳墓は今尚ラヴェンナに在る。「神曲」の外にも名作が多い。

【神曲】 世界的の大詩人伊太利のダンテの作品の名である。神曲は地獄界・淨罪界及び天上界の三部から成つて、要は意を自己の幻影に託して、彼岸の他界を描くにある。地獄界・淨罪界に於ては、詩人のビルギリウスを導者とし、最後の一篇に於ては、ダンテが幼年よりの戀人で、そして天死した佳人ベアトリツェを先達としてゐる。全篇の示すところの觀念は罪惡の擺脫と天國の獲得とにある。これは單に中世紀の産出した最大最高の文學であるばかりでなく、或意味に於ては、中世紀の精神的生活を最も明瞭に顯はしたものである。

【スコラ哲學】 一に煩瑣哲學ともいふ。基督教々會の教義の眞義に協へることを論證せんとする中世紀の哲學。教會の信仰を確實なる眞理として假定する。故に神學の婢と稱せられる。九世紀に始まつて十五世紀に終つた。

【落窪物語】 オチクボモノガタリ。四卷

王朝時代の繼子いぢめの物語。或中納言が、今の北の方との間に多くの姫君を設け、それ／＼掣えりして時めかせてゐる中に、先の故北の方の姫君だけは寢殿の廂の凹まつた一室に蟄居して毎日世をはかなんで暮らして居られる。落窪の君といふ綽名がいつか通り名となつた。けれども落窪の君こそ理想的の歸人で、容貌・才智共にすぐれ、和歌に手藝に圓滿具足の人物であつた。それで常姫に同情してゐる阿漕といふ侍女と阿漕の愛人帯刀とが執持つて、近衛少將の君といふのに逢はせる。二人の交情が親密になつて、少將は別邸へ姫を引取り、ついで新奥方となり、父母の君も優遇される。そこで少將は愛妻のために中納言家に對し、機會ある毎に復讐する。中納言は心外さに怪しからぬことと憤つたが、段々事情が分つて自分の非を悟り、意地悪の北の方まで遂に屈伏すると、少將はそれ等をも庇護して、結局めでたし／＼に畢る。

【宇津保物語】 ウツボモノガタリ。昔清原俊隆といふ青年

貴族が入唐の途次颶風に遇うて波斯に漂着し、梅壇の林に天人の琴を得、歸朝して京の三條京極の邊りに居を占める。俊隆に琴を習つた一女があつた。當年十五歳で才色雙絶の噂が高かつた。時の太政大臣の子兼雅はこれに通ひそめて一男を産んだが、後、永らく音信不通であつた。その中俊隆は病死し、援助する者もないので、その女は活計の路を失ひ、遂に北山なるうづぼの(大木のうつろ)中に母一人子一人(子は五歳)の侘住居してゐた。熊や其の他の鳥獸がその孝心にめで、色々の木の實草の實を運んで、このあはれな母子を援けてゐた。その中、兼雅が狩に來てこれを見つけ、再びその家に引きつた。兒は美しく成長して元服し、仲忠と名のつた。當時の權貴左大將藤原正頼は仲忠の人物を見込んで自邸に招き、十四人の姫君の内誰かを引出物にしようとした。十四人の姫の中で才色眞に絶世なのは第九の貴宮であつた。此の貴宮の愛を得ようとする。兵部卿宮以下十四人の貴公子は各、自己の長所を以て或は策略を以て言寄つた。一輪の名花は遂に月の都東宮の坊に入興した。これ

が爲に失戀者は訴訟を起して却て流罪に處せられた者、焦れ死をしたものもあつた。仲忠は帝の一の宮を得、他の貴公子もそれ／＼他の姫君を娶はされて、各々の戀に自得した。仲忠は京極の舊宅を開けて、亡父が遺愛の琴や書物を朝廷に獻じ、褒美として小野宮清慎公の石帯を賜はり、仲忠の一族はめでたく榮えた。

【狭衣物語】 サゴロモノノガタリ。嵯峨院の皇帝堀河の大臣が、先帝の妹を娶りその間に出來た一子狭衣大將と、先帝の末の姫君源氏宮とを男女の兩主人公としての戀物語で、源氏から暗示を得た跡が著しく、あらはに源氏を引いた所もある。著者は大貳三位とも、辦局とも、親子内親王宣旨とも謂つて未詳である。構想、詩趣、行文凡て源氏に摸して及ばざるものである。

【榮華物語】 エイダ、モノガタリ。四十卷。我が國で始めて書かれた國文の歴史で、宇多天皇から堀河天皇に至る十五代二百餘年間の事象を編年體に敘述して、これに美的題目を附けたものである。榮華と名づけたのは主として關白道長の榮華を描いたからで、物語はこの期通有の

小説的散文の稱呼である。著者は未詳であるが、赤染衛門の作といふ説が有力である。

【大鏡】 オホカミ。八卷。文徳天皇の嘉祥三年(一五一〇)から、後一條天皇の萬壽三年(一六八六)まで百七十六年間の記傳體國文の歴史で、發端に雲林院の菩提講に落ち合つた夏山繁樹(百四十餘歳)と大宅世繼(百七十六歳)とが若侍などと、講師待つ間の茶話に、文徳天皇以後代々の出來事を話したのを記録したことになつてゐる。大鏡といふ書名は「あきらけき鏡にあへば過ぎにしもいまゆくするの事も見えけり」(繁樹)「すべらぎのあともつぎ／＼かくれなくあらたに見ゆるふるかゞみかも」(世繼)などの唱和から起つたものであるらしい。始めには歴代をあげ、次に藤原氏の攝關をあげ、最後の第八卷には賀茂・八幡兩社の臨時祭、九月節會止の事などを記してゐる。作者は未詳であるが、藤原爲業だといふ説が有力と見られる。

【本居宣長】 モトリノリナガ。伊勢松坂の人。先祖は平氏で、池大納言頼盛卿五世の裔小津三四右衛門定利の子。

江戸の通油町に木綿織の出店を開いて居たが、父の病死と共に店運が衰へたので、遂に閉店した。けれども賢母村田勝子は宣長の性格を見ぬき、醫者にしようとして、京都の人武川幸順について其の法を學ばせた。宣長はそのうち多方面の修養をなし、漢學を堀景山に、和歌を森河章尹に學んだ。しかし宣長の生涯に至大の影響を與へたのは賀茂眞淵であつた。彼は眞淵が伊勢參宮の歸途旅宿に於て一夜の會見をなし、之から古典の研究に心を傾け、文書の往復によつて指導を受け、三十有五年の努力によつて不朽の大作古事記傳を完成した。その他源氏物語玉の小櫛・歷朝詔詞解・萬葉集玉小琴・古今集遠鏡・新古今集美濃の家づと等を著した。これらは何れも訓詁の書として後進を裨益してゐる。彼は又物語和歌に關して、從來の勸懲主義以外に「物のあはれ説」とも謂ふべき純文學的見解を立てた。即ち作者が物のあはれに感じた心持を表現して讀者をして十分にそれを感じしめるといふ説である。そこで和歌はあくまで調を整へ語を美しくせよ、換言すれば新古今集を目標とせよと謂つた。彼は又西行以

來の櫻愛好の歌人であつた。それはもとより趣味であるが、其の基く所の一半は國粹主義的の見解から櫻を以て國民性の象徴と看做した點にある。人口に膾炙してゐる「敷島の大和心を」の一首は、彼が還曆の折自畫像に讃したものである。

【玉の小櫛】 本居宣長著。源氏物語を評論考證し、兼ねて諸註の誤謬を正したものの、所々に註解をも加へてある。なほ次を見られよ。

【本居宣長は「玉の小櫛」に「源氏」を稱して、……これが此の物語の特色であるといふ意味のことを述べてゐる】
本居宣長の玉の小櫛は全部九卷から成る、第一・第二兩卷は源氏物語に關する考證と評論で、他は註釋、校合などである。その中評論に關係あるものは「一、すべての物語の事」「十二、大むね」(以上第一卷)「十三、なほ大むね」「十四、くさくさの心ばえ」(以上第二卷)などである。

「すべての物語の事」に

「いづれの物語も男女のなからひの事むねとおほく書き

たるは、よゝの歌の集どもにも戀の歌の多きに同じことわりにて、人の心の深くかゝる事、戀にまさるはなければなり。」とあつて、物語の性質を道破してゐる。

「大むね」なほ大むね」に

「そもく紫式部が本意、とにかくに物のあはれを知るをむねとはして、しらするがいふかひなきことは更にも言はず……心のうちむすぼはれて、しのびこめてはやみがたきふし／＼をその作りたる人のうへによせて、くはしく細かに書きあらはして、おのがよしともあしとも思ふすぢ、いはまほしき事どもをも、その人に思はせいはせて、いぶせき心を、もらしたる物にして、よの中の物のあはれの限はこの物語に残ることなし。」又、

「源氏の君の上にて、空蟬の君の事、朧月夜の君の事、藤壺中宮の事などのごとし。戀の中にも、さやうの、わりなくあながちなるすぢには、今一際ものあはれ深きことある故に、こと更に道ならぬ戀をも書き出で、その間の深きあはれを見せたるものなり。」
「くさくさの心ばえ」に

「すべて文詞のめでたき事は更にも言はず、よにふる人のたゝすまひ、春夏秋冬をり／＼の空のけしき、本草のありさまなどまで、すべて書きさまでたき中にも、男女その人々のけはひ心ばせをおの／＼こと／＼に書き分けて、ほめたるさまなども、皆其の人々のけはひ心ばへにしたがひて、ひとやうならず。よく分れて、うつゝの人にあひ見る如く、おしはからるゝなど、おぼろげの筆のかけても及ぶべきさまにあらず。(本課に言ふ所の、在來の物語に現れた人物の類型的なるに反して個性を書き分けた事。)さて又よろづよりもめでたき事は、まづ唐文などはよにすぐれたりといふも、世の人の事にふれて思ふ思のありさまを書けることは、たゞ一かたりのみこそあれ、いと浅きものなり……(本課に言ふ所の、漢文一流の粗漫なる形式的文章に反して心理變遷の過程を精細に描いた事。)大方人の情のあるやうを書けるさまは、やまともろこし古いまゆくさき／＼にもたぐふべきふみはあらじとぞおぼゆる。又すべて卷々の中に珍らしく、おどろ／＼しく、めさむるやうの事は、をさ／＼なくて、